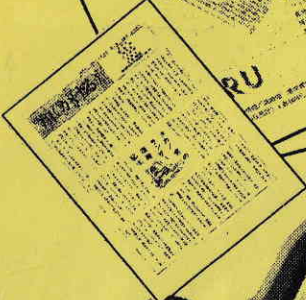
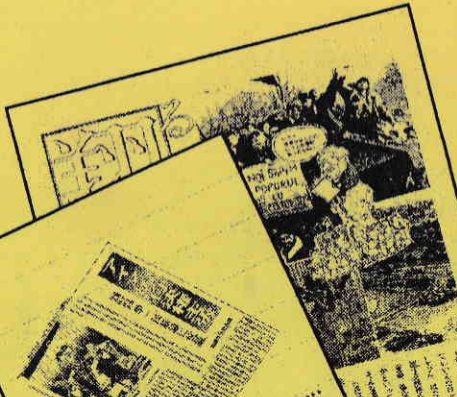


# 翔る 100



陽  
子

新

## 追悼

二〇〇一年正月、佐伯陽介先生は全く突然逝去されました。

大和市斎場に『翔る』編集人・執筆者・読者一同顔をそろえたわけですが、佐伯先生の人柄と合わせて友好を温めてきた広さにおどろきました。

『翔る』は執筆と読者を佐伯先生に負うところ大でありました。先生亡きあと、数か月で永き休刊としなければなりません。先生は生前『翔る』編集人全員に色紙を残されました。

佐伯陽介先生は、戦前戦後の共産主義者として多数の著作をものにしてきました。『翔る』に執筆する直前には、「世界革命綱領」「マルクス敗れたり」などを出版した直後でした。一九七〇年代から佐伯陽介独自の世界観、独自の革命論を展開し、世界経済分析手法も独自のものでした。それは、「実体」「実証」を重んじる手法でした。したがって「階級闘争至上主義」とらず現に存在する運動を将来にわたる位置を与えるべく理論したのです

私は、佐伯理論に必ずしも賛同するものではありませんが、独自の発想とその研鑽にはいつ

も頭の下がる思いでした。いうまでもなく私の、アイヌ民族の解放、台湾や東ティモール、沖縄の自決解放の運動にいち早く理解を示してくれたのも佐伯先生でした。

佐伯陽介は、戦争反対の意志の持ち主、共産主義者のカドで陸軍刑務所で「八・一五」をむかえたそうです。陸軍刑務所から五体満足で「八・一五」をむかえたのは佐伯陽介ほか数名と聞いており、非転向としては先生のほかに知りません。一九五一年には党を離れたということもあって、また党内における組織上の名前や執名は知りません。

佐伯陽介先生と出会ったのは、「北熊本自衛隊暴破未遂」爆発物取締り罰則違反、「市ヶ谷自衛隊火炎瓶攻撃」障害及火炎瓶取締法違反容疑者・生田正美を通じてでした。生田正美は獄中であつて広く文通・論争をしており、その論争の一人が佐伯陽介先生でした。

先生には、生田正美支援と合わせて私も大変ご教授いただきました。

ここにあらためて生前のご恩にお礼を申し述べます。

二〇〇三年七月二〇日

佐藤秋雄

【目次】

このごろ	遠藤和夫	一
ある雪降る日の父と子の会話	大森昌也	一〇
ご無沙汰のお詫び状	渋谷映輔	二六
四方竹	徐新民	三三
鄭佑のはなし	徐新民	三八
『アメリカ頼みの拉致問題解決を、 どのように考えたらいいのだろうか』	種橋誠治	五三
生命の卵	樋ヶ守男	六〇
『翔る』廃刊記念号に寄せて	福井武	六九
日鉄溶接工業時代のこと	望月彰	七二
自然と人間の本源の統一の再獲得	守田典彦	八〇

国立虎の門病院を退院してからの現在の私	山崎守夫	八九
安全と安心を追求することが平和へ続く	坂本一夫	一〇〇
一〇〇年後の日本は	和田博	一〇八
映画『モンドビーノ』を見て	木根輝雄	一一四
日本農業の復権	佐藤秋雄	一二二
『翔る』読者の皆さんへ		二〇〇

長年にわたり、『翔る』をご支援・ご指導いただいた読者の方々に改めて御礼申し上げます。本号に投稿いただきました文章は原則五〇音順で掲載させていただきます。

また、巻頭に掲載しました題字は『翔る』の精神的支柱でもあった故佐伯陽介先生より、在りし日に編集委に寄せられたものです。二〇〇三年八月一五日発行の一八二号掲載の追悼文を併せて掲載し、ここに改めて哀悼の意を表します。

## このごろ

信州小谷村 遠藤和夫

ながらへば また このごろや しのばれむ  
うしと見し世ぞ いまはこひしき

という歌を知ったのは、いつ頃のことだったろうか。意味が判るようになって、出会った、といえるのは、やはり高校生になってからだろうか。

生きていると、いろんな言葉に出会い、その思いや考えに、感銘したり、影響を受けたりするものだが、この歌は、永く、生きる支えのように、いつも傍に在った。

僕は一九四七年、昭和二十二年、亥の生まれ。

来年は六〇才、還暦である。とても信じがたい。

六〇才といえ、少年の時の記憶では、老人じゃなかっただろうか！

自分がもうそんなに永く生きて来た、ということも、もう既に六〇年の歳月が経った、ということも、自分がいま老人であるということも、どんな意味でも、信じがたい。

多分、醉生夢死して一生を過ごしているせいなのだろう。

歳月を経る、というのは面白いもので、身体の衰えは、これはもう如実に感じて、哀しいほどに憐れむばかりなのだが、心が衰えるかというのと、それは、そうばかりでもない。

少年から青年期にかけては、心はすぐに傷つき、苦しくてたまらなかった。いつそ早く、傷だらけになって、かさぶたが鎧のように心を覆えば、血を流すこともなくなるだろうと半ばやけくそ気味に願っていたことを思い出す。

大学の三年、四年の頃のことは、何やらボーとしていてよく憶い出せないのだが、その頃

美<sup>うるは</sup>しきもの見し人は

はや死の手にぞ 渡されつ

世のいそしみにかなはねば

されど 死を見て ふるふべし

美しきもの見し人は

.....

この世におもひをかなへんと

望むはひとり痴者ぞかし

.....

ひと息ごとに毒を吸ひ

ひと花ごとに死を嗅がむ

美しきもの見し人は

げに泉のごとも濁れはてむ

ドイツ浪漫派プラーテンという人のこの詩に出会い、死にたかった訳でもないし、死のうと思っていた訳でもないのだが、妙なことに、嗚呼、僕も生きていてもいいのだ！ と、世

の中には、自分の座る椅子は無い、無くたって片隅にうずくまっていればいいのだ、とても思っただろうか、なんだかとても救われた気持になった。

学校もやめて、まともな職にも就いていなかった僕は、自分が全く世のいそしみに適っていない人間だということも知っていた。いずれ大都会東京の、よくて路地裏の木造アパートで、もしかすりや新宿の地下通路で垢にまみれて野垂れ死するのだろう、と漠然と思つていたので。

(後年、新宿の住人たちが街角や通路から排除された時かつての僕がそこに居やしないか、見知った人がいるのではないかと、食い入るように画面を見詰めたものだ)

それ以来、墜ちてゆく下の方や、過去の昔の方ばかり見ることはなくなつていったような気がする。

それは丁度、「空にまた陽が昇るとき、若者はまた歩きはじめる…」という佐藤オリエの「若者たち」の唄が静かに胸にひびき、深夜喫茶から薄明るくなった地上に出て新宿を歩けば、「マチは今サバクの中あのカネを鳴らすのはアナタ…」と和田アキ子の唄声が街に流れる頃だった。

その頃の僕は一体、何をしていたのでろう。

女とくつついて嬉しそうな顔をしている奴を横目で睨みながら「ながらへばまたこのごろや…」と思つていたにチガイない。

大都会の群衆の中にまみれて、彼らの労働の熱気や、食い扶持をカスめて喰つていくのだろうナ、となんとなく感じていた僕が、長野の山の中で生活を始めたのは、確とした考えがあつた訳では無論ない。ナリユキそのものなのだが、朝の私鉄の車内での身動きもできずにモミクチャにされるといふ変なカイカンと、新宿で乗り換えの国電に乗れないといふ苦痛から逃れたかつたから、というのは、幾分か理由になるかもしれない。

古来、負け犬は北へ逃れるものだが、僕の都落ちは北帰行ではなく、西へという中途半端なものであつた。

昭和四八年二五才のときである。

二〇代の後半が一番しんどかつたかもしれない。未練と諦めが交錯し、格闘をして心と神経が安まることがなかつたのだろうか。

所帯を持って、児を成して、おそらく人は誰しも同じようなのだろうが、漸くに、人間として自分の能力や器の境を受け入れて落ち着いて来るのだろうか。心が鈍く、それとも大きく、又は深く、なるのだろうか。

心の奥に、燠あつきがあるのは知っているが、それをおこす風は仲々、吹かないような気がする。みなみらんぼうの「途上にて」という歌をご存知だろうか？

風が激しく 吹いている

愚かな昔 淫らにすぎて

路は途上で 夢も破れた

そんな昔は 幻か

風よ運べ 燃える想いを

火を放て 俺の心に

というような歌詞で、旋律だつて小林旭の「熱き心に」ほどではないが、充分に心を揺さぶ

られる。

三〇代はこの唄を口ずさむことが多かつたのは、まだ、情熱と客気が残っていて、何かを心待ちにしていたのだろうか、よくわからない。

三〇代の終わりごろ、敬愛する先輩に相次いで死なれた。彼らは丁度、厄年の頃だつたのだ。

その頃、彼らは全く、僕の生きる支えだつた。何故なら彼らは僕よりもずっとこの人の世のくらしに適していなさそうだったから。

定職らしきものもなく、妻子を抱え、回りの人間に大いに迷惑をかけながら、いや、回りにいる知友が喜んで援助をするような雰囲気を身辺に漂わせているといふことからがもう人間離れをしていて……。金が無かつたつて無垢な魂がここに在る、ということが、どれだけ生きる励みになつたか。

既に二〇年近く経つけど、今でも、身ぶるいするほど会いたい。会えないけど、返事はないけど、時々、何処かに向かつてつぶやいてみる。「まだ、生きてるよ」とか「いつか、また会えるだろうか」とか



大空は

恋しき人の 形見かは

もの おもふごと

ながめ らるらむ

流れる雲や浮かぶ雲、夕焼けの空は、過ぎた日を想い出させるが、夜空の星の瞬きや、流れる星屑などは故人が地上を見ているのかもしれない、などとあらぬ思いを抱かせる。

他人の死に会うことによって、人は自分の心を落ち着かせていくのだろうか。

随分いろんな人が、彼岸へ渡っていった。

可哀相な人もいた、勿体無い人もいた、悔しい人もいた、良かったのかもしれないと思う人もいた、僕より年若い人も何人もいた。

そして、不惑を過ぎ、昨日と同じ今日を過ごしているうちに五〇才も過ぎ、天命を知るところか、やっぱり惑い続けているうちに、五〇代も過ぎようとしている。

「憂しと見し」あの頃がいまでは「恋しい」かと云えば、まだそうではないが、「そんな時代も」あったな、といくぶん懐かしく感じられるようには、なった気がする。

そして、もう

来年は、還暦だという。

還暦というのは、字の如く、暦がめぐって「青春・朱夏・白秋・玄冬」と季節が過ぎてまた再び、青春が巡って来るということである。

そう思えば、身体に少々ガタがきたのも、ゼニがないのもなに大したことではない。

「青春」だと思えばいいのであって、それだけで何やら心が華やぐ。

そうして、青春には、恋がつきものだから、また「誰かに」か「何かに」か恋をして、心に張りのある生活をしよう。

この六月には末の息子が卒業するはずだから、そしたら少しは世間に目を向ける余裕もできるだろうから、そしたら、自分出来ることを少しずつ、少しずつ、何かして、銭を貯めることにしよう。

なにせ、六文の銭が無いと三途の川の渡し舟に乗せてもらえないのだから。

## ある雪降る日の父と子の会話

大森 昌也

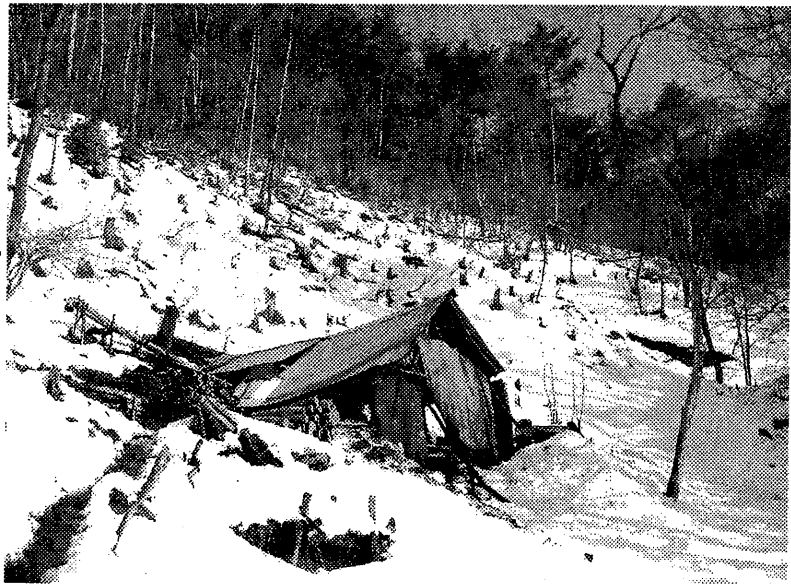
毎年、「今年も異常気象やねエ」があいさつ代わりである。今年も、昨一二月初めから三月中頃まで、ずーつと雪が降り、未だ山間の田畑には残雪がある。農作業もままならず、薪ストーブのお守りをする日々である。そんなある日の、父と子の会話である。

「お父さん、小さい頃サベツされたんだった」とポツンと聞くのはちえ（一九）である。今年の四月二六日で二〇才になる。ソ連（ロシア）のチェノヴィリ原発事故の日に生まれ、再び悲惨な事故をくりかえさない知恵を願って名付けられた。三月にキューバに行く。チェ・ゲバラが好きという。「さらに、名前のいわれが加わったねエ」と取材で来訪したルポライター作家の鎌田慧さんの弁である。（週刊金曜日二〇〇六・三・三一 六〇〇号記念号の五頁〜五七頁参照下さい。）

さて、「そうやねエ、もう五〇年も前になるが、その頃、先の戦争で天皇に殺された父親の出身のブラクで暮らしていた。小学校に行くがいつもお父さんは、廊下にバケツを持って立たされた。バケツ置いて、学校を出、裏山で遊ぶ。母親にしかられるのが恐くて、こつそり帰り、押し入れに隠れる。いつの間にか寝込む。「昌ちゃんがいらない」と大騒ぎになる。そんなこともあったなあ」

「ふーん、教師のサベツやねエ」とちえ。

「そう、教師だけでなく、子どもたちも、町はずれにあるブラク（西奥という地名）への一歩道帰るとき、後から石を投げつけら



れ、心配し迎えに来ていた祖母の「こらあー」の叫び声が耳に残るなあ」「幼稚園、小学校時代、なんの楽しいことなく、嫌なことばかりだった」

「昔は、そんなに敵しいかったの？ 今頃は、そんなにサベツされたことはなかったと思う」とつぶやくちえ。

「お父さんは、今、ブラクに住んでないけど、本（注①）やテレビ（注②）でブラク出身を明示（あきらかに）している。当然、ちえちゃんらのことを考えてのこと。もう、ブラクにこだわらな！ の声もあるなあ。」

「ブラク民というのは、なにか特別のものとして、自明に存在するというような実体のある概念ではない。人と人の関係のなかで、ブラク民としてのアイデンティティを意識する。サベツがひよっこりあらわれる。まあ、そんなで、大多数の人々は、関係ないよと、無関心をよそおうじゃないかなあ。」

「だから、ブラクの歴史、歩みのなかで、今はどうなっているのか知っておかなければと思うよ。無実のブラク出身の石川さんの再審が却下されつづけられていることをみれば、権力、一般の人々の、ブラクの者ならやりかねない、自分らとちがうとの意識が分かる。そう

そんな中での関係ないと無関心をよそおうのは、どうも、本人らはちがうと思っっているのに、同じじゃないと「同化」を強いていると思う。あえて言えば、これが今日のサベツのあらわれ。ちつと難しいかなあ」

「お父さんは、三〇才の時、ブラク出身と知り、十年程、部落解放同盟という集団に属して運動の中に身を置いた。がこの二〇年離れている。ブラク外に住み、ブラク出身を明らかにし、よくも悪くも、そうすることでブラク出身を相対化し、まあ、豊かな人間関係を生みだすのに期待している。そのポイントが縄文百姓である」などと、ストーブにあたりながらしゃべる。

炭やき小屋から、顔をまっ黒にしながら、帰ってきたケンタ（二六）は、「縄文百姓かあ。ブラクとどうからむの？」聞く。

「縄文百姓というネーミングは、二三年前、移住した山村のブラクから縄文遺跡が出て、そこでずーと暮らしてきた八〇才の百姓のQさんからとった。

ともすると、今の世の中、労働者、農民でない者は、人間でないとする風潮がある。そう、

ブラクの者は労働者、農民に分類できず雑の者として扱われてきた。

しかし、耕作地少ないが、自給用のお米、野菜づくり、豚、鶏ら飼い、冬場は炭やき、猟こなし、大工、左官、石工さらに芸能をこなす誇りたかき本来の百姓（百の姓、職をこなす）である。このことを、Qさんの生きざまから知った。

「最近、縄文のことが、少しづつ分かってきた。日本列島で、一万年にわたって戦争せず、食食せず、協力して働き、関係は並列的で、たがいに影響しあい、補いあい、模倣しながら活用し、鎖のようにつながり、結びつき、つきあっていた。列島にとどまらず、海の向こうの環日本海の人々と接触し、人類史上、まれにみる平和で安全な生活を過ごしてきたのが縄文時代である。お父さんのめざすものがここにある。」と一生懸命しゃべる。

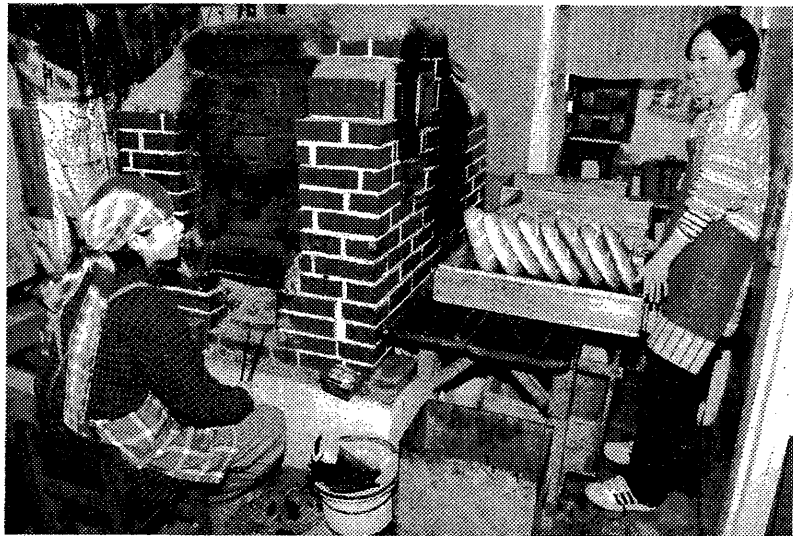
「まあ、分かるけど、他の人たちには、分かりにくいやろなあ。とため息のケンタ。

自家配合しての鶏、豚、山羊らのエサやりし、「早く春がこんかなあ。鶏たち卵生まんなあ」とぼやくのは、れい、あい（一六）である。

「山村に住んでも、私らのように百姓やらんなあ。同級生もほとんど学校、都会に行くな

あ」とこれ又ぼやくれい。そして、あいは「お父さんは大学行ったのに、私らを学校にやらんとよく言われるなあ」とポツリ。

「お父さんは、幼・小学の頃、教師、同級生らにいじめられ、サベツされ、嫌な思い出しか無く、勉強どころでなかった。それが、たまたま中学三年の夏頃、勉強に興味を持つ。エリート高校に入るが、そのエリート臭が嫌で、英語の試験用紙に一言「バカ」と書いて出す。ただ、山羊ヒゲの歴史の授業は好きで、その成績はトップだった。全体として勉強に身入らず。しかし母親は、強く大学をすすめる。悩む。浪人。そんな折、正木ひろしの本よんで弁護士になろうと思ひ、又、六〇年安保を社共批判し先頭で闘ったブンド（共



産主義者同盟) にあこがれあり、ふと手にした「アカハタ(共産党の機関紙)」に大きく共産党除名者に、大阪市立大学関係者多数あり、秘かに入学を志す。資料をとりよせるとアルバイト大学の異名あり、親の心配かけず行ける。ようやく勉強に身が入った。

そんな次第での大学生活であるが、年間百日位、生活費、学費のため働いているうちに、弁護士より、実際の労働運動の方に身が入り、又、山岳部にも入っており、ほとんど教室には出てない。入学当初は、出たが、おもしろくなく、興味もなかった。大学出て、エリートになるなんてさらさら思ってたなかった。いろんな商いをやってきた。ブラクの友人が「大森、大学やっていたんだって」と笑うのが印象的であった。まあ、そんなんで、大学に行つたといえるかなあ。とふりかえる。

都会から帰ってきているユキト(二二)が、ふいに「そういえば、お父さん、若い頃、組織やっていたんだって」と聞く。

「組織というとなんだかヤクザの組みたいやなあ。さつきも言ったように、ほとんど教室に出ず、働き、労働運動に、学生運動に忙し。そのとき、関西ブンド(共産主義者同盟)と

接触し、共に行動するようになった。

ブンドというのは、一九五八年に共産党から自立した組織で、六〇年安保闘争の先頭に立つ。お父さんも、樺美智子さんが虐殺された六月十五日にもデモに参加していた。六月十九日自然承認の国会周辺での座り込みしていて、べつたんことになった煙草をまわしのみしたのがなつかしい。

六〇年安保闘争の時は、多くの人々が例えば商店を閉め、路地裏々から人々が路上に出た。今にして思えば、敗戦後アメリカに占領され、子どもたちの頭上に白い猛毒のDDTをふりまかれるような屈辱。チェ・ゲバラは、若い頃、ボリビアで、社会主義政権が同じようにDDTをふりまくのを見て、全く非人間的なことを！と怒った。しかし、残念ながら、戦争に反対してきた日本共産党にしろ、アメリカ軍を解放軍なんて言う有様。スキムミルクにコッペパン(小麦)そして肉と石油依存の国への動き。しかし、農山村をはじめ都市においても、アメリカとその先兵となつての近代化、侵略への加担を拒み、戦争を嫌い自然と共存の暮らし、そう、まあ縄文の魂が、ゆり動いたということ。

六〇年安保は敗北した。そして、縄文の魂をないがしろにし、さらに自然、人間破壊をす

すめんとする。七〇年安保に反対して、先頭に立ち闘おうとしたのが関西ブンドである。お父さんが組織、関西ブンドに入ったのは六七年末だった。」と話す。ストープに薪をくべながら、さらに、

「組織といふのになかなかなじめず、六二年以来ずーと入らなかったが、一緒にやってきた者たちが入ったこともあり入る。人々の意思を機動隊という暴力でふみつぶすのに、なんとか屈せず意思を表わしたいと、七〇年安保の前年六九年にRG（ローテ（赤い）・ゲバルト（暴力））という一五人の小さな軍事組織を作り、お父さんは隊長だった。ずーと、座り込み（大阪の梅新で）、デモなど非暴力でアメリカのベトナム侵略と日本の加担に抗議し止めるよう求めてきた。しかし、反対の声大きくなりデモの規模が大きくなるにつれ、弾圧が厳しくなり、声を圧殺する権力へのやむえない」組織された暴力」だった。

しかし学生出身の隊員をはじめ隊長のお父さんらが、次から次に逮捕され敗けた。保積金が九〇万円だった。お父さんの給料は二万円だった。そして、十年裁判で「前科者」にされた。さてそれはそれとして。

出獄した七一年の初夏の頃、当時、お父さんは、労働者の労働条件改善や首切り撤回等に

取り組んでいた。一人の女性労働者がユキトのいう組織の資金のための会社で働いていて、労働条件の改善を求めていたが、なかなか認められない。組織の活動資金は、大衆の志に依るもので、（お父さんも、その頃、国労書記を辞めていたので、失業中。しかしまわりの労働者が、活動資金をカンパしてくれた。事務所に寝ていて、朝起きると枕元に千円札が置かれていたり）まして、労働者を苦しめての会社からの資金なんてゆるせないと思った。

「新左翼の腐敗と墮落に抗して、闘おう」と大衆ビラを出し、女性労働者らが、ひるむことなく闘うよう努力した。

すると、なんと、かの組織の中央委員らから呼び出され「査問」された。「このビラの新左翼とは組織のことか！」と問いつめられた。そのとおりとしか答えられなく、なんとも嫌な感じが思い出である。いつの間にか組織を離れる。少しトラブルはあったが、いわゆる内ゲバまで行かなかった。「大森、そんなビラ出して、よう無事だったなあ」なんて言う人もいるが、お父さんは二〇才の時から、しいたげられ苦しめられサベツされてきた労働者と生活、闘いの苦楽を共にしてきており、かの組織（関西ブンド）の委員たちもそのかもし出す雰囲気を感じていて、自制心を有していたからだと思う。

思えば、後輩の連合赤軍の森恒夫にしろ、関西ブンドのこのような思い、かもし出す雰囲気、足場をしつかり踏みしめておれば……と悔やまれる」と、降りつづく窓の外の雪に目をやり一息つく。

「そう、まだお前ら生まれてない頃だけとお父さんが裁判にかけられ、その主任弁護人のKが、もう知っておるように、おばちゃんおばちゃんの抗議を圧殺しサベツし、解放同盟の委員長のヒゴの下ひらき直ることがあった。Kは、狭山事件や新左翼党派の弁護しており、又しても新左翼のサベツ性をみせつけられた。なんとかサベツを糺さんと、新たに組織をつくり、再生を願いたたかう。が、やがて、組織を自主解散する。八〇年代初めのこと。お父さんが、組織にかかわったのは、まあ一五年位になるかなあ」と話す。少し疲れた。

「うーん、どうもよう分らんなあ」と、お米、野菜づくり、パン、炭やきし、猟、大工などこなす縄文百姓のケンタは言う。

「そうやなあ、ケンタとちがって、お父さんの二〇代の頃は、お金お金で自然人間を破壊する資本主義社会を糾し、お金に依らない自然豊かな社会をつくるのは、労働者（プロレタ

リアート）による社会変革（プロレタリアート革命）だと思った。学生の頃から関西労働者学園（藤本進治・哲学者、滝田修ら）や労働運動にかかわる。卒業時、就職活動する。同級の生ほとんどは決まれど、お父さんは、次から次に断られる。今にして思えば、ブラクサベツ。しかし、本人は、ブラク出身と知らぬ。知らぬは本人ばかり。そんな中、ある中小鉄鋼会社に即決採用（翌日内定通知）。その直後、国鉄（J.R）労働組合書記の話がある。当時、鉄鋼は社会の支柱で、そこでの労働運動の思いもあったが、「闘う国労」にひかれた。ところが組合幹部は、「労働者は労働力を売って生活する。私らは、労働力をいかに高く売りつけるかが仕事」と言い、議員や一戸建の家に執心。とはいっても、当時ストライキはよくした。日頃は、電気を動かす労働しており当初は、動かないのに不安であったが、何日も労働しないでいると「なんで、毎日、沢山のひとか物を遠くまで速く動かせにやならん」と聞かれたことがあった。「交通労働も生産労働」とか答えた。どうもピンボケ。それが気になっていた。

その後お父さんは、R.Gの隊長し、国労を止め（獄中から辞職）、出獄後は、学習塾講師、部落解放同盟支部専従役員、印刷工、医療検査技師、食品加工、トラック運転手などの労働

についてきた。学習塾の講師は、賃金労働者をつくる学校教育の下請け、同盟専従役員をヤクザに追われたものの、サベツを糺す労働が身にしみこまなかった。印刷工にしてもらくでもない会社の宣伝の写植、医療検査技師にしろ、病人をつくり、患者をモルモットにする医者の下請け、有機農産物の配送も毒ガス（排気ガス）ふりまき、金持ちのための労働……に嫌気がさした。

「お前、そんなやから、永続きせんのか。きちんと一ヶ所に根をおろして、労働を問い糺していったらええんや」と友人は言うが。

七〇年安保の闘いの時、国家権力に屈せず闘い、社会変革を志すゲリラ、軍事組織に参加した者は、自らの労働・学業を止めての“労働”を展開する。それは、まさに“無償労働”（関西ブンド・田原芳）である。

また、マルクスをして、「共産主義とは、現実を変える運動であり」「朝にケモノを狩り、昼に魚をつかまえて、夜は牛飼ひ、批評する。それらが、猟師にも、漁師にも、牛飼ひにも、批評家にもなることなく、自分の思うがままできるのである」ということである。「お父さんは、労働を問う旅を経て、まあ、日本的な、縄文百姓にたどりついたといえる」と、思い出

しながらしゃべる。

聞いていたあいは、「お父さんは、今時のフリーターのような生き方してきたんや。だから、年金もほとんど無い人や」と言う。

「まあ、そういうことになるかなあ。体験居候でやってきたフリーターのA君は、『私のやってきた仕事（労働）は、誰でもやれるし、いつでも交換できるひとつの部品で、人間ロボット』と言っていたが、お父さんは、よく分かる。若者をロボットとして扱ひ、自然、人間を破壊していく社会に異を唱え糾すのがあいちちゃんらの仕事や」と返す。

「でもなあ、お父さんは、自分の好きなように生きてきた人や」とケンタは、皮肉る。

「ちつと意味が違うかも知れんが、この六〇年余の人生で、幾度も死に遭遇しつつ生きてきた。三才の時、旧・満州（現・中国東北部）で、ソ連軍の手をかるうじて逃れつつも、抑留所で腸チフスにかかり死にかけた。中学生の時、祖父母の死にあいつつ、家が商売（店）しており、森永ヒ素ミルクを売り、隣の赤ちゃん羅患し、全国で一三七人死んだ。公害の原点でわすれられない。車社会の到来で、目の前でバスの車輪にまきこまれていく幼い子の光



景をわすれられない。反抗期の私に対し一緒に死のうと迫る母親。一八才の時、六〇年安保で六・一五国会突入で樺美知子さんの虐殺。山岳部にあつては、死の場に。七〇年安保では、後輩の森恒夫の獄中自死、同級の田宮の北朝鮮での急死。妹の自死。その後も友、知人の自死、ガン死。そんな中、山村も、四く五日にひとつ消え死にゆく。そんなこんなで、好きなように生きてきたというのでなく、死に生かされているといえるかもしれない。」と、自分にいいきかせる。

二〇〇六年四月八日

注①「都市よさらば」(麦秋社)

「六人の子どもと山村に生きる」(麦秋社)

「自給自足の山里から」(北斗出版)

注②「我ら百姓家族」(ノンフィクション フジテレビ制作)

一九九九年からほぼ毎年放映

子ども青年と地球の明日を考える

あぐす農物

兵庫県朝来市和田山町朝日字下戸

TEL・FAX 〇七九一六七五二二九五九



## ご無沙汰のお詫び状

渋谷 映 輔

みなさま、大変ご無沙汰いたしております。渋谷でございます。

『翔る』の廃刊まことに残念です。と同時に創刊メンバーでありながら、この10年ほどの間ずっとほったらかしにしていたことを心から申し訳なく思っております。

二〇数年前、当時まだ生意気盛りから抜けていなかった二〇代の私が新宿の一角で吹いていた「商業主義に乗らない草の根のコミュニケーション誌の必要性」といったことが先輩諸兄姉のご賛同を頂き、『翔る』創刊のきっかけになったのでした。

私自身、その後出版社、広告代理店、労働組合と居場所は変わりましたがほぼ一貫して編集者として仕事をしてこられたのは『翔る』創刊のときに持っていた一種の自然に燃え上がるような思いが体の中にあつたからだと思えます。

いまや世の中には『翔る』が目指したコミュニケーションとベクトルを同じくするミニコミが数え切れないほど発行されています。その意味では私たちが目指した方向性は間違っていないなかつたのだな、と考えています。

さて、そうは言いながら途中で退いてしまった私としては、最後に当たってなにか言い訳をしなくてはなりません。せつかくの場ですから少し展開してみることをお許しください。

それは、いまの私にとっては生涯の課題ともなってしまった「労働」と「運動」の関係についてです。二〇年ほど前、ひよんなことから労働組合の書記となり、編集者としての立場は同じながら職業労働運動家として、運動を仕事としながら編集する、というややこしい立場になつてしまいました。

ジャーナリストティックに、しかし組合活動家としての視点も忘れずに機関紙・誌を編集するというのが本来的なあり方ですが、それが業務となると、やはり私自身にとっては労働にほかなりません。毎月・毎週・毎日締め切りに追われながら取材をし、写真を撮り、原稿を書き、レイアウトし校正するという一連の作業を繰り返して、ふと気がつくといつのまにか「プロ意

識」のようなものが芽生え、こと自分の仕事の領域に関する限り誰にも負けない——といった職人的ともいえる自負が自分を支えていることに思い至ったのです。短時間に次つぎ生み出す記事、構成する紙面など、とにかく「行け行け」状態でした。『翔る』から離れて行ったのはちょうどそんな時期でした。

忙しいから——というのがそのときの私の自分に対する言い訳でした。事実大変に忙しかったことは確かなのですが、それは大いなる勘違いであることにずいぶん後になって、あることよって気づいたのでした。

その「あること」とは、すなわち編集業務からの配置転換でした。正確には「二度目の」配置転換のときにはたと気づかされたのです。

この二度目の配置転換は、ほんの数年前、つまり現在につながるもので、もうこのまま五〇歳を越したら恐らく編集業務に戻ることはないだろう、と思われるものでした。私自身にとっては意外なことだったので、まるで突然農地を取り上げられた農民のような状態で呆気にとられたのですが、これをきっかけに、これからは仕事でない「自分のための文章」を書こう—

—と決心したのでした。当然、そんなものは自在に書けると思っていたのですね。

ところが、いざキーボードの前に座っても、一行の文章も浮かんでこないではありませんか。労働運動に関することなら資料なんか見なくても自然に浮かんでくる文章が、自分のオリジナルなこととなるとまるで出てこない。

世間ではきつと「専門的な労働運動家」といったレッテルを貼ってくださるところなのでしょうが、どっこい大違い。職業的な狭い領域に首までどっぷり浸かって手足どころか頭まで自由に動かせない人間になっていたので。これは驚きでした。

「年寄りの冷や水」という言葉がごさいますね。自分では若いつもりでいてもその実すっかり年とったおっさんになっている。それに気づかず無理をして泣きを見る——まったくそのとおりでした。「自分はプロの編集者だったんだから文章を書くことなどに苦勞はない」そう思っていたのが、あにはからんや「オリジナルイテイの喪失」という手痛いしつぺ返しをくらったわけです。まことにお粗末の標本のようなものです。

自由な発想とそれを表現する文章という、本来それを最も持っていなければならぬはず

の職業人が、その職業ゆえにそれを喪失する。なんという皮肉でしょうか。いつからそんな自分になってしまったのか。考えるのも恐ろしい（苦笑）ことですが、敢えて考えてみると、それは上に述べたプロ意識らしきものが芽生えたころ、すなわち『翔る』からしだいに距離を置いていったころのことではないか、と思えるのです。すなわち職域に安住してペン先を研ぐことを放棄していたわけです。これはかなり情けない、かつ恥ずべきことでした。『翔る』のために文章を——と請われても忙しいゆえではなくて、その実「書けない」状態だったという事実をここに自白いたす次第です。

さて、再度配置転換されて、はたと気づいた愚かな私はそれからせつせと文章をひねり出す訓練を始めました。しかし一度失った力は容易に回復してくれません。頭を叩きつつ、苦吟を重ねながら一行、もう一行と積み重ねているのが現在の状況です。

そこへもってきて『翔る』廃刊のごあいさつですから、もう私としては自分で穴を掘って入りたいくらいの心境です。

そういうわけで、いくらかたまってきた原稿を、もはや『翔る』誌上で発表する機会はな

くなってしまいました。これも天罰というやつでございましょう。

このうちは乏しい自分の可処分所得を駆使してなんらかの形で世間様に自分の脳みその身を披露していくことになると思います。さいわい、この二〇数年の間に思ってもみなかったネット社会の発達という変化がありました。こういった利器を活用しながら細々と世間との間を取り持つ作業を続けて行きたいと決心している今日このごろでございします。

さてさて言い訳もあまり長いと嫌われるばかりでございしますのでこの辺でよすことにいたします。

この間不義理を重ねて参りました諸兄弟に対しまして改めてお詫び申し上げますとともに、今後なにかのきつかけで私の駄文にお付き合ひ願うこととなりましたら、その節はよろしくお引き回しを、と調子のよいところをお願い申し上げます。一巻の終わりとさせていただきます。

〈〉

## “ 四方竹 ”

徐 新 民

(四方竹とは、節にいぼ状の突起があり幹が角ばり中空のところが少ない。観賞用。)

杭州に観光したら、武岳廟へ行かないわけにはいかない。武岳廟に行ったら、知果寺に行くことを忘れてはいけない、知果寺に行ったら、どうぞ陳文龍の古い墓を見ていただきたい。墓のそばに四方竹が生えている、(竹の)節にはいまも鋭いとげがある。この方竹竹のことを、民間では陳文龍の化身だと言ひ伝えられている。

陳文龍は福建興化(いまの湄田県)の人で、南宋咸淳四年(一二六八年)状元に受かる。宮廷での試験のとき、度宗皇帝がみずから得点を与えた、このためすぐに鎮東軍の節度判官に任命された。奸相の賈似道が、皇帝が文龍を寵用するのを見て、彼を陥れようとして、彼を「秘書省正字」に抜擢しようとした。けれど文龍は気骨ある人だったので、奸相の誘いを受けず、

結果辞職させられてしまった。

この時、元の兵が臨安(今の杭州市)にまで切迫していた、南宋の王朝も危機が間近に迫っていた、文龍はもう一度朝廷から起用された。彼は再度赴任すると、すぐに国の統治に精励し、元に抵抗するために奮起した。けれども謝太后は直諫を聞かず、元に投降する準備をしていた。そのため防備を失い、臨安も占領されてしまった。

そしてこの時、元軍が閩(福建)に入ってきた。南宋の大臣陸秀夫、張世傑などの人が、最後の幼帝趙炳を抱いて、海路を取って広東へと撤退し、文龍を閩広宣撫大使に任命した。興化の留守部隊にいて、元軍の南下を防御する。泉州守備隊の將、蒲寿庚が兵を率いて元に投降しようとしていた。その結果興化の部隊はふた方面からの敵のあいだで苦境に立った。徹底抗戦をするために、文龍は私産を売りはらって、民兵を養い、自ら二つの大旗を作った。ひとつには「いきては宋の臣となり」と書き、もうひとつには「死しては宋の守護神とならん」と書いた。城壁に大旗を立てると、風にはためいて翻る。これによって士気をたかめ、共同の敵に対して憤り立ち向かう。死を賭して城を守る。同じ郡尚書長官の方応発は、南宋の大勢はすでに去ったと思ひ、文龍が投降するように画策した。文龍はこれを聞いて火のように怒り、剣を抜いて直ちに殺した。この時から城中には誰ひとり「降」の一字を言うものはいなくなつた。

元の將軍アラムが兵を率いて福州を攻め落とした。福州知事の王剛中が命を惜しんで投降した。王剛中は功績を横取りして、出世しようとして、人を興化へ派遣し、文龍に投降するように勧めた。文龍は二の句を言わず、先に一人を殺し、王剛中痛烈に罵つたてがみせを書き、もう一人の使者に持つて帰らせた。王剛中はこれを見て、震えんばかりに怒つた。元の將軍は理攻めの交渉によつてはらちがあかない、と思い、城を囲むように命令した。この時、興化の町に將兵は千人に満たなかつた。文龍は自ら督戦を買つて出た。アラムは何度も城を攻めたがうまく行かず、しばらく兵を退いて休戦した。

陳文龍はながらく孤立した城を死守してきて、まわりの敵の状況にうとくなり、部將の林華を派遣して福州を偵察させた。林華と叛軍の將王世強は古くからの知り合いで、ひそかに氣脈を通じ、機をみて元に降ろうとしていた。元軍にとつては思いがけない喜びだった、再度兵を出して攻勢に転じた。城の中の將兵のうち何人かが早いうちから降参しようと考えていた。ただ警戒がきつくて、みだりには動けなかつたのだろう。後に林華が元に降伏したことを知つて、軍はなおさら動揺をきたした。通判(役職名)の曹澄孫が開城して投降した。將校の黄泰が馬に乗つて衛門から飛んできた。太后から詔勅があると偽りを言つて、文龍自ら拝接すべきだ、と言う。文龍は、計りごととは知らず、衛門を出てゆき、逮捕されてしまった。

元の兵は文龍を獲得して、荻の如くに至宝とした。まもなく文龍の家族まで捕らえられた。皆は投降した董文炳の営内に閉じ込められた。董文炳は機を見て投降を勧め、文龍から痛烈な罵りを受けた。それからもう二度と会おうとはしなかつた。元の將軍唆都が我から出てきて忠告した。「君とこの母と幼いものは、監獄に捕らえられて、明日をも危ういのに、君はいまだにわが名にこだわつて、骨肉の情をさとらないのか？」これを聞いて文龍は目を怒らせ、退けて言う、「君たちは人の妻子を殺し、人の父母を虜にして、人間らしさのかけらもないのに、何ゆえに骨肉の情を語るのか！わが母は年老いている、老いているといふことは死も間近だと言ふこと。いまや国も保ちがたく、子孫の更に何を心配せよといふのか？」唆都は壁にぶつかつて後、しばらくは手のうちようがなかつた。そこで彼を杭州に監禁した。獄中で彼は詩を書きつけた。

斗墨孤危弱不支、書生守志誓難移。

自經溝澆非吾事、得死疆場是此時。

須信累臣堪寡鼓、未聞烈士豎降旗。

一門百指淪胥尽、惟有丹心天地知。

砦を守り闘うのは 孤にては弱く支えられず

書生は志と誓いを守り 心変えがたし

自らつまらぬ死に方をするはわが為にあらず 死すべき戦場

はこの場 疲れし臣のわが味方少なきを耐えると信ずべし

未だ聞かず烈士の降旗を掲げるを

一気に噴出す非難の声 無実の罪に苦しみ死す

ただ真心のみがありしこと 天地が知る

彼は人に託してこの詩を次男に送った。これによって決別すべく。文龍は国に報いる志を立て、自ら死すべきを知る。この時から断食に入った。元の將軍唆都が言ったのも文龍がこれほど永きに渡って、腹空かしていることにきつと耐えられないだろう、と思ひ、すぐ盛り沢山の酒席を設けて、彼を宴に招いた。文龍はそれにかかずらおうともしなかつた。唆都は庭の竹をさして文龍に言った、「人は竹のようではなくてはならない。丸く滑らかで、吹く風を恐れず、雨を恐れず、悠悠自適していなければならぬ。そうであつて初めて君子といえるのだ。」「これを聞くと文龍は、天を仰いで大笑いした。「違ふよ、このような丸くて滑らかな竹は、ただ

自分を守ることが出来るだけ。ほかに四方竹と言うものがあるんだ。それは刺が伸びると、鳥獣も近寄れない。これこそ本物の竹と言うものなのだ！」

「うそを言うな、古くからただ丸い竹だけがあつて、四角の竹などあるはずがない！」

「信じられないと思うなら、君らもすぐに見られるよ。」文龍はこの時からしつかり絶食して、間もなく、飢えて亡くなった。

陳文龍は死後杭州の知果寺のそばに葬られた。聞くとところによる

と文龍が唆都と語ったことは、土地の神を感動させて、土地の神が丸い竹を圧して方竹にした、しかもその刺を伸ばして、文龍の墓の

そばに満遍なく植えておいた。人々はこの四角に角ばつて、ふしぶしに刺の生えた四方竹を見るに及び、これこそ文龍の化身だといひ、かれの正直でおもねらず、不屈の忠義を貫いた民族の気概を顕彰した、後にこの四方竹のことを「君子竹」というようになった。

## 鄭佑のはなし

徐新民

— 郷は県の下に位置する行政単位である。郷はひと

つまたはいくつかの村落をあわせたもので、鎮はそれより人口が多く、あるていど商工業が行われている所をいう。 —

鄭佑は福建、惠安、海ぞいの崇武城に住んでいた。城、といつても、その当時は半ばはガランとしていた。小さな城、鎮（ていしやう）だった。このため、鄭佑は別名を《半村（はんりゆうん）》と名のついていた。彼は朝廷政治の腐敗をまざまざと見て、科擧の試験を受けようとしなかった。いつも、琴を持っていて、いたる所で、師匠を訪ね、琴の友と交わり（琴の）芸をまなんだ。半村先生の名声は、四方に伝えられていった。

この年の夏、半村は羊城—広州—に來た。聞くところによれば、ある亡くなった武官の夫人で、名を白素娟という、以前は巡撫衙門（省、行政長官の役所）の歌姫であった。その武官が長官を救ったことがあつて、寵愛を受け、恩賞として白素娟をあえられた。結婚式のその日、宴会で白素娟が瑤琴（珠玉の琴）を演奏して、皆からヤンヤの喝采をうけた。

半村は琴に夢中の人間だったから、彼女からその芸を学びたかった。けれど封建時代においては、官の家の未亡人と出会い、教えを請うことさえ、天に登ろうとするよりも難しかった。ままよ当地の琴友（とも）の助けを借りて、白素娟の隣に小さな家を借りて、そこに住み込んだ。彼は毎日壁をへだてて琴を聴く。白素娟の曲調によりそい、弾こうと試みる。音は確かに近づいているのだが、その格調にいたつてはまだまだ程遠いのだ。どうすべきか？半村にはどうにもその方法が見つけられなかった。

事は都合よく運んだ。六月十五日、たそがれ、半村がちょうどおもてで散歩していると、白素娟が小さな駕籠をもちだして、駕籠のカーテンに白い薄絹をかけ、うしろに二人女中がついて、ひとりはお花と果物を持ち、もうひとりが白絹の琴袋をもって路地の方へむかった。半村は奇妙に思つて、家主に聞いて、ようやく、白素娟の夫が、おとしの六月十五日に、兵をひき連れて船で珠江を巡察しているとき、台風に襲われて、転覆し河底で死んだ。家にはこのの未亡人とふたりの女中（にようぢゆう）だけが残された。素娟は事故にあつた亡夫の事を思い、毎月十五日には、かならず珠江に行つて琴を弾き追悼する、死者が生前同様に安らかであるように。

半村はほんとうに白素娟の人柄を敬慕していた、そこで駕籠の後を付けて、珠江まで來た、白素娟が駕籠を出るのが見えた、雪白の喪服を着こみ、年は三〇を越えたばかりの頃か、端正なものごしであつて、美しい。女中に支えられて船に乗り、沖のほうへ出ていった。半村は急いで小舟を雇い、また後を



つける。

この時、ようやく初夜の時刻になった。月のひかりは馬蹄銀のように輝いて、珠江は玉帯（玉で飾った帯か）のように漂う。少なくとも遊船が、杼のように水上を行き来する。笛の音、琴の音が、聞くものを迷わせる。

白素娟の船は、岸から遠く離れた河にとどまっている。半村の船は、こっそり近づいていった。船かしらに白素娟が立っているのが見える。香、祭酒、お花を捧げた後、正座して、河に向かつて、瑤琴（珠玉の琴）を弾き始める。

その半村は月の光を借りて、船を隔てて琴を弾く奏法（指の運び）を見ようとしていたが、どうしてもはっきり見えない。ただその琴の音を聞いていると、それはそこで人が泣いているように聞こえる。半村は感動して、涙を流した。琴の音が消えて、ようやく溜め息をついた。

この時、白素娟の船が、へさきをかえて、岸の方へ帰っていった。

半村の小船も後についていった。白素娟は岸にあまり駕籠に乗って去った。そこでいそいで白素娟に乗せた船に追いつき、船頭に尋ねた。この白さんは毎月十五日の日に必ずきて、船を雇い河に出て追悼するのです。彼は船頭に、来月十五日の日に、同じ船にのって琴を聴きたい、と頼み込んだ。船頭は彼の切実な願いなるをうかがい、またこの機会に乗じていくばくかのうまみも得たいとの思惑もあって、「先生

がこの船に乗り込むなら、わたしがお世話しますよ。船賃は十両、二度とはいいません。乗船後は、あなたは船倉の中に隠れていて、顔を出さないように。万いち、白さんに見つけられたら、あなたはわたしのことをおばさんだと言いなさい。あらゆる困難からわたしが逃がしてあげましょう。もしあなたが下々の身なりが出来るのなら。ふん、わたしのことを怪しく思うのじゃないよ。この珠江の水は、飲み干せるものではありませんから！」「わたしはただ琴を学びたい一心なのです。ほかの事は考えていない。どうか安心してもらいたい。」船頭もすぐに了解した。

瞬く間に七月十五日になった。半村は太陽さんが山をおりるのを待ちかねて、琴をだいて船まで来た。船頭が按配してくれた船倉に身を隠した。かの名月が柳の梢まで這い上がってくるのを待っていると、やがて白素娟やってきた。船は沖まで突き進んで、前と同じように、白素娟が敬礼をし香を炊いた後、琴を弾きはじめた。半村はひそかに彼女の指の運びを観察して、大変多くの啓発をうけた。しかし事はうまく具合に行かなかった。琴の音が絶え、女中がかたづけしようとして、半村を見つける。すぐに主人の知らせた。白素娟は驚いて、船頭に聞いた、「どうして男の方を乗せたの？」

船頭の口調はなめらかだった。何の悪気もないように笑いながら、「この人は我が家の甥なのです。遠くからわたしを見舞いに来てくれました。わたしども船に暮らすものの家は船の中、わたしは彼の実の叔母なんですもの。いくらかの船賃のために、彼を追い出すことはできなかったのです。奥様は分か

ったお方ですから、この程度の世故なら、わかっていただけのもと思っていましたよ。」半村もそこに立ちあがり、ふかぶかとおじぎして、「田舎から琴の芸を学んできました。今日は叔母の船にのせてもらい、奥様の素晴らしい琴を見ました。弾き方を学ぼうとして、長い間見せてもらいました。奥様からは、やはりおかしく思われてしまいました。早速退散しなければいけませんね。」

白素娟が半村を見る。年は四十に近い、国語の先生のように、温和で上品。礼儀も心得ていて、悪い人には見えない。そう思つて、安心した。けれど答えていることがほんとうなのか、たしかめようとして、「きつと先生は優秀なんだと思います。やはりここは、教えていただきたいものです。」半村はいささかもためらわず、自分の琴をとりだして、一曲弾いた。白素娟はもと巡撫衙門にいたので、少なからず世間を見ても来たので、見識はとても高かった、曲を聞きおわると、

「先生の琴は悪くありません、ただ指の運びはまだ思い通りにはいかないようですね。」半村はこの時とばかり教えを乞うた、船頭も少しく申し添えた。白素娟は断り切れずに、座り込んで、（おしき）撥（おひき） 勾（あひけ） 剔（そく） ……など種々の奏法を何度も弾いて見せて、ひとつひとつその道理を語った。半村は頭の回転も早く器用に、素早く我が物にした、より一層白素娟に師匠になつてもらいたかった。白素娟は婉曲に、「夜もふけました、先生もお休みにならなければ。」言いつつ船頭に船を帰すように命じて岸に上り駕籠に乗つて去る、このようにして疑いを受けることを回避した。

その半村はひとり家に帰つてきて、学んできた奏法を、日夜練習して会得するところは大きいであつた。この日、彼はちようどおもてで散歩していると、白素娟の女中に見つけられて、「先生どうしてここへ？」半村は返礼をして、「琴の友からその技を学ぶため、しばらくこの家に住むことにしたのです。どうか娘さん、奥様によろしくお伝えください。」女中はわずかにうなずいて、帰つていった。

日が落ち月が出て、早くも中秋の佳節がきた。半村はちようど琴友を尋ねて帰つてきたところ、その女中が彼を迎えて呼びかけた「先生、随分捜しましたよ。奥様から手紙があります、ご覧になつてください。」受け取つて見ますと、

「この前女中の言つには、先生はおとなりのお宅に住んでいられるとのこと。壁を隔てて琴を聞いていますと、名手といえるでしょう。どうぞ中秋の月夜に、もう一度おばさまの船の上で、わが亡夫のために一曲弾いていただきたく、もつて死者には慰めを、生きているものには感銘を、受けたいものです。」

半村には願つてもないことだつた。女中には即座に「その時には必ず行きます！」と答えた。

中秋の夜、半村は琴を持って河に來た。女中がすでに待つていた。彼は早速船に乗り込み、白素娟とまみえる。少なくとも叔母甥の仲だから、船頭にもであう。船はとても早く沖へ出た。白素娟がいつものように香を炊き、祭酒を上げ、座つて先に一曲弾いた。続いて、半村が白素娟にならつて一札をし、う

やうやくすわつて琴を弾きはじめた。白素娟が聞き終え、稱賛して、「先生は優秀です。めつたに見ないほど。わたしは亡き夫に代わつて、この瑤琴をあなたに贈ります。どうぞこれを持ってあなたの故郷へお帰りなさい。永くここに居られては、ご不便でしょう。」

むろん半村は機知の人なので、白素娟が口さがない噂を防ごうとしている事はわかつていた。彼はうやうやく瑤琴をうけとり、謝意を表して、「学生わたしは明日帰ります。どうか師匠にはお体お大事に！」船は岸につけ、半村は、白素娟が駕籠に乗つて行くのを、目で見送り、ようやくひとり琴をもつて家に帰つた。どうしても眠られず、ランプの下で一首《瑤琴頌》を作り、歌曲にして演奏し、高らかに歌つた。

珠江月影兮 皎皎如雪 珠江の月影 まっ白に雪の如く

萍水相逢兮 扁舟一葉 ゆくりなくも巡り会う 小舟一葉

惠我瑤琴兮 白璧其微 我に贈られたは瑤琴 白玉はその印

揮泪告别兮 弦乱音絶！涙を振るつて別れを告げ 弦乱れ音絶える！

この歌は、白素娟の高潔なたしなみを称賛し、同時に半村の彼女に対する敬慕と別れを惜しむ気持ちを表していた。

二日目、半村は羊城の琴友に別れを告げて、瑤琴を携えて、故郷の崇武に戻つてきた。家に着いて、彼

は自分の記憶を辿つて白素娟の映像を描いた、琴蔵にかけて、わが師匠として拝する。毎月十五の夜には、必ず香を炊き礼拝をして、かの《瑤琴頌》を演奏した。

彼の琴友蘇屏山は、蘇州府の書吏をしていた、年末の時節、家に帰つて家族を見舞うと嘘を言つて、半村を尋ねたが彼はすでに琴に病つきになつていた、「蘇州は繁華な世界だ、多くの琴の演奏家が集まっている。もし君に興味があるのなら、一緒に遊びに行つてみないか。」半村の最初の妻はとうに亡くなつていて、留めるものも気掛かりもなかった、春節が過ぎて、蘇屏山とともに同郷の貸し船に乗つた。大海をこえて、長江に進み、蘇州に着いた。

蘇州では、聞くところによれば、「聴歌院」に著名な馬湘蘭という歌伎がいて、天女のように育ち、しかも琴の素晴らしい弾き手だった。人々は彼女のことを、「色芸双絶」（美貌も芸もふたつながら絶品である）と誇つた。彼女の客にたいする接し方はとても厳しくつて、最初は琴と歌の名流が、次に詩・画の名家など、これら富貴の家の子弟たちが、百回あがつて、一度の対面も難しかった。半村は琴を弾く芸は高度であるとはいえ、鴛母（妓女を統括するもの・やりてばあ）は彼に百両の銀を出せば対面させる、という。どこにそんな銭がある？ 半村は門に向かつてただただ我が身を嘆いた。

一、二か月過ぎると、「聴歌院」の帳場担当が病気で死んで、人を捜している、という。半村は馬湘蘭にあって彼女の琴弾く芸を学びたく思つていたので、蘇屏山にお願いしてこの地の有名人の紹介をもら

い、帳場勤めを始めた。

馬湘蘭はようやく二十四歳になる、端正にして物静かなひと、お喋りを好まない。半村は帳簿の関係から、たまたま彼女を見ることはあった。けれど琴を彼女から学びたいということをつたえる機会はまだなかった。最後には、彼はひとつ方法を考えた。いつも夜おそくに、白素娟から贈られた瑤琴を携えて、裏の花園にて香を炊き、演奏した。馬湘蘭の注意を引かんため。

その馬湘蘭は幾晩かつつけて優美な琴の音を聞いた。思うに、蘇州に来て三年たつが、いまだこれほど感動的な琴の調べを聴くことはなかった。この奏法は従姉となんと似ていることだろう！彼女はつきそいのものを呼んで、琴を弾いているのは誰なのか？ 調べてくるように、頼んだ。じきに、つきそいのものが帰ってきて、「これは帳場の半村先生が、彼の師匠の白素娟を記念するために、ご自分の書いた譜《瑤琴頌》を演奏しているのです。」

馬湘蘭は白素娟という三字を聞くと、「ああ」と一声、すぐにつきそいのものに、「いそいで行ってその先生に聞いてきて、この白素娟は今どこにいるのか？彼はどうしてわたしの従姉を知ることになったのか？」つきそいのものが行ってから、しばらくして帰ってきて、半村と白素娟がどのように知り合うようになったか、ひととおり説明した。馬湘蘭は溜息をついて、「従姉も薄命な人だわ！」彼女はしばらくは茫然と考えていて、紙切れを取って、仮に《幽蘭清香》という題名を作ってこれを半村におくり、

彼に曲譜を作っていたきたく……

二日目深夜人が寝静まる頃、天には名月がかかり、遠くちかくの涼み台やうてなでは、照り輝いて、まるで蓬莱境のように美しい。馬湘蘭は二階の窓に座っている。ひとしきり琴の音がただよい、とびきたる。蘭の花の香りがそよ風にのってやって来たように、全身がすつきりすがすがしくなる。彼女は夢うつつ、階段を下りて、花園にはいり、あの帳場先生が花咲く木のそばの石椅子に座って、全身全霊、珠玉の琴を弾いている。馬湘蘭はすぐそこへ行って驚かすことは、出来ないでいた。あおぎりの木の下にたつて、うつとり聞いていた。琴の音が消えたとき、「これはまっこと幽蘭清香たわ！」口をついてでてくるのを止められなかった。

半村が頭を上げてみると、その馬湘蘭が歩みよっていた。彼はいそいで立ち上がり、うやうやしく礼をした。学生(わたし)はいただいた命題にしたがって、この《幽蘭清香》の譜を作って演奏しました。どうぞ多くの指導を。」馬湘蘭は礼を返し、かりそめの石にすわり、「先生は弾くことが出来るだけでなく、その上、譜を作ることが出来る。もし今もう一曲《月下花間》が出来ますなら、それはこのお空のお月さまにも背かない、園のなかの敵かな蘭ですよ。」

半村はとつおいつ考えた。馬湘蘭はいま自分の琴の技を探ろうとしている。すわって、しばらくの間考えて、腹案が思い浮かんだところで、琴の絃を調律して、静かに演奏しはじめた。その柔らかな琴の

音、まるでそよ風が花々にふき過ぎていき、天からの笛のような音が響く。声の調べに乗って旋回し飛翔する。音はまたひとつ広々とした世界に進んでいく、それは月の中の嫦娥のようで、お空一面の雲霞の上をそよそよと舞い踊る、その琴の音を聞いているだけの馬湘蘭さえも揺れ漂っているよう。曲が終ったとき、彼女はようやく琴のなかから目覚めたように、顔にひとすじ笑みがあふれる。琴のそばへ近づいて、「先生は漢の司馬相如にそっくりです！」言いつつ座って、琴を借りて、半村の演奏した楽譜にそって演奏し、重ねてもう一遍弾いた。半村は彼女の覚えの良さと敏捷な奏法に、まったく敬服した、この時とおもって教えを乞う。馬湘蘭は留保することなく彼女の父から教えられた「捻珠撥指」の「弾鼓練功」の秘訣をすべて半村に伝授した。

この時から、半村は学問と訓練に勤めた。敏捷な拾のゆびが、柔らかさと速さゆつくりさ、心のままに欲しいままに運ぶ。彼は人から《二代の名花》と呼ばれた馬湘蘭と、意外にもこの歳が四十近い帳簿先生が、常々一緒にあって、自分の曲譜を、自分が弾き語り、多くの「貴重な客」の皆がなおざりにされた。

聴歌院の鴿母は、金儲けの道が閉ざされたと思い、半村をひどく恨んだ、突然彼を首にした。半村は出ていくときに馬湘蘭に別れを告げたいと言っても、それさえ許されない。鴿母がなんとも悪党奴と叫んで、彼を表にほうりだした。しかも「もう一度あがってきたら、おまえの足一本くらいはたたき斬

つてやるわよ！」と脅しつけた。

馬湘蘭は奥座敷にすんでいる。表でおきたことを知る由もなかった。ずっと三日も、彼女は半村の姿を見なかった。すぐ、つきそいのものを呼んで、調べてくるように頼んだ。そうしてはじめて半村が追い出されたことを知った。帳簿は人が換わっていた。彼女は三日も泣き続けた。どうしてまた客をとれよう？四日目の深夜、彼女は自死しようと思う。突然表から《幽蘭清香》の琴の音が伝わってきた。半村が古い誼を忘れていなかったことを知る。琴の音で自分を呼んでいるのだ。彼女は喜び、こころ慰めた。暗い中、下に下りて、ひそかに裏庭を通り過ぎ、そつとうしろ門を開ける。音をたよりに河べりの柳の下に来て、半村をみつめた。痛ましい姿で、青い石の上にすわって琴を弾いている。馬湘蘭は悲喜こもこも、半村の胸に飛び込んで、「わっ！」とひと声泣き出した。半村は急いで彼女の口をふさいで、「泣くんじやないよ、彼らに聞かれたらどうもならないじやないか。」馬湘蘭を引きずって、河べりのかやに被われた所に隠れて、別れた後の互いの思いを伝えあった。馬湘蘭は半村の一途な真心に接して、心に抑えていたことを全てさらけだした。

もと、馬湘蘭の父は秀才だった、琴棋書画、いずれも精通していた。戦乱の世に、親娘が惨い殺しにあい、家は焼かれ、彼女はよるべない身の上となった、かないましたことは身売りして父母のおとむらいを出したこと。おもいがけず、買い主が悪党だったことからまた彼女はこの聴歌院へ売られてしまっ

た。彼女は父母の名声をけがすことをおそれた、これまで一度もじぶんの身の上を話したことはなかったけれど。彼女は一心にこの苦海から抜け出そうとしていた、それでも一人も頼れる人はなかった。いまこそ、半村に生涯の頼りになつてもらいたいと思うのに、今また鴛母のためにむざむざ首をきられた。彼女が半村に言った、「先生、わたしはあなたには本当のことしか言えない。わたしのこの命は、ただ先生だけが救えるの。私のこの白いきれをふたつの染料盗いれると、先は灰色に、後は黒くなる、わたしはあなたの汚れない潔白をけがすことが恐いのです。」

半村はこれを聞くと、この馬湘蘭がますます、かわいそうになりそして尊敬もした。「もしわたしにそんな考え方があつたら、どうしてみずから危険を冒してここまで来ることがあるう？ 君は安心しなさい、私が方法を考えて、君の身請けをしてあげよう。」馬湘蘭は感動して涙をぼろぼろ流して、半村にしばらく待つようにいう、いそいで上にあがり、自分の金銀珠寶を、全部持ち出してきて半村に与えた。「先生、わたしのこの命は、すべてあなたの救いの手に委ねます。もし鴛母が従わないのなら、わたしには死があるのみ。これらの身外の物など、みなあなたにあげる、わたしに替わつて墓碑に、半村の妻馬氏」と書いて欲しい、私が死んでもからも、靈魂がまたあなたに琴の演奏と歌を唄つてあげます。」半村はこれを聞き、馬湘蘭をきつく抱きしめ、二人は息もできないほど泣きぬれた……

二日目の早朝、半村はこの件を友達に知らせた。蘇屏山が忠告して「弟よ、君の琴は、とうに八閩に

名を知られている。中年になつて妻を失つたとはいへ、清純な娘を捜すほうが、容易じゃないか？ 妓楼の女をもてあそんだりしたら、評判も悪くなるうが！」半村は頭をふりふり、「彼女には良い心があるんだ、身売りして父母の弔いをだした。彼女は琴の良い演奏家でもある、わたしともまさに良いカップルなんだ。世にどれ程の朝廷の官、盛名夫人、礼儀や廉恥を説くひとがいても、裏では盗っ人か娼妓かも知れない——見た目は豪華な邸宅だとしても、その実、娼婦をかこう廓かもしれない。わたしには李甲のように杜十娘に背くことはできないのだ！」

もし馬湘蘭が死ねば、わたしも生きてはいけない。どうかお兄さん、これらの金銀珠寶を使って、われわれの棺を崇武まではこんで蓮花山に合葬してくれたまえ。」

蘇屏山は半村の心が鉄のように堅いと見て、彼を助けるために若干の銀貨を借り出し、人を介して鴛母に身請けのことを交渉した。その鴛母は何としても人から銭になる木を切られてなるものか？ 決して応じない。馬湘蘭は事ならずとみて、即座にとびおり飛び下り自殺をくわだてる。鴛母は、入るべき財も人も二つとも空手形になる、と思い、しぶしぶ身請けを承知した。ただし半村に身請けの金として一千両を要求した。半村が途方にくれているとき、いい具合にその頃崇武に宝石商人がいて、蘇州に来てあきないをしていた。このことを聞いてとても感動した。すぐにあちこちから千両集めて、馬湘蘭を郭からぬけださせる。同時に半村と結婚させて、彼らを自分の船に乗せて、家郷の崇武へ帰した。

馬湘蘭が一步半村の家に入ると、琴蔵に従姉白素娟の絵が掲げられている。今更半村の情の深さを知り、言うにいえなほどの喜びを感じた。夫婦ふたりは、瑤琴をとって、《瑤琴頌》をふたりで弾いて、白素娟への懐かしさを現わした。この時から、夫婦ふたりは琴の芸の中へ心とくかしていった。半村の奏法は、青から出でて藍より勝り、その上、曲譜を良くすることから、人々から《八閩の琴師》と呼ばれた。出自たる家郷の南曲を熱愛して、彼は後半生すべてをかけて、《南曲集成》の編纂に費やした。馬湘蘭は彼の力強い助手となった。彼が曲譜を修正できるように、常に彼のために演奏した。多くの南曲、例えば《梅花操》など古い名曲を伝えて、南曲器樂の貴重な作品を作り上げた。

『アメリカ頼みの拉致問題解決を、  
どのように考えたらいいのだろうか』

種 橋 誠 治

北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）との拉致問題を解決すべく、小泉政権はブッシュ政権に倣って人権問題担当大使を任命しました。昨年十二月、外務省担当官も協議再開に目鼻をつけるべく北京に向かい、国交正常化交渉、ミサイルなどの安全問題と同時並行協議で、日本人拉致事件を交渉することに同意しています。

「粘り強い交渉」といえば聞こえはいいのですが、北朝鮮にとって日本政府の話し合い路線など、混ぜっ返してもてあそんでやるいい材料にしかありません。都合悪くなれば、「日帝支配の清算が先だ！」と席を立てば、いくらでも時間稼ぎができてしまう交渉です。現状に風穴が開けられ、拉致の全面的な解決の時がくるとはいつのことか考えることができない

でいます。

拉致、すなわち時代離れをした「人さらい」をしておきながら、三家族の送還で「解決済み」の姿勢を押し通そうとする北朝鮮の壁は、話し合いで解決できるのだろうか。小泉流の「話し合いと圧力路線」とは、これまたアメリカ頼みで、日本人としての必死さはとても感じられません。

人権外交を振りかざしたり引つ込めたりしているアメリカは、自らばらまいてきたテロの温床を破壊するため、アフガニスタンやイラク武装勢力の容疑者をキューバのグアンタナモ基地などイラク国外への拉致を公然と行い、非人道的な恥ずべき拷問を続けています。ドイツやフランスの空港を利用した、CIAのテロ容疑者のブルガリア内米軍基地などへの輸送も、拉致行為そのものです。

このような、裁判も認めぬ拷問のシステムで人権無視の拉致が許されると考える、アメリカに頼り切ろうとする小泉政権に、北朝鮮の非人道行為を糾弾する正当性が認められるのであろうか。ましてや、日本の軍国主義時代には、朝鮮半島から有無言わせぬ労働力の徴用をしています。これが、これとて拉致に等しい蛮行です。

日本を舞台にした北朝鮮の暗躍は、考えてみれば、「アメリカ流工作活動」とか、「日本人に対する仕返し」感覚で正当化しようとしているとしか考えられません。

太平洋戦争で日米が開戦したとたん、アメリカのルーズベルト大統領は南米のペルー政府との秘密交渉で日本人移民の男性だけ二四七五人の無差別逮捕を要求して、アメリカ本土の強制収容所に拉致するというような乱暴なことをして塗炭の苦しみを与えています。クリントン大統領の人権外交の時代、その非を訴えられると、おざなりな謝罪でその責任すら明確にしようとしていません。自国本意のアメリカの人権外交とはこんなもので、それは、国内では人権意識の欠落させた中国政府が、対外的に人権外交を主張し始めるようなものなのです。

今日、手当たり次第の理不尽な北朝鮮政権の軍事工作活動が、日本政府・治安、警察当局の無関心さと怠慢が、拉致事件をやりたい放題で放置させていたという事実が明らかとなっています。もちろん、北朝鮮、韓国、中国政府の代弁者となって、日本政府の有効対策を阻害し続けた最大野党社会党や共産党の果たした役割のいかに大きかったかは、日本人多くが



記憶に新しいところです。在日北朝鮮系協力者の存在も不問にされたままです。

もちろん、ある時期までは北朝鮮の社会主義革命への連帯の意識は日本人の中に広くありました。しかし、今日もなお北朝鮮で社会主義革命が継続していると考える日本人はいません。ところが、相も変わらぬ「日本帝国主義の情勢分析」に立脚して、「金正日体制擁護」を展開して憚らぬ革命論者が存在しているのには驚かされます。ましてや、北朝鮮に誤ったシグナルを送り続けて、その誤りを認めようとしてもしないでダンマリを決め込んでいる党派は、当然のごとく、その存在意義すら危うくなってしまうました。

日本人のナシヨナリズムを煽るまでもなく、日本人の主権がいつも簡単に侵害されていた事実に無神経であったということに驚くばかりです。これが戦後日本の民主主義の実態で、平和憲法下の平和ボケしていた姿としか言いようがありません。

曾我ひとみさんから三家族の帰国は、拉致問題の実態と全貌をはじめて日本人に知らせることになりました。北朝鮮当局にとってほとんど思い違いといったところであっても、安否をたぐる術なく諦めに近いところまで追い詰められていた多くの拉致被害家族に、一つの光明

も与えました。そして拉致が平和時の現代において公然と遂行され、闇の中で葬られようとしていた事実に愕然としなかつた人はいないでしょう。

このような前近代的な「人さらい」がこの日本で進行していた事実は、この時代に日本が国際的な女性の人身売買の市場となっていることが公然化した問題同様、日本人として恥ずべき問題です。それを外交交渉の俎上に乗せれば、解決できるといった問題ではないことも明らかです。自国民の人権が強奪されていることに無神経な政府の交渉姿勢では、問題の根本的な解明は望むべくもありません。

北朝鮮工作員やその協力者たちの眼を警戒してか、公安警察からの注文に従ったのか、帰還三拉致家族は、これまで拉致の実態に関しては多くを語ろうとしませんでした。しかし、最近になって、ようやく拉致生活の詳細やらが語られたり出版されるにいたり、拉致問題が新たな展開を見せるまでになっています。そして、タイ人女性とマカオ人女性も拉致されていたという事実が浮かび上がることによって、拉致問題が国際的様相を強めるまでになっています。

とはいいながらも、拉致や「人さらい」は、工作員が闇に紛れて海岸線に上陸して、行き

当たりばったりで決行されているとは考えられるものではありません。拉致生活に耐えられ  
そうな人物に目星をつけていることから、周辺に工作員に協力した人間がいた可能性が高  
く、脅かされた結果とはいえ、北朝鮮に関係者のいるその人間が、いまでも素知らぬ顔で日  
本社会に溶け込んでいるのです。

曾我ひとみさんの証言から、拉致工作の実行首謀者はシン・グアンスクであることが特  
定されていますが、日本の警察当局も他の拉致容疑で本人を旅券法違反の容疑で国際手配を  
しています。そのシン容疑者が韓国で逮捕され死刑の判決を受けながら、南北首脳会談によ  
る離散家族再会の見返りに、二〇〇〇年九月に北朝鮮に送還され、英雄愛国者に祭り上げら  
れています。

たかが旅券法違反容疑ごときのことでは外交問題にもされないでしょうが、交渉打ち切り  
に戦々恐々する、日本の外交交渉団に国際手配犯の引き渡しを切って出せる可能性など考え  
られません。北朝鮮には、対米依存の日本外交などすつかり足下を見透かされているわけ  
ですから、いくら手みやげの用意があっても、また、まんまと只取りされるのがオチというも  
のです。

いま、政府と交渉団にとって、「粘り強い交渉」のエネルギーが問われているとするならば、  
それは国民の声にどれだけ耳を傾ける姿勢があるかどうかにかかっているのではないか、私  
はついそんなことを考えてしまいます。

なぜなら、拉致問題とは、つけ入られる油断とスキをつくってしまったという意味では、  
日本と日本人という自らの体内で生みだしてしまった事件でもあると考えなくてはならない  
と思うからです。金正日を悪逆非道の張本人に仕立てるだけでは、問題の本質が見えてきま  
せん。

## 生命の卵

成田市東峰在住 樋ケ守 男

(地球的課題の実験村村民・農事組合法人三里塚ワンパック野菜の鶏屋)

ゼロは虚でもナッシングでもない

『なぜ金や力、空港のいう発展や共存の論理、『話し合い』で反対派、農民たちはいなくならなかったのか』。毎年一度ほど招かれる空港公団(現成田空港会社) 労組の学習会で彼らに問う。「それはゼロの考え方に似ているのだ」と。百あったものを半分に、次にその半分に、また半分にと何回何百回と割ってもゼロにはならない。いくら押ししてもやはりダメ。限りなくゼロに近づいてもゼロにはならない。逆に一方的なやり方への違和感はもちろん、失われたもの奪われたことへの思いが、少数でも残った側をより重くすると。

でも、ひとつずつれ横から見るとゼロは+100と-100が合わさったもの。違う相手と一緒に

なることでゼロが生まれる。+50yと-50yでも、+3zと-3zでもゼロになる。さまざま  
な有が自分勝手にではなく、違う相手と飛び込むことでしかゼロは生まれない。ゼロという  
場は違うもの同士、時には対立するもの同士の、ある種の信頼や緊張感に満ちた協働の場と  
してできあがるのである。

ゼロは無である。有るといふ側だけから見ればそこには何も無い、ブラックボックスのよ  
うに自分が吸い込まれていくだけの怖い場。しかしゼロは何も無い虚ではなく実は無数の  
有によって満たされている。無数の個々が共生協働することで生まれる安定平和な場である。  
当然そこでは各自のエネルギーが失われていくのではなく、蓄えられていく。その力が軸心  
をも動かしていく。ゼロとはそういう世界だと私は考えている。』(拙文 実験村通信第二九  
号『有縁―無縁、入り会いとメンバーシップについて考える―ゼロということから』)

### 歴史と世界をつなぐ一個の卵

私は今、成田市東峰というところに住んでいる。東峰は四〇年前から成田空港のB滑走路

「予定地」であり、四年前からは頭上四十メートルをジェット機が行き交う所でもある。我が家の南側は空港第二ターミナル、西側の誘導路を通って、北側にある滑走路で離発着するための進入灯が東側に並んでいる。東西南北に世界各国の飛行機を見ることができ、轟音や振動も充分堪能できるという飛行機マニア垂涎の場所、本当に有り難い場所である。また、丁寧にも私のはたらき場所、無農薬野菜の産直グループ―三里塚ワンパックスの鶏舎は進入灯と接しており、頭上四〇メートル、鶏舎の屋根から手を伸ばせば届きそうなところを飛行機が降りてくる。とてもうるさくて怖い場所でもある。

こんな場所でも幸か不幸か鶏は卵を産む。そこで一千羽近い鶏を平飼いで飼っておおぜいの方に卵や肉を食べていただく、また一方では鶏糞や死骸が無農薬野菜の肥料になるというのを私の主な仕事とさせてもらっている。毎日何百個もの卵を一個一個、具合を確かめ汚れを落としたりして出荷する。すると自分が手にしているこの卵一つで何百万年も生命がつながってきたんだなと腑に落ちるときがある。

鶏はもともと野生の雉の仲間を人間が家畜化したわけだが、とにかく産んだ卵が孵って育たないと新たな母鶏にはなれない。ひよこから卵を産むようになるまで育つのだってたいへ

んなことだけど、それを何十万回か何百万回かやって、何百万年と一個一個の卵でつながっている。

以前、青い卵を産むアロウカナという鶏を飼ったことがある。原産地は南米チリのアロウカ地方。ヨーロッパ人に侵略され追われた南米大陸の先住民たちの中で最後まで戦い続け自己権を獲得した部族が飼っていたのがその鶏だった。南米原産の鶏たちも侵略者たちが連れてきたヨーロッパ種の鶏に駆逐あるいは混血されていなくなつた中、抵抗を続けた地に残つたのがアロウカナという原種だった。青い卵は何百年もの抵抗闘争を闘った先住民たちの生命、人と生き物たちの生活の証でもあった。一個一個の卵にうけつがれた多くの生命、それを今、自分が手にしている。

それは同時にこの生命の行く先を自分が手にしているということでもある。うちのは有精卵だからこれを鶏に抱かせれば二十一日後には孵ってヒヨコになり、やがては新しい卵の親になることも出来る。十個入り六個入りのパックに入れば、日本全国あるいは海外の誰かが食べてその生命になる。私がここで取り落とせば、鶏の餌にして鶏の生命の糧になるか、土中の微生物の食べ物になる。その卵一つの、ある種無限大に広がる生命のつながり、その

可能性を自分が手にしている。

卵一つが生命だと感じられれば、それにふれている自分が、何百万年と続く歴史と地球大の現代世界が交わるところにいと観じられる。歴史と現代世界の生命の交点に自分がいる、今自分がしていることがその交点になっていると思う。手や目はさつき次々と卵をふかないと仕事にはならないのだが、刻々と変化する歴史と現代世界の交点に私はたち続けている。

### どの私を欠いても成立たないみんなのもの——入会とその民主主義

この東峰に人が住んでいるということを重ね承知で飛行機は飛び続けている。事故が起きて我が身を殺されてしか空港会社や国が殺人の確信犯であつたことを立証できない。もちろん立証できたとしても彼らが有罪になることはないのだろう。

その飛行機を飛ばすために、村の神社林が空港公園に突然切られた。空港公園は元の名義人から神社の土地を買ったのだと言った。そこから「神社の土地や森は、名義人が誰であれ、集落みんなのもの、全員が同意しないかぎり売り買いも処分もできないものだ」と裁判をや

って、神社の土地を村に取り戻したということがある。

それは民法でいう「入会権」の主張で、そこにいう「総有」——「みんな持ち」というのは、  
成員全員が同意しないと、自分の持分さえも動かせない。普通にいう共有は自分の権利は自分でだけで動かせるけど、総有はそうではない。文字どおり「どの私を欠いても成り立たないみんなのもの」だから、全員が納得できる一つの結論をさぐるしかない。だったら個人個人が自分のエゴを主張し続けられるようにも見えるが、意外にそうはならない。個人個人がふだんに自分のことと同時に村のことや他人のことも考えたり決断することを迫られる。人々は私であると同時に公であらざるをえない。文字通り一人一人が主人公で他人と共に生きていくための民主主義である。

現代民主主義は代議制と多数決によって成り立つ民主主義だから一人二人いなくてもいい。社会で圧倒的多数の「弱者」は強者同士の争いに票としてだけ動員される、少数が多数を治めるのにきわめて都合のいい統治の民主主義だと言える。また現代の日本社会とか、かつて社会主義と呼ばれた国々の例などみると「みんなのものである」とだけ言うと、うさんくさいというか、公有とか社会的所有といつても官僚や政治家特権層の意で動かせるものとしか

見えない。絶対私有制の感覚になっているのか、社会的疎外感か、みんなという自分が抜け落ちるところがある。

対して入会いはどの私を欠いても成り立たないみんなのものである。それを成立させる民主主義は私が「納得制民主主義」と呼んでいる多数のうち誰一人を欠いても成り立たない全員一致制、自治自律の民主主義である。自律がなりたつのは自分が私であると同時に公であるからだ。人は自らの中の公性をもつて私の限らない欲望を律していく。それを日本の民衆は何百年とかかつて武家政権に抗してつくりあげ、近代天皇制国家の中にも残し続けてきたのだ。

### 生命の公性

入会いにおいて、人が私であると同時に公たりうるとするのは、入会いが人間同士だけでなく、森や川、海といった自然物に生命の群れとの間に成立したものであるからなのだろう。

自分を生命と考えると、自分をかたちづくっているすべてのもののうち自分だけでやれているものなど微々たるものだ。吸っている酸素はどこかの山か熱帯雨林かの木がはきだして

くれたものだし、飲んでいる井戸水は何百年か前に降った雨水を土がろ過してくれたものだ。作物を育てた土はそれこそ無数の微生物や生き物の働きでできているわけだし、魚だって何千<sup>+</sup>とはなれた海のプランクトンや小魚を食べて大きくなったものかもしれない。

生き物は私に食べさせたり吸わせようと思ってるわけではないだろうが、そのお陰で私が産れ生きていられる。私のないこと、私の所有の論理を超えたものを公というなら、すべての生き物は自分のためだけではない生命のはたらきをしている。公であるといってもよい。すると自分という生命は無数の生命のはたらき、無数の公に満たされている。

そう考えれば自分は私であると同時に公でもある。生命としての人間も本来そのように作られているはず。人間の営みが他の生命をつなぐことにかかわっている。微々たる一挙手一投足が世界を刻々と変えている存在だと思ふのだ。

### 一人一人がふれている生命の卵

自分だけで生きられる、自分のためにだけ生きていいというのは現代とか資本主義に特有

の考え方で、生命としての人間は、かつて自分と社会が一体であるとか、自分のすることしないことが他の生命のありようを変えることが、人々の営みの中でわかっていく社会を形づくろうとしたのだろう。入会いもそうした考え方でできたものだし、近代化の中でも失われず残る世界の民衆の伝統的な生き方や知恵の中に、似たような考え方は多くあると思う。だから本当に一人しかない自分にこだわりながら、その私にとらわれない。私や行政としての地域とか国家とか排他的な壁ばかり高くしないで、どんな場所でもどんな仕事、生命のあり方でも歴史と世界につながっていると感ぜられる世の中にしたものだ。世界中の人々が心おきなくゼロにとびこめるような。その時、農と空港の姿がどう変わっているのか、楽しい想像ができるだろうか。その未来へと続く生命の卵は、いま生きている私たち一人一人の手にふれている。

## 『翔る』廃刊記念号に寄せて

福 井 武

『翔る』の廃刊、残念でなりません。編集子の皆さん、全くの手弁当でこれまでのご苦勞に、一購読者として心からお礼を申し上げます。

こうしてここ数年、私の周辺でも幾つかの定期小冊子やミニコミ誌が消えていっています。“第四の権力”といわれる巨大マスコミの横暴、独善的情報、志の低さに辟易し、久しく信を置くことが出来ません。他方で“生身の声”ないし“地の塩”とも言うべき『翔る』やその他ミニコミ誌の“言い分”に随分と救われ、教えられてきました。

私が『翔る』を購読する契機になったのは、もう七、八年位前になるでしょうか。友人のTさんの紹介によってでした。はじめて『翔る』を手にしたときの驚き。佐伯洋介先生の巻頭の強力に、目からウロコ状態でした。以後、毎号を楽しみにしていました。先生の文章の

切れ味は抜群でして、日本はもとより世界がその時々抱えている諸々の事象を鋭く分析し、組上りにのせて料理し、問題の本質ないし根っこがどこにあるのかを明らかに見せて、解決の方向性を実に鮮やかに示してくださいました。どれだけ多くのことを学んだことでしょうか。合掌。

先生が亡くなられて『翔る』の誌面に勢いが見られないことに、少し気にはなっていました。しかし、寄稿者諸氏の意見や活動報告は、折々楽しみにしておりました。

『翔る』の火は消えても、その初源の魂は一人一人の購読者の心に生き続けていくことでしょう。それぞれが持ち場で『翔る』の芽を摘むことなく育てて行って欲しいものです。私もその一人として「正直に生きること、正直に学ぶこと」を実践し、「深い考エヲ持ツ人」になるようにこれからの残り少ない人生と向き合って生きていきたいものです。私が『翔る』から学んだ精神のあり様です。

終わりに、一つお願いです。もし可能ならば、一八五号の終刊で、佐伯先生の『翔る』における巻頭文中から「箴言の言葉」といったものを、編集子の皆さんで先生の遺言として、

選んで加えてもらえないでしょうか。先生の『翔る』に於ける論説を一冊にまとめて上梓して欲しいのですが、これは無理でしょうかね。

二〇〇六年二月二日



## 日鉄溶接工業時代のこと

「仕事を問う」——東海村臨界事故と「全共闘運動」によせて

望 月 彰

一九九九年九月三〇日、東海村で臨界事故が発生した。二人の作業者が亡くなり、七〇〇名が被曝した。私は鉄鋼関連の企業で「組合」にかかわりを持つことはあったが、約三〇年東京の運動には係わらないようにしていた。しかしこの臨界事故の故に以来五年しばしば東京に出かけるようになり、すっかり「政治」の世界に戻ってしまった。

佐藤秋雄さんは一〇年前、大賀達男さんとともにわたしのつたない「コンサート」を企画してくださったことがあった。そして今回また「翔る」終刊号に一文を寄せるようにとのおさそいがあり、感謝に気持ちをもって、なぜ臨界事故の問題に取り組んでいるかを書いてみます。

七〇年安保闘争の渦中で私は就職することにして、いくつかの町工場を経て日鉄溶接工業に入社した。造船や建築、自動車などに使われる溶接材料（溶接棒、自動溶接ワイヤ）などのメーカーである。新日鉄の直系子会社で、中心工場のひとつは戦前の海軍溶接棒工場の民営化である。五年ごとに大規模な合理化があるのも特徴だったが、労働災害が頻発するというのも大きな特徴だった。現場の作業者は本心とは違って、事故が起きると作業者のドジを冷やかす発言だけが表に出るのだった。私は後に組合役員になるのだが、一組合員だったときから「違う」ということを露骨に指摘した。そこで組合役員になる以前に課長は私を職場の安全衛生委員に指名した。以来二五年後に退職するまで、災害の原因解明はライフワークのようになつた。その基本は「何をいかに作るうとして、災害になつたのか」をありのままに確認することだった。災害の原因を隠そうとしたり、災害があつたこと自体を隠そうとするのは、管理職も作業員も共通する傾向で、これをあからさまにすることは、ある人たちからすれば憤懣やるかたない諸行だったが、また別の人たちからすれば、切実な問題だった。作業員のなかだけでなく管理職の中にも真実を知りたいと思う人がいたわけである。

ところで「何を如何につくろうとしていたか」という問いには前提がある。この溶接材料（商品）を作ると、「誰にとつて、如何に有益なのか」という問である。いやいや作業しているのと情熱を打ち込んで作業しているのとどちらが災害が少ないか、想像してもらいたい。ものづくりをしているのだから、自分の作っている「もの」が良い物か悪いものかは重要で、本来「生きがい」の原点なのであるが、企業にあつてはこの問いはタブーである。そこでわたしも通常はことさらこの問題を議論することはなかったが、一九八六年にチェルノブイリ事故が起きたとき、工場安全衛生委員会でも工場長と一回だけ論争した。

「わが社は原子炉の溶剤を作っているが、今後は止めたほうが良い。多くの人の命に係わるし、国家的規模の災害に保障をする原資はないはずである。」と指摘した。工場長は「原子力は国の方針なので、わが社だけでは判断できない」といつて、論争を避けた。そこで私の首もつながったわけであるが、組合役員は、私の意見に賛成するものは一人もいなかった。日共系、社会党系組合役員、元全共闘系役員すべてが私の意見に反対だった。「売れば良いじゃないか」というわけである。このような精神的風土は日本の大企業に共通していることだと思ふ。

原子炉は厚さ一〇ミリの鉄板を溶接で繋げてつくる。配管も溶接である。そもそも絶対割れない溶接というものはない。ところが原子力はミス認められない。原子炉には広島に投下されたウランの五〇〇〇倍のウランが内蔵されている。だから広島では都市は再生したが、チェルノブイリでは耕作不能な大地ができた。その広さは千葉、東京、神奈川県に相当するもので、農民たちは二度と戻れなくなってしまった。

このような原子炉を作ることに加担したものはエノラゲイの飛行士と同じ立場である。自称共産主義や社会主義の大卒労働者たちも、すっかりこのことを忘れて、理性が麻痺してしまっている。

ところが、それから九年後、高速増殖炉「もんじゅ」・ナトリウム漏れの重大事故が発生した。配管の中を流れる液体ナトリウムの温度計の鞘管が折れたのだった。この鞘管と配管は当社の溶剤で溶接されていた。工場では三日間ほど戒厳令のようになってしまった。ある種の人たちは私を避けて歩いていた。原因は温度計の鞘管の設計ミスであることがわかって、胸をなでおろしたのであったが、他人ごとではないのである。

このもんじゅ事故は、ひとりの幹部職員が亡くなり（自殺とされているが、下山事件と同

じではないかという見方もある) 政府の原子力政策は一〇年ずれてしまった。それでは「何を如何に作った結果、事故になったのか。」当時、NHK特集でも指摘され、通常信じられている見解は「鞘管を流線型にしなかったこと」である。液体とはいえナトリウムという金属の流れている中に鞘管を突き出して温度を測定しようとしたのだから、単純円形の鞘管では抵抗が大きすぎた。単純円形ではなく飛行機の翼のような流線型の鞘管にすべきであった、というのであった。私もなるほどと思っていたのだが、あるとき槌田敦さんの見解を聞いて、わかった。鞘管自体必要なかったのだった。金属ナトリウムの熱伝導度は抜群で、配管のどこを流れるナトリウムも同じ温度なのだから、温度計は中に突起する必要がなかったのだ。た。

もんじゅは事故から一〇年経って、金沢高裁は国の安全審査を否定したのだが、最高裁は国を擁護し、再び起動させようというのだが、次の事故はナトリウム漏れ程度ではすまない。一般には知られていないが、発電用原子炉とは違って、高速増殖炉とは、高純度プルトニウム製造炉なのである。兵器製造炉である。これに加担すれば憲法九条に違反することになる。

このようなことは判りきったことではあるが、なぜ強調するかといえば、「誰のためのいかなる仕事なのか」を問うのが全共闘運動の提起した問いだと思っからです。七〇年安保闘争は、全国全共闘運動に転化して、歴史を画する闘争となった。このとき種々の「革命的言辭」は意味がなかったが、「誰のためのいかなる大学か、いかなる学問か」の問いが教授会にも学生にも問われ、こちらは生き続けている。この問いを社会に敷衍すれば、「誰のためのいかなる仕事か」ということになる。労働者・現場作業者はそんなことまで考えなくて良い、とはならないと思う。農民が安全でうまい米を作ろうとするように、労働者も(もちろん経営者も)有害なものを作らず、有用なものをつくるモラルが問われている。

このような視点で東海村臨界事故をみると、政府や動燃、水戸地検、水戸地裁の世論操作は見やすいものである。

事故は「バケツ」と呼ばれたステンレス容器に六、五リットル(Uウラン二、四kg)の硝酸ウラン溶液を七杯作り、ウラン精製装置の中の沈殿槽に一杯ずつ投入して、七杯目(四〇リットル強)に発生した。この事実を直視すれば、動燃(科技厅直轄の特殊法人)の

無理な注文が原因であることが、誰にも理解できるのであるが、政府も司法もマスコミもこの事実をはぐらかすためにあれこれの操作をした。

水戸地検と水戸地裁は四〇リットル投入したという事実にもまったく言及しなかった。なぜ沈殿槽に入れたのかだけを論ずれば、作業者の逸脱行為のみを論証できる。しかしウランの臨界現象とは、ある一定量を一箇所に集めると核分裂連鎖反応するということであるから、量を論じないというのは、臨界を論じないに等しいのに、マスコミも科学者も異議申し立てしなかった。このウランは安全係数をかけると二、四kg（溶液換算六、五リットル）以下で製造、貯蔵、輸送すべきことがわかっていた。にもかかわらず動燃は四〇リットル均一化という無謀な注文をしていた。この注文の故に七杯（四〇リットル強）入れたのだった。だから四〇リットル均一化注文を無視すれば、発注者・動燃の責任を問う必要はない。

かくして亡くなった大内さん、篠原さんの「業務上過失致死罪」で起訴された事件の犯人は沈殿槽使用を「発意した」篠原さんであった、という判決が下され、結審した。死者は犯人だといわれても反論しない。司法の正義は地に堕ちている。しかしこの判決は報道されなかった。マスコミも意図して判決の半分（篠原主犯説）を報道しなかった。腐敗しきってい

るとしか、言いようがない。

というわけで、日鉄溶接工業時代に始まった労働災害の原因究明というライフワークが今も続いています。このテーマで皆様と対話できる日のあることを祈念しています。

(二〇〇六、一、一八)

## 自然と人間の本源的統一の再獲得

—マルクスの自然主義Ⅱ人間主義に寄せて—

守 田 典 彦

はじめに

ソ連、東欧のいわゆる「社会主義」圏の崩壊は、ブルジョアジーとその代弁者たちによって、「社会主義（共産主義）は非現実的、非歴史的であり、もともと永続不可能なものであったことの実証である。」と喧伝され、「資本主義経済（市場経済）こそが歴史的、現実的なものであることが実証された」と謳い挙げられ、それが常識化されたようにみえる。そして、その根拠であり、その適用にすぎないとして、マルクスの思想・理論そのものも葬りさられたようにみえる。

だが、アフガン・イラクに対する侵略戦争を頂点として、現代世界は資本主義的帝国主義間の、また資本主義先進国と後進国の利害関係に基づく抗争の激化、そして労働者、農民を

はじめとする全勤労人民に対する搾取、抑圧の深化による階級闘争の拡大、激化、そしてまた、自然生態系の攪乱、破壊の進行は資本主義の支配する全世界の墮落と没落の必然性を示している。

このような歴史的現実には、マルクスの思想、理論の全自然的、人間史的解明と展望はその現実的歴史的妥当性を鋭く明らかにしていることを示しているのではないか。

☆スターリン主義Ⅱマルクス・レーニン主義という、いわゆる正統マルクス主義の批判とマルクスの思想・理論の獲得、再把握を

最終的にスターリンによって歪曲されつくした「正統マルクス主義」の非歴史的、反人民的のそして、似而非マルクス主義を根底から批判し、克服して、マルクスの思想・理論の歴史的現実性を主体化し、社会的あるいは人間の人間の自由な連帯による共同体としての、共産主義社会の創造のための革命実現の途を明らかにすることが必要ではないか。

（かつて《一九五〇年》のコミンフォルムの日本共産党批判《アメリカ帝国主義占領下で、平和的革命が可能という日和見主義的見解の批判》によって分裂した日共国際派《コミンフ

オルム批判を受け入れた分派」に属し、反封建的民主主義革命を主張する所感派に対し、社会主義革命を主張して、日共の右翼日和見主義に反対し、抑圧に抗して闘っているつもりであった。だが、「コミンフォルム《スターリン》と中国共産党《毛沢東》の国際派に対する再批判《国際派にはスパイがいるという》」によって、国際派の中央《宮本顕治など》が、下部黨員のわれわれには全く無断で国際派分派を解散して、自己批判して党に復帰するべきだという方針に反対し、復党を拒否したが《五一年夏》、ハンガリア労働者、知識人の総評議会を結成《五六年十一月》しての二度に亘るソ連軍の介入、軍事的政治的弾圧に反対しての反乱の前《五六年九月》に自己批判なしで復党したが、ハンガリア人民の反乱に対し、ソ連、中国共産党《もちろん日共も含む》などの「アメリカ帝国主義の陰謀」という反革命的な反人民的立場に立つてのソ連共産党の武力介入の支持に反対して、結局、党除名処分を受けた。當時はスターリン主義に反対して、マルクスの立場に立ったと思っていたが、その後、思想・理論的にはプロ《半ば》スターリン主義でしかないと考えざるを得ずマルクス主義ではなく、マルクスの思想・理論を追究し現在まで悪戦苦闘することとなった。

マルクスは「……ブルジョアの生産関係は、社会的生活過程の最後の敵対関係である、敵対的というのは個人的敵対という意味はなく、諸個人の社会的生活条件から生ずる敵対という意味である。しかし、ブルジョア社会の胎内で発達しつつある生産力は同時にこの敵対の解決のための物質的諸条件をもつくりだす。したがってこの社会構成をもつて人間前史は終わる」(経済学批判序文)といっている。人間前史を本来史に転換するのが、まさに資本制社会を転覆し、人間のあるいは社会的人間の自由な連帯による共同社会としての共産主義(アソシエーション)社会を創出するための共産主義(プロレタリア)革命である。

☆マルクスの思想・理論は自然主義Ⅱ人間主義に基づき、自然と人間の本源的一の高次元での再統一を実現するもの。

人間(的自然)と自然(人間の非有機身体)の本源的一の高次元での再統一、を目指すマルクスの思想・理論は人間主義Ⅱ自然主義に立却したところの政治的経済学批判である。だが、スターリンによって反歴史的反人間的似而非マルクス主義として、このマルクスの自然主義Ⅱ人間主義を把握するどころか、拒否したところのマルクス・レーニン主義にまで貶められた。

資本制社会は、人間（生産者）を自然から完全に切り離すことによつて成立する。そういう意味では、スターリン主義はブルジョアの立場と同一の次元といえる。

人間は本来、労働を媒介して、自然を人間化し、人間を自然化することによつて、人間と自然の統一を実現しつつ人類の自然史的発展を確保しようものといつてよいと思う、生活諸条件（生活手段、生産手段）は本来資本ではない。生活手段、生産手段を貨幣所有者が、剰余価値を獲得し、富を蓄積するために私的に取得し、他方、直接的生産者は、生活手段、生産手段を奪われて、自分の生活手段を得るために、自分の労働力を販売するという自由な労働者という、二つの異なつた商品所有者が対抗することによつて、生活手段、生産手段は資本に転化する。

すなわち「資本関係を創造する過程は、労働者を彼の労働条件の所有から分離する過程——すなわち、一方では社会的な生活・生産手段を資本に転化し、他方では直接的生産者を賃労働者に転化する過程——の何ものでもない」（資本論24章）

資本制生産過程では、労働しない所有者が資本家として剰余価値獲得のため生産者となり、労働する賃労働者は直接的生産者として、生活・生産手段（自然）から引き離されてプロレ

タリア（無所有者）となる。一方は労働せず、他方は領有しないと、共に疎外された人間であり、労働するが領有しない賃労働者は、この関係を止揚する革命的存在となる。

いったん資本制の生産が始まれば、その分離を維持するばかりではなく、ますます規模を増大しつつ再生産する。

このようにして成立した「資本制の生産様式から発生する資本制的取得様式は、したがつて資本制の私的所有は、自分の労働を基礎とする個人的な私的所有の第一の否定であるのだが、資本制の生産は自然過程の必然性をもつて、それ自身の否定を生み出す。これは否定の否定である。この否定は私的所有を再建するわけではないが、しかも資本制時代に達成されたもの——すなわち協業や、土地の・および労働そのものによつて生産された生産手段の・共有——を基礎とする個人的所有を生み出す」（党本編二四章）。

以上のようにマルクスは、資本制社会が、人間と自然の分裂を維持し、増大すること、そして、資本制社会の否定によつて、この分裂を止揚し、自然（大地）と人間との再統一としてあることを明らかにしている。（ここで注意したいことは、国家的所有でも社会的所有でもなく、個人的所有であること。そして、排他的私的所有ではなく、共同所有としての個人的

所有、であることである。)

☆共産主義社会とはどんな社会か、

ここで共産主義社会とはいかなる社会であるかということが問題となるが、それがどんな存在形態であるかは、わたしにも具体的にはわからないのでさておいて、簡単に、労働と所有の統一（したがって、生産と消費の分裂も止揚される）を実現し、都市と農村の対立は止揚され、都市を解体し、多くの生産⇨消費組合の連合として国家は廃棄され（したがって、当然階級は存在せず、無階級社会であり、政治は止揚されている。したがって民主主義も止揚されている筈である）人間の人間あるいは社会的人間の自由な連合した共同社会であろうと予測するしかない。

☆既存、現在の自稱、他稱「社会主義」社会は、いかなる社会か。

既存した、あるいは現存する自稱・他稱社会主義国家については、いろいろな説があるが、すなわち、疎外された社会主義、あるいは社会主義（共産主義）への過渡期の疎外された社

会、あるいは国家資本主義など定義されるが、私としては、およそ社会主義、共産主義とは全く無縁な社会であり、社会主義、共産主義への過渡期国家でも全くないといえる。どちらかといえば、自稱共産主義者の党として、労働者政党を僭稱する「共産党」独裁の開発独裁国家という、どちらかといえば国家資本主義に近い体制と考える。しかし、国家資本主義という社会は、全く新しい概念でありよくわからない。本来的資本主義国家は、二重の意味で自由な労働者が賃労働者であり、一方の自由は人格的隷属状態から解放された自由な存在で、職業、住居、旅行などの自由な存在であり、他方、生産手段からの自由、すなわち無所有者である。そういう意味から言えば、人格的隷属状態にあるという点では二重の意味での自由な労働者とはいえないので、「国家」資本主義というのもすっきりしないから資本主義社会への過渡期、開発独裁社会と言った方がよいと考える。

☆資本主義社会から社会主義社会への過渡期の国家としてのプロレタリア独裁

プロレタリア的独裁については時間切れもあり、マルクスの「フランスの内乱」のコンミュニョンの原則を則って、考えねばならないが、パリコンミュニョンは、パリという一都市の



フランスの極小部分の革命であるが故に、もつと全国規模について考えなければならない。

しかし、国家機構は既存の官僚、警察、常備軍、裁判官という体系的で階層的な分業方式で造りあげられた諸機関をもつたブルジョア的国家機構を粉碎し、武装した全勤労人民の命令的委任として根底から造り換えなければならない。そして、私的資本（企業）を解体し、生活手段・生産手段は勤労人民の管理の下に労働者有へ転化する自然と人間の再統一を実現するという大きな施策に手をつけなければならない。

従つて、都市を解体し、工業と農業を一体化し、全勤労人民がみずから食糧生産に携わる極めて大きな、時間も長期に亘る作業が実現しなければ、共産主義社会への移行はできないという意味では極めて過渡期は永い年月を要することを見据えて、腰を入れてかからねばならない、（この点はもつともつと勉強しなければ）のではないだろうか。

## 国立虎の門病院を退院してからの現在の私。

山崎 守夫

始めに、『翔る』編集の皆さん、私が入院した時に 励まし文章ありがとうございました。勇気づけられました。現在の私は退院してから二年経ちリハビリに通い続けています。

入院した時の病名は高血圧と糖尿が高く、高いにかかわらず、アルコールは仕事が終わると毎晩飲んでいました。それも飲む量が増えてきていたのです。糖尿のほうも血糖値が高いにもかかわらず甘い物を食べてばかりいました。

私が心筋梗塞から脳内出血で倒れた所は、姉の家です。お盆休暇で姉の家でのんびりと休暇を過ごそうと想ったからです。姉の家は私にとっては何時訪ねても優しくて、私には居心地がよかったです。倒れる前日の日、その夜はいつもの通り晩酌としてアルコールを飲み、気分よく飲めたので量も増えていました。五百ccのビールを五六缶飲むと此の頃で

は喉が渴き始めて、次の日に晩酒をひかえると喉の渴きもなくなり週一―二日晩酒を我慢しますと喉の渴きもなく、甘いものとアルコールは体が要求したのです。姉の家で晩酌した次の日ビールを飲みたくなり、我慢できずに失礼と思いつながら冷蔵庫を開け棚に入ってたビールを取出し飲んでしまいました。誰もいなかったので黙って飲んでしまいました。一缶飲んで急にふらつき、手に持っていた別な缶のフタを開けようとしたが、泡が噴きでてしまい部屋はビール泡だらけにしまいました。

丁度その時に義理の兄が来たのです。義理の兄は私にいつも優しく見守っていて感謝しきれません。私が病院に入退院してからもなお同じです。義理の兄は私がビールの泡をチラカシした部屋を見て私の様子がおかしいと思ったらしく姉に連絡し、慌てて来た姉は三女の娘と一緒に血圧計で血圧を計ったら高いほうで二百十あり、私は頭がフラついてきたのです。フラついても、姉や義理の兄に心配迷惑をかけまいと毅然とした意識を装っていましたが、頭のフラつきは変わらず、便所の床に尻餅ついてしまったのです。姉夫婦は私の様子を見兼ねて救急車を呼びました。連絡するとすぐに救急隊員が来てくれたのです。隊員さんは私の意識をたしかめるかのように担架に寝かせて話かけてきたのです。血圧計で計ったら隊員さ

ん等は「高いデスネ」姉夫婦に話かけていました。「病院は何処の病院にしますか」とも聞いていました。私は意識だけでもしつかりあるふりをしていました。救急車隊員と姉夫婦との会話は記憶にあるのですが、また救急車の担架に乗せられ姉夫婦が心配そうに付き添ってくれるまで私の記憶にあり、それ以来私は、国立虎の門病院で眠ったままになってしまいました。

意識が戻りかけたその日は、ベッドに寝かせられているなと思いました。ベッドの柵と手摺りだと感じられたからでした。私はその手摺り柵に捕まろうとして、右手は堅い丸い物に捕まっているのだと感触が右手に伝わってくるのが解り、左手は自分の思う方向に何故か動かず手摺りの柵に捕まっているのに、左手は汗をかき握っているだけだな、と意識の中で解りかけていました。右手はベッドの手摺り柵と感触が伝わっているのに左手の方は右手同様伝わらないのは何故だと眠りながら考え、私は脳内出血がおこり半身不随になったかとも感じ取れ、悩みました。寝帰りするとアツコツチ体が痛くなり左肩と左足が痛くなり私の今迄にない人生体験で、左肩は 這脱臼になっていると後で医者に言われました。

その後眠り、子供の頃が思いだされた夢をみました。母親と一緒に昼寝したのに私が目を醒まして左右を見回しても誰もいず、私は一人取り残こされたと思ひ寂しくなりワンワン泣きだし……。一人にしてスマナイネ」母が現われると安心して泣くのやめて「守夫二カ月も寝ていたのよ」「ドオ気が付いた」姉が声かけてくれたのです。私は一人ぼっちになつた時に母親が帰つてきた時と同じ感情になり声を聞いただけで嬉しくなりました。姉に話かけられると少しづつ意識も解るようになりてきました。私が少し動こうとすると姉が声かけてきたのです。

「お腹から栄養剤をいれるとも言われたの」「私が腹を切るのを反対して鼻から点滴食にして栄養剤を流し通してくれまいかと言つたの」

今思えば姉の意見は正しかったと思います。私の体のリハビリの仕方にも同じ事がいえます。元氣だつた頃の体に戻す為には介護施設に週三回通ひ、介護施設から家に帰つてくると家でリハビリさせられます。介護施設の理学療法士の先生には「貴男、脳内出血は重傷だつたんですね」熱練な理学療法士先生が私に話かけて「エエそんな事も解るんですか」私は理由が解らなかつたので聞きかえしました。

「そりゃあ解りますよ」かなり自信を持つて言うのでした。

「貴方の手の指は鍵錠におりまがつているからね」「それだけで重傷だつたんだなあと感じ取れますよ」その時に一日に数十人者の人をリハビリをしているので解るのだなと私は思ひました。

「ついでに何処の病院に入院していたんですか」入院した病院まで聞いてくるのでした。

「国立虎ノ門病院」私はすぐに返事しました。「どうりで」。相手の理学療法士は納得した顔になつていたのでした。

「少しリハビリすると肩症炎になつているかどうかが解りますからね」私の左肩腕をマッサージしながら続けて言うのでした。「左肩は、這脱臼にもなつており肩の骨が二本分位、下がつてもいますよ」私は肩をマッサージされると気持よくなつていました。

「そんなことも解るんですか」マッサージされるがままに聞き返しました。

「普通ならこの手をこれだけ動かすと我慢できないほどに痛がるのに初期のリハビリがよかつたんですね」言うのでした。

「肩症炎になつていたら左手は上がりませんよ痛くて」「虎ノ門の上手な先生にあつたのは

運がよかったんだ」

虎ノ門女理学療法士の美人な顔が浮かんできました。虎ノ門病院で意識が回復するとすぐにリハビリさせられました。二カ月間寝ていたので体の骨を覆っている筋肉はもろく骨と骨は硬直固まってしまっており、すぐに左腕や肩の所をリハビリしていたのです。

「美人だったな」私は思わずに顔がほころんできていたのです。「そんなに美人だったんですか」私の、想いだすようにニヤけた顔を見て美人だったと判断したようです。

私は虎ノ門病院の理学療法士須藤先生の顔が浮かんできました。リハビリの期間は短い間だったけど私なりに楽しかったです。私の人生の出会いのなかで先生と呼ばれた人達は皆が美人だった女性が多く、その中でも須藤先生は格別の存在の先生と思えた。澄み通した瞳が綺麗であったと思われ、その須藤先生にいきなり手を握られ手首と指の所をリハビリさせられました。美人先生に手をいきなり握られ周りの人に気兼ねして私は恥ずかしくなると同時に学生だった頃を思い出してしまいました。街の繁華街を彼女と目立つ格好で手を繋いで歩くと憧憬の眼差しで見つめられたのと似てたからです。手を握り返すように須藤先生の手を握り締めました。私の心を先読みした須藤先生はさらに私の手指や肩腕を強くリハビリして

きたのです。私は「アイタタタ」と叫んでしまいました。私の痛がる様子を見た須藤先生、「今日はこの辺でおわりにしましょう」。

リハビリが終わると食事の時間になり、私は食堂に行き食事します。夕食が終わるとベッドに戻り眠ります。虎ノ門病院の部屋で休んでいると姉と姉の娘が見舞いに来ました。

「寝ていると尻が痛くない？」と姉は言いました。床ズレ熟そうがおきていたと思います。

「小父さん二カ月も寝ていたのよ。その間何を考えていたの」と聞いてきたのです。私なりに考えて見たが何も思い出せないのです。

「寝言でカッターとも言ったよ」姉が言い、仕事との道具の事だと想ったようです。私はカッターと聞き、考えて見ました。一緒に働いている職人仲間が定規を当てカッターでボードを切っている所に定規が滑り自分の手を切ってしまう所を見てたので、カッターと寝言で言ったと思われまます。

私は床ズレがひどくなり車イスに座ると尻が痛くなり、夜ベッドではあまりにも痛くて寝れない期間が始めのうちにありました。始めの一週間は「ダメダ。夜になると尻の床ズレで痛くて、痛くなり眠れない」と看護婦さんに言い続けました。私を眠りにつけさせるために

尻に負担がかからないように階段状に枕を敷き並べてくれました。そうすると尻が床ズレもなく深い眠りにつきました。

義理の兄も私の見舞いに来てくれました。義理の兄は私が不安になっている心を先読みしては、いつも励ましてくれているので、お礼の言いようがありません。時間も遅くなり一緒にベツトに寝ました。私達二人が寝ている間に夜勤している看護婦さんが入り一緒に横になったのです。その時は私は驚きました。看護婦さんは眠れない様子でした。私は思わず看護婦さんの手に軽くさしのべました。もちろん私の手を払いのけられたらすぐに引っ込めるとしてもいきました。私の意に反して看護婦さんは手をそのままにしていたのです。そうするとすぐに看護婦さんの軽いイビキが聞こえたのです。看護婦さんも私も仕事に疲れた時に一人で寝ると心の安らぎが欲しくなり、私の手のさしのべが安らぎを導いたかもしれません。

次の日、次女三女が昨日に続けて私の見舞いに来てくれました。小父としては、今迄に何も姪っ子が喜ぶような事はしてこなかったのに、逆に小父のほう姪ツコにお世話になったり面倒見られるようになっていたので恥ずかしい限りです。この時も「車イスに座っていると尻が痛い痛い」「何かいい方法ないか」。私は姪ツ子に言いますと、姉の子三女は座布団

を見付け折り、二女三女が協力し合って私を車イスに座り直させてくれるのでした。尻の当たる所の痛さも和らぎ、尻も楽になって来ました。三女は介護福祉の専門学校を卒業しているだけに、すぐに思いつき床ズレが和らぐようにしたと想います。

続いて姉と一緒に四男夫婦も私の見舞いに来てくれました。私は男六人女一人の姉弟の中で育ちました。私は六男です。私は兄姉には迷惑をかけて生きてきたと想います。病院に入院したことでまたまた迷惑をかけるかと想うとただ申し訳がなく頭上がらず感謝するだけです。「守夫さん元気になってよかった」四男嫁がひと安心したように言ってきました。

「私達が見舞いに来た時に涙を流していたのよ」「何処か痛むの、元気だしなさい」「怒鳴るような大声で言ったのよ。聞こえていた？」兄嫁は私に安心させるために呼びかけたと思いません。

「植物人間になっていたから意識などは知らなかったと想うの」「生命維持装置と栄養流動点滴剤で生命をつないでいただけなの」姉は義理の妹に説明するのだった。

「頭に血がたまり頭蓋骨までも切り開き頭蓋骨に貯まっていた血を取り除いたのよ」一緒に説明するのだった。

私の左脳の細かい神経細胞はズタズタに切れてしまい、その影響で左目は半分見えないう目になり、左耳も聞きずらくなってきていたのです。左手足はマヒして動かさません。

少しでも歩けるようにと介護施設に通うようになって、三年近く経ちリハビリに週三回しています。決められた時間に送迎してくれている運転士さんにはお礼の言いようありません。同時にバスの乗り下りに介助する運転士さんにはありがたいことです。

医療法人社団介護老人保健施設に私は機能快復の為に週三回通い、リハビリしていると老人福祉法が充実されているなあと実感されてきます。機能快復のためのデイサービスは肢体不自由で車イスを利用する者には便利な施設でもあると思われまます。社会復帰と体の機能回復の為に優しく丁寧のリハビリに指導してくれる指導員の人達。優しく丁寧さは女子職員も同じと言えます。多年にわたり社会に貢献した人達を敬愛し、利用している人達を、受け入れている介護老人福祉センターに働く女子職員は、老人利用者のその日の体調を読取り、退屈させず楽しく話相手になる心づかいがあり、職員の思いやりが伝わります。多彩な機練施設もあり、そこで社会復帰に目指して機能回復しようとしてリハビリに励む姿は、車イスの私には勇気づけられています。入浴時間には女子職員に介護して貰い出入りします。私は左

手足がマヒしているのでチョイト無理すると体がすぐに痛くなり、細心な注意を以て浴槽に入り私を介護して浴槽に入れる上げてくれる女子職員も、細心な気遣いで介護してくれているので、ありがたく礼の言い様ありません。

いつも明るく元気に介護し浴槽に入れ上げてくれていた女子職員が、突然の退職と聞かされた時には私はガツカリすると同時に寂しくなってきました。その女子職員大波さんが介護してくれると、私は自分の体の障害など気にせず安心して介護を任す事が出来たのです。私は大波さんが退職した理由を知りたくなり、親しくしていた同じ職員に聞きました。

「そうなの、あの人が退職するのは私も寂しくなるの。いつも明るく親切な人で介護を教えて貰ったことがあるだけによけい寂しくなってくるけど、元気に別な職場で働く事が解つたから、元気をだしなさい」。

私は大波さんの友達小久保さんに優しく励まされ、大波さんの元気な顔が思い偲ばれてくるのでした。

些細に気がついて、介護してくれているのは私にだけではなく、利用者の誰にも、親切丁寧に介護してくれていた大波さんの顔が偲ばれてくるのです。

## 安全と安心を追求することが平和へ続く

坂本 一夫

前世紀八十年代の頃、日本全国の土地の値段の合計でアメリカの領土を全部買えると言われたことがあります。やがてそれは不良債権という形になり、市中金利をゼロに導く国策により処理が進められています。そのおかげで株式市場へ目を向ける人は増えたでしょうが、例えば第三セクター鉄道などは基金の運用がままならず廃線の憂き目を見ています。

すると忙しい思いをするのが鉄ちゃん達です。彼らが愛読する月刊誌の一つにこの夏次のような文章が載りました。「二十一世紀を迎えてから百名もの犠牲者を出す大事故が起こるとは考えてもみなかった。」安全や安心が足元から崩れてゆくこととなるこの一年の象徴とも言える福知山線の脱線事故は大型連休の直前に起こり、暮れも押し詰まった羽越本線では特急列車が脱線転覆しました。鉄ちゃんの端くれとして感じることを書かせてください。

まず福知山線での事故の要因は直線部から急曲線部へ移る所での制限速度超過とされています。推測されるのはブレーキ系統の異常か、運転操作の誤りに絞られます。でもここで、当該列車は始発駅に入線する際に既に停止位置を行過ぎる過ちを起こしていて、それは運転操作によるものと見られています。が、細かく見るとブレーキの応答性の点で何か疑いが残ってないとは言いきれません。そして、途中駅でも停止位置を大幅に行き過ぎ、定められたダイヤから次第に遅れを増した運転士は回復運転に努めます。車掌の証言では脱線現場に至る比較的長い直線部を走行中に運転指令へ報告する内容について運転士のほうから相談を持ちかけてきたらしい。

曲線部での制限速度は当然ながら余裕を持たせてあり、乗務員はそれを承知しているから一割二割くらいの速度超過は心配ないだろうと了解しているはず。もちろん乗り心地には大きく影響するかもしれないけれど、遅れを取り戻すことによる利便性の方を乗客も重んじるに違いない、そう運転士は考えたのでしょうか。事故調査委の中間報告では脱線時の推定走行速度は現場の制限の約六割強の超過です。さらに、現場の曲線半径から通常設定される制限速度よりもここでは五キロ高い速度が設定されていたこと、直線部と急曲線部との間

に設置される緩和曲線と呼ばれる部分の長さが標準よりも短いこと、等が専門家から指摘されています。それは東海道本線と合流する尼崎駅での線路配置を整理する際に併せて現場の線路形状がより急曲線になった訳で、結果として安全性や乗り心地は少し後回しにされてしまいました。

後手になったのは、運転の操作誤りを補うATC装置の設置でも同様です。当初の整備計画どおりならば急曲線部に進入する手前で制限速度超過により自動的にブレーキが作動し、脱線は免れていた筈です。つまり経営側も当該箇所の問題点を承知していたということですが、しかし経営側は、安全運行の要である運転士をしっかり養成し全面的に信頼していたでしょう。そこにこそ今回の大事故の教訓としなければならぬものの核心が求められます。連日のように報じられた入運転士の再教育Vは言わば精神がたるんでいるから誤操作するんだ、といった懲罰的な意味合いが前面に出ていました。それが当該運転士のような若い人には入再び失敗すれば運転業務から外されかねないVという強い圧力となって、無理な回復運転に走らせたのではないのでしょうか。当時の各紙ともに心の問題に言及しています。並行して走る路線を持つ阪急電鉄との競争の中で、回復運転どころか定時運転することすら容易でない

ダイヤを組まれていたのです。福知山線は阪急宝塚線に比べて駅が少なく線形でも高速化するには全体として有利かもしれません。でも、国際標準軌間の阪急に比して福知山線では曲線部における制約は大きく、それだけに運転士はいろいろ気をつけねばなりません。それなのにJRの経営側は限度に近い高速運転を運転士個人の技量に委ね、その補完装置については、せつかく施工対象に入れておきながらも幾多の事情が重なって大幅に遅れていたのです。そのことが今回の取り返しのできない大事故を防げなかった第二の要因とっていいでしょう。

事故後に国土交通省は、「直線部から曲線部に移るときに大幅な減速を要する箇所には、速度超過を防止するための装置を設けるべし」と発表しました。

次に羽越本線での脱線事故について、その原因は予測を超える局地的な突風に違いないとされています。同時刻に現場を横切った突風の爪あとははつきり残っていて、その様子からすると風速は瞬間で数十mにも及ぶらしい。当該の車両は最新型の軽量車両ではなかったけれど、この数値の横風をまともに受けては当然ひっくりかえります。一夜明けて事故の全貌



を目の当たりにしてみると福知山線の事故と重なる部分があつて、もし定員に近い乗客が乗っていたら救出活動がままならぬ場所なだけに犠牲者の数は前者と同じ規模になったかも知れません。そう思うと、自然現象によるものだから仕方なかった、等とはけつして言つていけないことが分かります。

風による脱線事故の大きなものでは、国鉄最後の重大事故と言われた餘部鉄橋での脱線転落、さらに前では宮団地下鉄東西線の鉄橋上での脱線があり、いずれも季節は冬でした。運転規制は風速値による訳ですけれど、空気は温度が下がるほど密度が大きくなるのでその点を加味した規制の運用も必要との声が上がっています。また今回の現場は鉄橋につながる盛り土の上なので、日ごろ私たちがビル風を体験して分かるように、他よりも風が強くなつていると考えられます。こうして見てくると、現地では何十年もの間風による事故は防いでこられたと言われても、鉄橋の前後を含めた長大な区間に風速計が一箇所にしかならなかつたというのは信じがたい事実にも思われます。枝先におわんをつけたような物を三つ組み合わせ水平に回転させるロビンソン型風速計は小型で信頼性も高いでしょうが、飛来物があったら一台では不安だとは考えないのででしょうか。

強風により運転規制がかかるのをなるべく少なくしたいと経営側は考えて、防風策をいろいろ工夫してきました。最近では例えば、直線部において風向がほぼ一定ならば線路に対し直角の方向の風の力のみを重視し、風向によつて列車に作用する力が小さくなると捉えて三角比の倍率を実際の風速値に反映させられないかという研究も進められています。しかしその一方で現場の観測点は一つだったのです。IT技術が驚くほど進歩しているのに、現状では風速計の測定値は運転指令室にのみ表示され、運転士は無線連絡でしかそれを知り得ません。事故後の報道によりあきれたりびっくりされた人もいたようです。新聞での投書では、それぞれの地域に地形などによる独特な風が吹いているのだから観測点をもっと増やせ、とか、地元の気象台との情報の共有をさらに充実して、とか、さらには走行する列車自体に揺れや空気の流れを計測する装置を載せて観測点の不足を補いつつ風の実際の移り変わりを予測してはどうか、という提言もあります。

風は生き物だといわれます。それでも最新式の $\wedge$ 気象ドップラーレーダーVを使えば直径四目のアンテナで半径約二百五十キロまで雨や風の情報を立体的に捉えられるそうです。地球の温暖化により大気現象は激しくなる方向へ進んでいるのですからぜひとも欲しい技術です。

もちろん設置し運用して情報を活かすためには先立つものが必要です。

さあここで、安全と効率と費用負担と経営者の判断と国民の選択と、そういった話につながります。二つの大事故はいろいろな捉え方ができましようが、私は次のように見ます。前段では、高速化の利便性で利用者の支持を得たJRだったが、限度いっぱいダイヤを支える最低限の安全のための設備投資が追いつかなかった。後段では、経験による自然現象への対応を科学的に検証する手間を惜しみ、安全性を高める努力を後回しにした。そして共通しているのは、競争社会と言われる中で効率や利便性がだんだんと重んじられるようになってきているということです。安全基準を満たしているのは大前提である、としながらもギリギリのところまで余裕を削ってきた△元一級建築士▽と同じ境遇に誰もが置かれていると思われまます。その結果として自由にももの言える現場でなくなり、事故や疾病で犠牲者が出ても抜本的な対策までにはなかなか結びつかない次第です。ここを打開できるかどうかは一つには、最新型ミサイル防衛システムの導入をやめて△気象ドップラーレーダー▽を拡充すべきだとはつきり言うことであり、一つには、いま私たちが享受している暮らしのありがたみをよく

かみしめて「もつたない」という心を持ち続けること、それができるかどうか、です。

二十一世紀に入って日本では人々の所得の格差が広がっています。にもかかわらず選挙制度そのものに不平等な点があるとはいえ国政選挙では与党の経済政策が支持される結果となつていきます。この状況が変わっていかない限り安全と安心とがさらに脅かされるのは間違いありません。インターネットの普及が変化のきっかけになってくれるのを少し期待するばかりです。

# 一〇〇年後の日本は

和田 博

この間、私がカケルに書いた拙文を読んでもくれた読者に感謝をしたい。

就職した職場の先輩から無理やり教宣部をやらされた。最初は人の書いた原稿を印刷して、職場の門前で就業三〇分前から配布していたが、やがて自分が職場で起こった問題を書くことになり、職場の人が私の原稿を読むことになるので何度も書き直して苦勞したことを想い出す。そのおかげでカケルに文章を出すことは苦ではなかったし、教宣部に入っていないなかったらカケルの仲間と知り合うこともなく、仕事を終えたら仲間と酒を飲むだけだったろう。

やがてカケルを出版することになる仲間と知り合い、月一回会議を開いて原稿を集めて、長期にわたりカケルを出版する事が出来た。佐藤さんがいなければカケルに携わっていませんし、カケルを出版するために初めて買ったワープロを使いこなすまでいぶん苦勞した

ことを覚えている。今はパソコンを使用しているが、職場は今ではパソコンが出来なければ出世もできないし、若い人に相手にされない。家では子供が音楽やインターネットを利用して、私がすこしはパソコンを使いこなすことが出来るので、家で酒を飲んでいても馬鹿にされずにいる。カケルに携わっていなければパソコンも買うことはなかったろうし、カケルに携わったおかげで職場以外の人と知り合い、私の人生に大きな影響をあたえてくれた。

以前私の職場では、給料やボーナスが出世しない限りほとんど差がなかった。しかし数年前から個人の営業成果や仕事のミス等で差が出るようになってきた。若い人は当たり前と思うだろうが、今まで営業をやらなくて済んだが、これからは営業もやらなくては給料も減り上司から問責されるようになる。マスコミで取り上げられて問題になつていく既得権などつくになくなっている。今のところはまだ安い宿舎に入れるがこれからどうなることやら。

職場では数年前から生産性の向上にむけて「ムラ・ムダ・ムリ」を徹底的に省いて利益を上げたA企業に研修に行かせ、モデルの職場を作り問題点を改善してマニュアルによる全国展開をはじめてきた。最近私の職場でも「ムラ・ムダ・ムリ」を無くす運動が展開され始めた。赤字体質から黒字体質へ社会構造の変化に対応していくために、ネットになっている人

件費をどうするのか。正社員には業務を増やして残業を減らし、アルバイトの人を増やして業務をスムーズにやろうとしている。しかし、仕事の割には月一七万円ぐらいでは若い人は数年で辞めてしまうし、中途採用の人は辞められなくなってしまふ。長く勤めれば正社員に採用するとか、ボーナスを正社員なみに出すとかししないと定着させることは難しいし、雇っている側にいいように利用されてしまふだけである。団結して闘えというのは簡単だが、答えが見つかからないし無責任。たとえ正社員になっても、今はちよつとしたミスでも問責されてしまい、私なんか最近精神的に参つてしまふことが時々ある。

退職するのは簡単だが後の生活をどうするのか、年金が減り支給も六五歳から。これでは働き続けなければならぬ。働きたい人はいいが働きたくなく六〇歳で年金生活をした人はどうするのか。私たちが闘わなければ若い人はついてはこない。ではどうしたらいいのか。

二〇年ぐらい前までは、私達のどこの職場でも、問題が起これば管理者を囲んで労働者が追求していたことを想い出す。今では管理者に逆らうことなどありえない。なぜ、こんなに職場が変わってしまったのか。

個人情報保護法とやらで、毎日個人情報を取り扱つかっている私の職場では仕事がやりづ

らくなつてしまった。もちろん外部に流失してはならないし、個人情報の物は外部の人が閲覧出来ないように毎日廃棄をしている。しかし、こんなことをしていたら営業なんか出来やしない。お客様からの些細な苦情までも神経を使い、特に上部にお客様が直接苦情の電話をされるのを管理者は心配する。管理者の出世に影響するからだと思う。結局管理者は苦情をおそれ法令遵守としか指導がいきないので、私などは毎日神経を使っている。私の家には現実には登録していないのに勧誘の電話がかかってくるし、子供に関する郵便物が来る。防ぎようがないし個人情報はどこかで盗まれているのが現状である。

核・エネルギー・温暖化・水等地球の存亡に関わる問題がおきている。食事も安心して食べられなくなつてしまった。何事にも何を信用していけばいいのだろうか。肉・マンション等至る所で偽装がおこなわれ、現在も行われているのだろう。

残念ながら一〇〇年後私は生きてはいない。私が生きている間に何が出来るのだろうか。

私は車を持つてはいないが、別に不便を感じることはないし、必要のない車をもつなど言うのは簡単。資源を大切にと思つても毎日の生活でなぜか大量のゴミがでる。外に出れば無料のチッシユが配られている。街に外出したときには何をすればいいのだろうか。リサイクル

ルの協力はしているが、本当に有効活用されているのだろうか。

中国の近代化が日本の生活にも大きな影響を及ぼし始めた。これからどうなるのか私には分からないが、環境を守りながら近代化への歪みを直すことができるのだろうか。テレビを観ていたとき、中国で割り箸を使用するために森林が減っていくので規制をすると報道されていた。人口一三億の人たちが近代化にともない使い捨ての生活になったらどうなるのか。三〇年前まえに中国を友人と観光旅行した時のことを思い出すが、今では劇的な変化をしているのだろうか。

子供が殺される事件が多発したなかで、若い人は人権を真剣に考えて来たのではないだろうか。最近学校の周りを歩くとパトロールをしている人に必ず合う。ヨーロッパのように陸続きでたえず侵略の歴史の国と、日本の歴史をみると人権のおもさの違いを感じる。やっと日本でも被害者の生活がテレビで報道され始め、自分の問題と考えるようになってきたと思う。被害者とともに行動したとき人権がみえてくるような気がする。

日本だけでなく世界が一つの国としてつながっているような現状では、鳥インフルエンザのように防ぐのが難しい現状になってしまった。若い人に期待をしよう。きっと地球を守る

ために日本の社会を変えてくれると思う。カケルに書くことはこれで最後、一〇〇後の日本を見てみたかった。

## モンドビーノを見て

木根輝雄

昨年暮れだったと思うが、「モンドビーノ」という映画を見た。

「ワインはおすきですか？」

ところでワインについて、不思議に思うことはありませんか？

なぜ、一つ一つの値段が違うのか？

いったい誰がワインのおいしさを、値段を決めているのか？……

この映画を見るとあした選ぶワインが変わります。」

という予告編が始まるこの映画はワインの世界に流れ込んだグローバルゼーションとそれに対抗？というか、その流れとは別に昔ながらのワイン作りをしようとしている人々を描いた映画だった。

冒頭に出てくるのは夫が亡くなった後、ワイン作りに愛情のすべてを注ぎ込むイヴォンヌ・エゴブリュというフランスのワイン生産者、そしてイタリアはサルデーニア島北西部のボサでワイン作りを続ける老夫婦。この人々がそれぞれに味のある人物で、金儲けではなく、ワインが好きでたまらないといった情感が語る言葉の端々に流れ出てくる。まあ、米でも野菜でも自分の作る作物に自身と誇りのある百姓が時折ふっとみせる顔と同じ、いやもうちよつと絵になる表情が、このワイン生産者たちの顔に表れる。思わず「ワインが飲みたい」と思わせる映像だ。

### ■ ミシエル・ロラン

方や画面は切り替わる。メルセデスベンツの後部座席で大笑いしながら、車載電話で、売れるワイン作りの技術指導をおこなうおっさんが出てくる。このおっさん、ワイン作りをコンサルティングするミシエル・ロランという人物でこの映画のほぼ全編に登場する。世界十二カ国を股にかけ「フライングワインメーカー」と称される人物らしい。もちろん「東京にも講演にいったよ。」とは映画の中での彼の語り口。この御仁、サービス精神旺盛でこんな事し

やべっちゃっていいのかなあと言うことも、映画の中でいっぱい語っている、どうもこの映画の監督にしてカメラマンでもあるジョナサン・ノシターを自分にシンパシーを持つてくれている人物と想っていたのだろうか。映画が公開された後、「ノシターは詐欺師だ」とメディアでキャンペーンを張っているらしい。

ワインなどほとんど縁のない当方にはどうにも想像しがたい世界だが、いまやワインの世界には小さな畑のテロワールⅡ映画の中では「地味」と表現されていた（なんでも解説によると「地質や土壌を意味するにとどまらず日照や風通しや降雨量といった微気候、さらには科学では説明しがたいミステリアスな要素も入る」そうだ）を大事にする人々と、一方、ハイテクとグローバリゼーションを掲げるグループがあるらしい。

この後者を代表する人物としてミシェル・ロランというおっさんがおり、また、アメリカのロバート・パーカーというワイン評論家、そしてカリフォルニアのモンダヴィ一族というのが登場する。

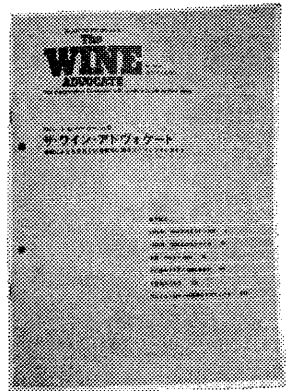
#### ■ロバート・パーカー

ロバート・パーカーというワイン評論家は「一九七八年にワイン評論誌『ザ・ワイン・アドヴォケイト』という雑誌を創刊、今日のワイン市場に絶大な影響力をもつとい

う。彼がワインの評論をする以前のワインの評論とは奇妙な比喻に満ちたもので、素人が購入の参考にしようとして

役立つものではまったくなかつたらしい。そして批評家のおおくはコンサルタントであり、輸入業者であったり、ワインの広告で成り立っているワイン雑誌に寄稿しているジャーナリストだったりしたらしい。

パーカーはその路の素人であったがためにそれまでのワインの格付けを無視し、純粹にテイスティングによって評価を下した。しかもその評価は一〇〇点法で、非常にわかりやすいついてきた。独占的な市場環境においてワインの格付けを維持再生産してきた人々にとって、旧来の格付けを無視したアメリカ人らしいアプローチは許し難いものであったらしい。この



アメリカ人の評論がフランス人にも影響力を持ち出してきた時、ボルドーの人々は激怒したという。彼の手法はまさに革命的だったのだ。しかももともとパーカーと言う人は驚異的な嗅覚と味覚、そしてそれらを記憶する抜群の記憶力の持ち主らしい。不幸なことは彼を上回る、あるいは彼と並ぶような広範な分野での評論を出来る人物がなかったために、彼の評価を相対的にするものが市場には存在しなかった。人間の好みで決めるものが特定の個人の、しかも一人の人間の好みで市場価格が決まるというのでは良い訳がない。いずれにもせよ市場は彼の評価に一喜一憂する状態になってしまった。

ワイン市場は彼に評価されるような味わいに人工的に醸造技術が援用されるようにすらなってしまうらしい。そしてそうしたコンサルタント、ワイン生産者の代表格としてミシエル・ロランやモンダヴィー一族が登場してくる。

#### ■軍配はテロワール派に

ノシターは画面においてグローバリズム側にも多くの主張をさせるのだが、どうしても語

る人々の言葉自体が事業・経営の話に回ってしまうため、どうにもこちらの方は分が悪い。かたやテロワール派はワインに対する思い入れ、情熱が伝わってくるだけに映画をみる客はテロワール派に肩入れしたくなるだろう。

映画の最後近くに出てくるちっぽけなワイン生産者のアントニオ・カサベスという言葉は記憶に残る。「生きていくためには働かなくてはいけない。自分にはワインしかないんだ。」彼はけっして豊かではない。だが彼のワインを飲んだノシターはあまりのうまさに舌をまき。経済的には豊かではない彼がいかに幸福かを映像に残す。

#### ■映画を見て車酔い状態に

東京ではもうこの映画を見ることは出来なくなっているが、まだ他の地ではやっている場所があるみたいでwebで「モンドビーノ」と入力すれば予告編は見られると思う。ただし、実際にこの映画をみてみようと思ったら注意が一つ。ノシターが家庭用ビデオのような小型カメラを片手に映す映像であり、かつ芸術的効果を出すためかは知らないが、画面が上下左



右、はたまたズームと遠景を行き交うのだ。私のように映像に包まれて映画を見るのが好きでスクリーンそばでみる人間は特に要注意！ 映写開始後一〇分ほどでなんかちよつと変だなあーと思っていたら、三〇分後完全に車酔い状態になっていた。必ず映画館の後ろの方で、しかも字幕は瞬時に読み取ってあまり映像を注意して眺めないこと。私は映画内容に興味があったのでなんとか見通したが、脂汗をかきながら必死で見る有様だった。音楽も画像に合っているし、内容的にはおもしろいのだがこの点だけは難点だ！

## ■ 最後に

さて、最後に『翔る』がこれで最後になることについてふれたいと思います。

『翔る』は一介の労働者の自己表現の場として誕生しました。ただ他人を差別しない、傷つけないという原則を除いてはどのような内容の物でも拒否しないということを原則としてきました。

私たちは『翔る』と言う媒体に、自分たちや友人達のその時々<sup>その</sup>の想いを載つけてきました。

今日の状況を振り返ると、新聞やTV、ラジオなどのマスコミ媒体は『翔る』創刊当時の状況と比べてもさらに反動的になり、ブルジョアジーによる言論規制は表面上の「民主主義」という装いとは裏腹にさらに厳しくなっています。

しかしながら、目をインターネット上に移すとき、個人による各種の政治評論、企業批判、WTO批判、消費者運動にいたるまで様々なジャンルで、かつてはせいぜい自分たちの会員の枠でしか情報発信のすべを持たなかった一介の労働者・市民・農民が自力で自身の意見を世間一般に公表できる事態を迎えています。世間の注目を浴び得るかどうかはともかくも、一介の労働者が自身の声を公表する機会が飛躍的に増えているといえます。インターネットが普及し、ホームページや、あるいはブログという媒体で一介の労働者が世間にも申す事の出来る状況はまさしく『翔る』の目指してきたものでもありました。

これまで多くの読者と投稿者に恵まれたことを編集委の一人として感謝します。最終を迎える事態になった原因の一つに私自身の無能力と努力不足があったことをここにお詫びし、ご挨拶に代えさせていただきます。

## 日本農業の復権

「翔る」最終号(〇六年五月)より

佐藤秋雄

### 序

「万人は一人のため、一人は万人のため！」を考える。

この四五年間の経験の一部を総括する以上のことではない。私の転機をなしたのは、一九八〇年九月アイヌと出会ってである。

以下陳述するにあたって、幾つかの項目分けをし項目ごとに、それぞれ独自の内容をなすことになる。しかし、その根本思想は「同等の価値(権利・義務の概念ではない)」を下敷きにする。具体的には「土の思想・大地の思想を」「農的世界・農業の基本的価値」を展開するものである。

その場合一七世紀以降の機械制大工業の発展と労働者と都市住民・市民、そして農業・農

村と農民について「書かれた歴史(理論)」に対する批判が含まれるかもしれない。なぜなら私は「科学を科学する」立場になく「この九〇年間」(ロシア革命後)の経験を自らに引きよせて現場から考察するのである。実践の指針たるものとしてである。

### 第一章 一八・一九世紀中葉の共産主義について

#### A、マルクスの思想的変遷を中心に

法学士にしてヘーゲル学徒のカール・マルクス(一八一八〜八三)は、弁護士となり小さな新聞社の記者となる。彼の思想を大きく変えたのは「森林盗材」をめぐる弁護からである。生来の正義感、人々の生活は「法律では律しきれない」ということ。「富裕と貧困」の格差、差別のある以上「森林盗材」をはじめ「食するためのパン・ドロボー」は絶えないと言うこと。「食するために盗む人々に罪はあるのか」。

マルクスをして最初にして最大の転換点をなした「新ライン新聞」運動を通して社会科学

と共産主義運動に接近することとなる。

一八〇〇年代は、フランス大革命（一七八九）の息吹を残し、イギリスにおける消費者組合運動、ラテン諸国フランスでは、労働者を中心とする大衆闘争が頻発していた。一八四〇年代に入ると一気に、ルイ・ボナパルトとビスマルクとツァーなどの覇権争いは、ある種の「国民運動」を伴っていた。スペイン・フランスにおけるフェリー、サンシモンなどの運動はブランキの後を引き継ぐかごときのブルードンという若い活動家を得て活発化していた。マルクスは、このような時期と重ねることによって世界（ヨーロッパ中心）を知ることができたのである。

一八四八年共産主義者同盟の結成と『共産党宣言』（注一）はマルクス自身の「共産主義者宣言」でもあった。「ネズミのかじるのにまかせた」（一八四五年『ド・イデ』、ドイツのイデオロギー批判において、「世界観と歴史観」を獲得していたことによって、「あれこれの世界改良」の解釈ではなく実践の指針として『貧困の哲学』（ブルードン）に対する『哲学の貧困』と『共産党宣言』を同時期に発表した。党派闘争・実践の書として書き上げたのである。

一八四八年革命は五ヶ国におよんだが、しかしフランスを除いてそのほとんどは国民運動としてブルジョア国家の成立、「国民経済国家」として結果した。『フランスにおける階級闘争』もブルードン派の中心的活動家となったバクーニンによってそのヘゲモニーは握られており、いわゆる「マルクス主義者」はごく少数にとどまった。『共産党宣言』は労働者を始めとする都市住民と市民に必ずしも受け入れられなかったと言うべきである。

『フランスにおける階級闘争』（亡命地・ロンドン）一八五〇年、を書きあげた。国民文庫版、中原稔生訳頁一二五〜一二六。マルクスは、ここで重大な転換を成し遂げた。「共和制が、その古い負担のうえに新しい負担をつけくわえたときのフランス農民の状態がどんなものだったかは、理解できる。また、農民搾取が、ただ形式の点で工業プロレタリアートの搾取と違っているだけだということもわかる。搾取者は、同一者、資本である。個々の資本家は個々の農民を抵当や高利貸し付けによって搾取し、資本家階級は農民階級を国税によって搾取する。農民の不動産所有権は、資本がこれまで農民を呪縛していた護符であり、資本が農民を工業でプロレタリアートに対してけしかけた口実である。資本の没落のみが、農民を向上させ、反資本主義的政府、プロレタリア的政府のみが、農民の経済的悲惨とその社会的

地位の低下を破砕することができる」。このマルクスの進歩は「保守的で、より以上に反動的ですらある」(『共産党宣言』)という農民規定の明確な廃棄宣言である。マルクスは、この廃棄宣言に続いて「プロレタリア的」と。つまり、一人プロレタリアのみの「プロレタリア独裁」でないことを示唆しているのである。翻訳者で解説をしている中原稔生は「マルクスの労働同盟」論で「プロレタリア独裁」を始めて明示したとしている。この時点でのマルクスが、どこまで問題意識をもっていたか。少なくとも「資本がプロレタリアにけしかけた口実」からマルクス自身が解放されたことのみはたしかであると言うことである。

一八七一年、「パリコミューン」まで、ブルードン派、バクーニン派、そしてクロポトキンや後に現れるであろう、サンジュカ運動にそのヘゲモニーは委ねられた。マルクス自身の総括として、『フランスの内乱』と『ゴータ綱領批判』に収められている。『共産党宣言』で述べられている。第二章の一〇大政策。この一〇大政策の精神は、「土地所有、税金、運輸、信用、農地改良、教育」に至るすべてを国家統制下におくことを主張している。しかし、現実におこった「都市改革」(パリ・コミューン)は、できあいの国家機関の粉砕であり、「共同・協働」の新しい運動であった。こうして、マルクスとエンゲルスは、一八七一年以降の

『共産党宣言』の各国語版や重版への序文で、「特に、第二章は時代に合わなくなった」と述べざるを得なかった。マルクスの思想的転換の第四の契機こそ「パリコミューン」であった。機械制大工業の発展ばかりか、労働者運動もまた、その要求するところと「自治・自律」(三里塚芝山連合空港反対同盟の一つのスローガン)(注二)の哲学を実践的に獲得していたと言うことができる。

ところで、一八四八年の革命の敗北は、マルクスをして「資本主義の秘密のバクロ」・ブルジョア経済学批判に向けさせた。人間主義的哲学・人間解放の理論を自然哲学(いわゆる初期マルクス)のうちに獲得し政治に踏み込んだ正義感あふれる若き共産主義者は、「これをブルジョア経済学批判」に求めたのである。こうして『経済学批判』序文・序言・序説』を何度も書き変え『要綱』『学説史』という研究ノートを残し『資本論』とするのである。マルクスは、ヘーゲルがそうであったように非常に排他的論理の展開として『資本論』を書いたのである。しかも博物館と図書館で書いたものである。

## B 『共産党宣言』をめぐる

マルクスによるマルクスの「共産主義者宣言」としての『共産党宣言』は、エンゲルスが、一八八八年のイギリス語版序文で述べているように、ダーウインの進化論を人間の社会史に歴史学に対してもなすべきものと述べている。

このような、エンゲルスとマルクスの「進化論」信奉こそが非資本主義諸国民に対して、「未開、野蛮」「無知」なる悪罵を投げかけさせた。この精神は『資本論』では、ドイツ人にして、フランスで化学の研究に明け暮れた化学者、同時に、生化学、農芸学者でもあった、Justs Freiner Von Libbig(リービヒ)(一八〇三―七三)を過大に評価した。マルクスは「地代論」を除けば、ほとんど「農業・農民問題」にふれていない。(私のこの見解に対して、田中正治氏、守田典彦氏から忠告を受けた。福富正美著『経済学と自然哲学』世界書院・一九八九年刊、を一読せよ！と)。

リービヒは、一八三八年、生体における元素代謝の理論を栽培植物に応用しようとした。一八四〇年には、元素代謝の理論(化学)を化学肥料とすることに成功する。つまり、植物は土壌の無機成分をも必要とするそれを補うものとしての肥料化の理論の確立である。

マルクスは、『資本論』でこの理論に着目し地力略奪型農業によって農業の生産力は飛躍的にのびると考えた節が見受けられる。勿論、日本型農業・複合農業・循環型(マルクスは、江戸の状況も若干は知っていたようである)農業を否定していない。むしろ、「日本型農業を模範」とさえ言っている。しかし、私には、化学を必要以上に評価していたと思えてならない。なぜなら、階級闘争や世界革命を「動物か植物か」の「物質代謝」といってはばからない「マルクス主義者」も現れる時代である。マルクスに責任はない、としても「マルクス主義」を自称している人間行為としてある以上、なんらかの責めはあるだろう。

「物質代謝」とは学術用語的には、生物学上の専門用語であり、厳密には生体学上の用語である。したがって、「物質交代・新陳代謝・物質代謝」と同意義語なのである。生物学的には、「同化・異化」の繰り返し、または、同時進行するのである。

マルクスとエンゲルスは疑いもなく「進化論」「発展史観」「文明史史観」にとらわれていた。その典型的な理論として社会主義を準備する二つの条件を挙げることができる。A、資本主義的生産様式の発展。すなわち生産手段の発展は、社会主義を準備すると言うこと。ここには効率主義、平準化主義、したがって生産力主義をみてとることができるのである。かつてレーニン「電力こそ社会主義」と述べたことさえある。このような理論を信奉する政党は

後をたたない。たとえば「三里塚空港」はプロレタリア権力が利用すれば良いとするセクトさえ現れる。B、機械制大工業の発展とは、同時に、労働者を大量に生み出し、この賃金奴隷たる労働者は、資本家の墓掘人であると。この「二大階級論」は、一九一七年一月以降、トロツキーを頭とする赤軍によってロシア農民は食糧の強制徴収に始まる大弾圧を被ることとなった。

社会主義を準備するこの二つの「理論」は、イギリス、イタリア、ドイツ、ポーランド、フランスなどで、どのように労働者階級を始めとする農民、諸民族、都市住民と市民をとらえたのか。マルクス、エンゲルスが認めるように唯一フランス、パリ労働者の決起にとどまり、ツアー、ビスマルクからの占領からの解放、「ブルジョワ的国民国家」、または「統一国民経済国家」となったのである。たしかに、「万国の労働者の団結」は広がった。それは、ドイツにおける理想主義的社会主義運動やフランスにおける無政府主義的共産主義運動と言う大衆闘争を媒介したものであったのである。ここに一八六四年の「国際労働者協会」(第一インターナショナル)の結成がある。しかし、そのヘゲモニーは無政府主義者にあつた。

西ヨーロッパにおける一八〇〇年代の階級闘争は、理想主義、無政府主義、科学的と言わ

れた共産主義運動のすべてにおいて、「都市革命」であつたことは間違いない。そこには、ルソーによつて体系化された「権利・義務」の概念しかなかった。つまり、権力・政治概念しかなかったのだと断定しても決して誤りではない。「同等の価値」概念はどこにも見あたらない。「法の下での平等」ということ以上ではなかった。

「同等の価値」について、私に多くの示唆を与えたのは、比較言語学者の田中克彦である。田中克彦は必ずしも同等の権利や価値について、その語彙、をもちいている訳ではない。私は、障碍児・者、アイヌ、沖縄、台湾、チベット、東チモールや在日諸民族とふれあうことによつて、一つの機関・共産党に組織する不合理性を理解した。「コミンテルン主義」・中央集権主義は不条理であつた。戦後のコミンフォルムも大同小異であつた。

「現在ブルジョア階級に対立しているすべての階級のうちで、プロレタリア階級のみが実際に革命的な階級である。その他の階級は、大工業とともに衰退し、滅亡する。プロレタリア階級は大工業のもつとも独自の生産物である。

中産階級、すなわち、小工業者、小商人、手工業者、農民、これらすべて、中産階級としての存在を破滅から守るために、ブルジョア階級と闘う。従つてかれらは革命的でなく、保

守的である。なおそれ以上に、反動的である」(『共産党宣言』岩波文庫、大内・向坂訳、頁五三) つづけて「ルン・ペンプロレタリア階級、旧社会の最下層から出てくる消極的なこの腐敗物」と。

「プロレタリア階級のみが……」に注意いただきたい。

マルクス、エンゲルスは、このような考え方をさらに発展させた。

「アメリカ大陸の発見」「未開で無教養で野蛮」と、『資本論』になると、その分析・総合の叙述で頻繁に多様されることとなる。この叙述に流れる「文明史観」は、ややもすれば「資本主義美化論」と受けとられてもやむをえない。あのロシア革命(一九一七年二月〜一〇月)において、武装決起し武装蜂起したのは一体誰だったのか。識字率の極めて低かったロシア農民であったことを、この九〇年間公認のマルクス主義(スターリン主義につらなる人々)といわず、反スターリン主義・マルクス主義者も無視してきたのはなにゆえか。自称、他称マルクス主義者は、ロシア革命以降でさえ、数千万人にのぼるであろうが。農民は反革命あつかいされてきた。

ロシア二月から一〇月まで、極東、シベリアに至るまで、旧共同体、大土地所有地主を粉

砕し評議会、独自の生産者組合をつくり村落共同体をつくりかえていた。モスコーでの異変は、帰還兵や小商人や旅人から得た情報により、自らの要求を数項目にまとめ、牧師・神父をはじめ教師などに書きとらせ、これをかかげた農民は「ソビエト」をいたるところで立ち上げるのである。一〇月革命とはまさに、こうした農民の武装蜂起なくしてあり得なかった。さもなければ、ペトログラードとモスコーの数十万にも満たない労働者は数千万人の農民によって「都市は包囲」されたであろう。毛沢東理論は、中国革命の二〇年も前にロシアで革命的に実験されていたかも知れない。

『ロシア農民生活』(著者、ニコラス・ワース、翻訳者・荒田洋、平凡社一九八五年刊)特に、この一〇数年来「ロシアにおける集団化」(スターリンによる)についての記録は多数出版されている。

レーニンは、このロシア農民の決起を賞賛し一〇月革命直後の布告で従来の方針を転換するのである。しかし、レーニンは一八年には早くも穀物徴発をはじめた。

ロシア一〇月革命とは、水兵をはじめ兵士と農民の決起なくしてあり得なかった。

臨時革命政府の瓦解とはまさに、ロシア帝国を支えた、その支柱(農村共同体)の崩壊、

否、刃を突きつけられることによって解体の危機にあったと解すべきである。

したがって「一〇月武装蜂起」は無血に等しかった。この意味は改めて考察されるべきである。

マルクス、エンゲルス言うところの「プロレタリア階級こそ、唯一の革命階級」とする命題は、早くも歴史的事実として崩れたと言わなければならぬ。

勿論、マルクス自身『ゴータ綱領批判』冒頭で「富の源泉は労働」に対して、「私はそんな事言っていない。もっと良く勉強してくれ」と述べており、レーニンは「労働同盟」論を展開した。だが、レーニンは、ロシア農民の実態・生活をどれほど知っていたのか。

『共産党宣言』は、「第二章の終わりで提案されている革命的諸方策には、決して特別な重みはおかれていない」（一八八八年イギリス語版へのエンゲルスの序文）のみでなく、第一章においてさえ、これを「金科玉条」「錦の御旗」とすることなく、「マルクス・エンゲルス」の思想、理論を科学しなければならぬのである。少なくとも、一九四五年以降の世界政治、階級闘争は、いわゆる大工業国（帝国主義）と言うよりは、大工業国打倒闘争として闘われた。ここに、帝国主義を包囲打倒する理論として、サミール・アミンを始めとする被植民地

諸国の経済学者の存在がある。

アルジェリア解放闘争に対するフランス労働者階級はその当初においてどうであったのか。ベトナム、今日のアフガン、イラクへの侵略戦争を北アメリカ工業労働者ほどのような立場をとっているのか。とまれ、わが、共産主義者同盟を結成するに至る主要な指導者は、ハンガリー、ポーランド労働者の決起にさいしてさえ、「労働者国家防衛」を主張したことを忘れてはならない。六〇年安保闘争においてさえ、「日本の沖繩化反対」は、革新側の主張であった。今、考えるだにおぞましいかぎりである。つまり、我々は、何処でも、何時でも、市井の人々、人民の要求に耳を傾けなければならないということであり、人々の感情を組織しなければならぬということである。労働者階級なる概念は一八世紀に「国民経済学」のうちすでに規定しているのであって、これを「科学」の名において「唯一絶対化」するのは非科学だと言うことである。科学は「一神教」ではない。

科学は、実証・歴史を含むのであるとすれば、すでに歴史となった事実の重みを踏まえねばならない。

明白になったこととは、農業に対する工業の優先を発展とみること、資本主義の非資本主



義に対する優先、すなわち、「未開・野蛮」に対する文明の対置。こうして、農民に対する労働者の、帝国臣民に対して被植民地住民の！これは、人間に対する順位づけではないか。この順位づけこそ、ブルジョアイデオロギーたる「同化政策」（物質代謝とは、同化と異化の繰り返し）であつたし、現にそうである。まさに「発達理論」とは、この同化論なのだ。「大東亜共栄」「自由のための、民主主義のための」侵略戦争、今日的には「新自由主義」なるイデオロギーである。

資本の暴力性をこそ暴露しなければならない。資本は、言語（母語）食生活に始まる文化は、もとより、民族も国境も暴力的に越えるのである。この資本の力に一役も二役も買ったのが一五世紀以来のキリスト教である。コロンブスのカリブ沿岸到達は一四九二年であり、それ以来「未開・野蛮」と称された地域に新興宗教・キリスト教を持ちこむこと。神父、牧師を先兵として資本主義は発展する。宗教史的には、あるいは文化史的には、このような事実もおさえておかなければならない。

言語（母語）に始まる文化はもとより、地域（世界）ごとの風習、慣習にいたるまで同等だと言わねばならない。この同等性を暴力的に粉碎・破壊するものこそ資本であり、軍隊で

ある。ロシア革命後のソビエト連邦、ユーゴ、今日の北アメリカ合衆国などすべては、軍隊による統一であつた。政治（政党）は、地域の経済や文化を代表する。それ故、ロシアの諸民族のソビエト化・統一制は赤軍によって、ユーゴもまた軍隊によつていた。今日の、北アメリカは、移民・移植国家ということにおいて文化面からは文字通りのモザイク国家である。このモザイクの統一に軍隊における言語、経済、市民的権利にいたるまで重要な機関をなしているのである。つまり、「国家として、国家に対して、権利・義務」を持たせ、果たすものこそ軍隊である。学校教育と軍隊は監獄をなしているのである。とりわけ軍隊は、強制なのであつて「自由」とは国家・上官の命令一下行動する「自由」以外ではない。民族性、言語、文化の「同等性・同等の価値」は、こうして破砕される。

資本は、効率、速度を求めてあくなき合理性を追求する。中央集権を求めてやまないのは、この資本の運動の結果である。そこでは地域（世界）、民族の同等性のもとより、文化までも、その同等制を認める訳にはゆかないのである。

「人間はかわりうる」とは、マルクスの言葉であつた。

私は、マルクスのお教えに従つて、「すべては疑いうる」「疑問こそ学の始まり」（脚注

一)と云う科学の眼で、人々の暮らしの改善として世界革命を！ 人々の自らの解放の一里塚として労働者・農民の権力を樹立する。

未知の世界を一步一步切り拓くのは、「直耕直産」(安藤昌益)の人々・勤労者・農民である。

## 第二章 「土の思想・大地の思想」を

### A、むらの再生、農の再生、人の再生

―農からの発信―

東洋のルソーとまで賞される安藤昌益は、一九四九年『忘れられた思想家―安藤昌益のこと―』(岩波新書)で紹介されるまであまり人々の研究はおろか、世間話しにさえなっていない。か。

E・ハーバート・ノーマン著『忘れられた思想家―安藤昌益のこと―』岩波新書訳者、大

窪愿二、一九四九年刊。E・ハーバート・ノーマンは、中国やヨーロッパでの評価と異なつて、安藤昌益を「社会政治思想家」と評価していること。徳川時代にあつて、しかも、江戸ではなく、秋田にあつて、「直耕直産直織」の共同体を展望していること、ノーマンは、ラテン系思想やカール・マルクスなども対比している。しかし、ハーバート・ノーマンは、学術書ではないと。随筆であると、断っている。私が最も注目しているのは二つ。一つは終戦直後に出版されたということ。しかも、ヨーロッパ人(カナダ人)によつて。二つ目は、戦後「岩波文化」を形づくるような人々が協力したことである。渡辺大濤、渡辺一夫、丸山眞男、羽仁五郎、桑原信夫、中野好夫、栗田賢三などなどである。

少し長くなるが一九六四年版・平凡社『百科辞典』奈良本辰也執筆を引用しておく。「彼は、封建社会の徹底的な批判者であり、働く農民の生活に至上の意味を見いだした。

すなわち、この封建社会は罪悪のかたまり、最も人間性をゆがめた(法世)なのである。が、こうした事態はなぜやってきたか。それは、直耕直織安食安衣、自然のままに働いている農民を支配者というものがあらわれて略奪しはじめたことである。そして、これまでの教養というものは、孔子、孟子はいまでもなく諸子百家から今日にいたるまで、すべて支配

階級の略奪を合理化したもので、全く、誤った説ばかりであるという。

だから、この教学の虚偽をつき、支配階級の仮面を引きはいて、これをなくし、働く農民だけの平和な世界を打ちたてなければならぬというのである。」

奈良本は、安藤昌益の思想形成は、「アイヌの生活をみて、その中に、そうした世界（自然世）の実現の可能性」をみ、また、オランダの研究をして新しい世のあり方についていつている。

なお、彼は、門弟の神山仙確の語るところによれば、まれにみるヒューマニストとして実に清らかな日常生活を送っている。

奈良本辰也の執筆時は、一九六四年であり、その後、安藤昌益研究は著しく発展した。とりわけ、秋田、岩手、青森県を中心に常設研究機関（サークルを含）をもち、学者、共産主義者、市民運動グループなど、今や、共産主義思想、哲学を語るうえで、安藤昌益の業績をさけて通れなくなっている。

三宅正彦、菅沼紀子など大学教授にはじまって、寺尾五郎、石渡博明など共産主義者にいたるまで幅ひろく注目が集まっている。（一九六四年段階では、一七〇一年から一七五六年ま

での足跡にとどまっていた。）

安藤昌益に関する三者三様の評価は一九九六年に出版された。三宅正彦著『安藤昌益と地域文化の伝統』雄山閣出版、一九九六年刊、菅沼紀子著『安藤昌益の学問と信仰』勉誠社、一九九六年刊、寺尾五郎著『安藤昌益の社会思想』『続・論考安藤昌益・下』農山漁村文化協会、一九九六年刊、

なぜ、安藤昌益をもちだしたかの意味を幾つかあげておく。

まず、共産主義とは何かと、アレコレの解釈ではなく運動であるということ。階級闘争はその一部だということ。次いで、共産主義的人間と言う事と、党ということにおいては意識性、目的的な意識性のことであり、政党という限りでは機能ということが出来る。では、目的とは何か、それはいうまでもなく「現状の打破」ということ、現代世界のうちに共産主義は準備されているということ、それは必ずしも日本帝国主義打倒、北アメリカ帝国主義打倒としてのみあるのではなく、イラン、イラク、アフガン、インドでも等しく共産主義は運動であり主義者にとっては目的である。当該支配階級を打倒し、共に生み、共に生かし、共に育てること。「共同・協働」社会を協同するのである。その場合一八〇〇年代がそうであった

ように、理想主義と無政府共産主義者が圧倒的に多数派であった。一八〇〇年代後半からは資本主義の発展（金融資本）とあいまって、無政府共産主義と労働組合主義（サンジカリズム）が多数派を占めた。つまり、階級闘争・大衆闘争という限りは、圧倒的多数派は非マルクス主義であった。だが、彼らは反共産主義ではなかった。

我々は、こうした階級闘争・大衆闘争をも理論的組織的に位置づけなければならない。一九六〇年安保闘争と七〇年安保闘争の総括の根本的相違とはまさに共産主義運動の総括ということに関わるのである。共産主義とは何か、「運動なのか、意識なのか、社会なのか」という愚問を發する諸君は、そもそも共産主義を形式主義としているのであって、思想・哲学の無知を表明しているにすぎない。そもそも「共産主義社会論」などと言うのは成立しない。我々は思想運動ではない。過渡期としての「労働者人民国家」について、しかも、さし当たつてわが国のカツコツキ「労働者国家」について理論化することは現実の今日、明日の事業として実践でなければならぬ。そもそも「共産主義社会」が何百年か、何千年か後に実現したなら「政党・政治・国家・軍隊・国境」などは、すでに死語となっているであろう。従つて、共産主義とは、運動であり、意識であり、目的（綱領）なのである。であるが故に、

「万人は一人のため、一人は万人のため」なのである。生活消費者協同組合、金融資本の典型の一つである保険会社の営業スローガンとなつたこのスローガンを労働者階級をはじめとする人民大衆の手で新鮮なものとしてゆかねばならないのである。であればこそ、将来数字を取り扱う少数の人間集団がいずれは、選挙か順番制かは別に一定規模に応じて残るであろうか。問題は、アレコレを予測することではなく、何処までも現実の運動であり、目的意識性であり、目的地に推進し犠牲をいとわない指導性を發揮する人間集団としての組織建設。これである。これは、「プロレタリア的人間の論理」などでは断じてない。これは、ひろがりゆく、ひらかれた、共産主義運動であり、共産主義的目的意識性であり、目的的な人間である。したがつて、我々は、労働者、農民をはじめとする被支配階級人民にいだかれた前衛なのである。文字通りには、我々もまた人民であり、人民の子なのであってそれ以上ではあり得ない。

特殊な論理をもって、特殊な人間集団たらしめる「プロレタリア的人間の論理」とは相入れないのである。

## B、「土の思想・大地の思想」を！

〇〇さんへ。

ご無沙汰ばかりなのに突然の手紙ですみません。お願いごとあります。

東京ではなく、〇〇市内、または〇〇市で一杯飲みたいと思います。その理由について。

「土の思想、大地の思想」を！

これこそ、今日的課題、最高最大の過激思想ではないでしょうか。

大正期から昭和期にかけて、山形県をはじめ東北地方から多くの過激思想家を生み出しました。とりわけ、山形県からは現在の農民作家に至るまで数多くの著名人を輩出しています。明治期は鹿兒島と山口から政府と結びついた権力思想と軍事理論家を生み出しました。その代表格として大村益次郎・大山巖など、しかし、明治期の思想、理論家は、福澤諭吉に代表されるように、ヨーロッパからの直輸入であり、主にイギリス、ドイツ、フランスから学んだ結果でした。このような西欧かぶれは、今日の時の総理大臣である小泉純一郎にまで引き継がれるものです。ともあれ、明治憲法と軍事理論はドイツ仕様であり、経済学はイギリス「国民経済学」を基礎としております。「殖産興業、富国強兵」は「日清、日露」をへること

によって関東と近畿に近代的都市を生み出しました。(江戸はすでに世界有数の人口密集都市であった)一定の工業の発展は農業、農民からの土地の略奪と子弟・女子の強奪・強搾取によるものであり、こうして都市住民を養った。ここに一定の知識層と労働者の結びつきをみることができます。その思想を形づくるのに、ルソー(仏)、クロポトキン(露)をはじめとしてフランスから「自由・平等・博愛」思想の流入をみてとることはたやすいところです。大正期の自由主義的雰囲気とは日本資本主義の一つの指標を示すものであります。

しかし、昭和期(一九二五)に入ると世界資本主義(帝国主義)の世界市場をめぐる闘いは一変します。日本主義は、ギョク・玉としての天皇から政治権力・霸王に祭り上げ、これを錦の御旗とする権力構造と「大東亜共栄圏」なるイデオロギーをデッチ上げアジア侵略を開始します。「アジア・太平洋戦争」とはまさに労働者と農民、なによりも、「沖縄、台湾、朝鮮、中国」の人々を悲嘆の苦しみの底につき落としました。

「二・二六事件」に象徴される陸軍将校とそれに従った青年兵士たち。この青年たちの決起を促した思想に、北一輝や大川周明の考え方が外延的に影響していたことは疑いないと思います。「戦争の犠牲になる」「貧困になる」「貧困を生み出す」者たちへの怒り、憤り、こそ

が青年将校に従った青年たちの思いではなかったかと私には思えるのです。NHKテレビ、朝のドラマ、橋田寿賀子描くところの「おしん」に代表される物語の現場こそ東北地方の寒村の一般的風景ではなかったか。こうした、環境条件の下で、大川周明、石原完爾の思想が生まれたのだと考えるのです。

橋田寿賀子が描いた物語と今日の寒村の状況は本質的に何が変わったのでしょうか。

確かに、戦後の農地解放は小作民をして土地もち農民にしました。だが、その農地は最大三町歩（北海道を除く）にされ、かつ、小作農だった農民はわずかな田畑合わせても一町歩にも満たなかったと思います。「三反百姓」「水呑み百姓」であったことに変わりはありません。一九五〇年代から農村人口は減り、一九五五年（私の定時制農業高校入試直前）には早くも「曲がり角にきた日本農業」と言われていました。ここに、美空ひばりや島倉千代子の歌が支持され、この支持者は農村出身の若者、工場労働者でありました。そして、憧れとして、石原裕次郎や小林旭を生み出したのです。

今や、こうした寒村は、過疎と言われて三〇年「お寺もお社も」朽ち果て人も住めない林野となった。農村人口は一九四五〜六年に比して半減した。

にもかかわらず、今日、私たちは、「飽食の時代」にあります。バナナ生産労働者はバナナを喰べられず、エビ養殖生産労働者はエビを喰べられず、コーヒ―豆収穫季節労働者はコーヒ―を飲めず！この他人の労働と他地域の水と窒素と食糧を奪って生活しています。これが、日本帝国臣民たる私たちです。

世界の貧困をつくり出しているのは紛れもなく私たちです。

私は

「他人の食糧を奪わない！」

「新たな貧困を生み出さない！」

を合言葉に「食糧輸入の全面禁止」を訴えたいと思っています。

大川周明や石原完爾は「農本主義」を前提に天皇に統合されるイデオロギーとして、日本の改造や「世界戦争最終論」を展開しました。特に石原は「戦争によって戦争をなくす」と。百数十日を雪の中で過ごす東北地方は、多くの思想・作家を生み出してきました。今、に生きる佐藤藤三郎、星寛治、そして幾つかの大衆的農民の芸能運動も山形を始めとして東北地方から生まれているのは何も偶然ではないと思います。

安藤昌益は、三〇〇年も前に「孔子・孟子」を始めとする既存の学問を批判し、天皇と武士階級を打倒し、直接生産者たる農民を中心とする共産主義を主張しています。共産主義という言葉が嫌いなら、共同体と称してもかまいませんが、いずれにしても「共同・協働・協同」社会を訴えているのです。宮澤賢治もまた「相互扶助」の思想のもとに「農業・農法」と村落共同体に思いをはせているのです。こうした、先人の思想から学ぼうとせず、安藤昌益は「地域文化論」であるとする学者や宮澤賢治は「仏教共同体論者」だと、いわゆる西欧かぶれの共産主義者（少数ではあるが）から悪罵をなげかけられてきました。百歩譲って、たとえ「地域文化論」「仏教共同体論」がなぜ生まれ、なぜ、今、なお研究され地域を含めて支持されてきているのか。少なくともそのような風土、時代・歴史背景と社会状況に思いをはせる労をとらなければ弧状列島の日本における共産主義運動の発展はないであろうと思うのです。

片寄った知識とは、無知と表裏をなすのであって、教室や研究室（「全共闘はこれを専門〇〇」）ならいざしらず、意識性や運動はあらゆる壁を突き破ることによって始めて可能となるのだと思います。

〇〇さん、私たちは、私たちの想いを声大にして語らなければならないと思います。私たちは「生産手段」の一つである農地（脚注二）を所有しています。しかし、同時に自然環境（山あり、谷あり、川と海と・晴と雨・雪）と格闘し、これを活用する生身の人間の身を賭した労働によって他人の生命を養っています。私たちは、単なる産業の一つを営業しているわけではありません。人間生活そのものを生産している社会活動をなしているのです。電球やテレビやタイヤや自動車を作る産業をなしているではありません。農民は農業生産物を商品にすることによって自らの再生産（子弟の養育と生産用具など）を維持しなければならないという限りでは小商品生産者です。ですが、その生産物は他人の生命を養う以上のことではなく、拡大再生産するところの資本に転化するものでもありません。従って、残る論理は、自らの再生産と他人の生命を養うという論理のみであろうと思うのです。

〇〇さんと出会って一〇年は過ぎますね。大豆畑トラスト運動を始めてさえ八年は過ぎます。

〇〇さんと初めてお会いしたおり、〇〇さんは「都会の人間があまりにも我がままなら夕立ちか大雨のとき、水田一面にビニールシートでも張ってやろうか」と述べました。この思

想は今も生きています。とても過激な思想だと思えます。爆弾の一つや二つ問題にもしない恐ろしい考えです。〇〇市周辺の水田の一面にビニールシートを張ったとすれば最上川はすぐさま氾濫することでしょう。どんな近代工法による護岸、治水設備をもってしても自然にはかなわないと思えます。酒田はもとより下流は一瞬にして水没することになるのではないでしょうか。もとより、私たちは共に生かし合うために日々汗をかいているわけですから、共に理解し合える関係として「地産地消」をすすめることとなるのだと思えます。ネットワークとは、そのような「共生・連帯」を意味するのだと思えます。

私は、私の若干の自己紹介を改めてしておきたいと思えます。と申しますのも、一杯飲むおりに話の導入部として少しでも手間が省けたらと思うからです。

私は、ガット・ウルグアイラウンドからWTOになる過程、すなわち、小沢一郎の「新自由主義」と自民党の分裂方針に強い危機感をもちました。土光臨調以降の日本の行政改革は「農・林・漁」行政の再編縮小であり、米穀の全面的自由化である。という危機意識です。

小沢一郎は、一九八〇年代後半から「新自由主義」を九〇年代に入ると政治改革（小選挙区制と二大政党論）と「小さな国家」外交と軍事・警察」論を展開していました。

私は、こうした小沢一郎の「自由主義」に危機意識をもったのです。ミニマムアクセスとして一定量輸入されていたお米は、さらに「自由貿易」の対象になるんだな、と。

私のこの危機意識は、私一人ではなく沖縄はイリオモテから北海道まで多くの農民と出会うことになりました。日本消費者連盟や日本有機農業研究会、農文協『現代農業』、日本農業新聞、日本農民組合、家の光協会、富民協会、などなど数えきれない農業団体とも知り合うことができました。しかも、こうした農業団体には、かつての仲間たちが働いていました。二重の喜びと驚きでもありました。川口さんと出会えたのも、〇〇さんと出会えたのも「農業・農民問題」に関心をもったおかげでした。

私は、従来、被抑圧民族（日本では、アイヌ、琉球・沖縄、在日諸民族）の自主・自立、自己解放闘争に連帯してきました。加えて、ようやく、農業・農民の地位向上の運動に参加したということになります。ところで、私は、この五〇年近く共産主義世界革命をかたときも忘れたことはないのですが、しかし、民族解放闘争や労働者と農民との連帯とはどのようなものか、あるいはどのように実現するか、まだ良く理解しておりません。だがしかし、これらすべての人々の共同の事業でなければ「共同の芸術」とはならないであろうと思うので



す。

「共同の芸術」としないかぎり「音にも絵」にもならないであろうと。お祭りには、太鼓も笛もなければ「祭り囃子」にならないようにです。

かような、次第で、何処かで一献かたむけたいと念じております。

二〇〇五年一〇月二四日

### 第三章 もうひとつの農業（脚注三）

—新しいむらびへり—

A、「おかみ」意識をすてること

三里塚・芝山農民（注三）は「自律自治」をモットーに、この四〇年間苦闘してきた。

「農業こそ空港に優る公共性はない！」と、農業に誇りをもって、都市住民、労働者、市民を「まきこん」で、それぞれの農法を編み出してきた。

古村は、古村なりの水田、水稻を軸とした複合農業を、戦後開拓農民は農民で微生物農法を柱として台地に合った複合農業・循環農業によって、地域に合った独自の農業を創り出してきた。

吾が日本の農民は、戦後間もない団結と連帯の精神を年々喪失してきた。戦後農民は、「農地解放」とともに、最大の生産者組合として農業協同組合を、蚕糸、林業、葉たばこ、酪農、羊毛、果樹組合を結成し大資本、企業と対抗してきた。

茨城県常東、山口武秀（注四）に代表される、生産者・出荷組合とその運動は歴史上出色の農民運動であった。

「農地解放」に引き続く、生産者・出荷組合結成運動を支えた、父母、兄弟たちのあの熱気は、日本資本主義の資本主義的発展・独占資本主義となるにしたがって、さめていった。

一九五五年すでに「曲がり角にきた農業」とは、まさに、父母、兄弟たちの団結の崩壊を意味していたのである。各種生産者・出荷組合は一九六〇年代に入ると次々と解散を余儀された。唯一残された農業協同組合（注五）は、「生産者・出荷組合」と言うよりも金融業（金貸・保険・共済など）、商社会社化・農機具販売・ガソリンスタンドにはじまって、化学・農

薬・化学肥料など、不動産業へと変貌した。

資本主義的發展、今日の日本帝国主義は、農林水を犠牲にすることによっている（脚注四）。食育と食文化の変質を強制力・政策としておしすすめた。脱脂粉乳に始まって小麦文化と肉食の導入は強制的なものである。自然成長的に、時系列的に今日の食文化における欧米化が進んだ訳ではない。その典型こそ、学校給食である。学校給食と輸入は表裏をなしていた。

一九五〇年代から六〇年代にかけての繊維製品の輸出、一九六〇年代の「トランジスタ」に見る小型家電輸出と造船などの工業製品の輸出は小麦、肉、乳製品、果樹などの輸入を加速させた。

比喩的に、おおげさに言うところ「鉄を売って生命を買う」商売を吾が日本政府と独占資本はやってきたし、現にやっていると言うことである。

農民はどうであったか。

吾が農民は農民で、かような政策に翻弄され続けてきた。農民は、自らの団結形態を農協に委託してきた。農協の結成時に見られる革命性、ボランテニア精神はおろか、「相互扶助」

の精神は微塵もみられなくなったと言うことができる。

農水省統計注（二〇〇五年二月発行文書）によれば、北米との比較で、日本の農地価格は三八倍、戸当耕作面積は一〇〇分の一である。

このような格差故に、農産物を世界市場にゆだねるべきでないと言っているのではない。

農産物と食文化はその地域（世界）、地域（世界）特有のものであると言っていること、農産物と食文化は、言語学的に母語に当たるのであって、国にあらず、クニにある。あるいは、むららにあるのである。したがって、その地域（世界）、地域（世界）で自給されるべきである。これを「地産地消」と言う。北米における、フロンティア建国の精神とは、日本語的には開拓なのである。「無主の地」・原野（脚注五）を切り拓く、そこでは、怯むこと、躊躇すること、立ちどまることは即、敗北を意味している。北米の野蛮な侵略の歴史は、植民の精神そのものだとすべきである。われわれは、このような野蛮な植民主義者・侵略主義者と手を切り、原住民の権利を認め、多数民族国家であることを認め共生を志す北米人と連帯するのである。北米独占資本とともに権利のみを主張する覇権主義的北米とはきっぱりと手を切らなければならない。北米は、移民・移植・植民の大地である。その当初より「農業で一旗あ

げよう」とヨーロッパから植民した。マルクス的には「大陸の発見」、したがって、「無主の地」として、勝手放題に、大地に線引きし、「開拓精神」を行動原理としてきた。原住民の悲劇はここに始まった。こうして、一七〇〇年代すでにヨーロッパの胃袋を満たす大食糧庫となり、世界支配戦略の一大産業を成している。それ故、北米は、今日、「かくれた輸出補助金貿易歪曲度」として、WTO農業交渉の席上で非難されている。北米は、どんな非難をあびようとも農業・農民、食糧メジャー・アグリ・ビジネスと化学会社（モンサント社など）を防衛するであろう。建国の精神をゆるがすことはないであろう。

なお、戦前の農民組合についてふれておく。農民組織について、戦前は「小作人組合」が各地に組織される。それらは、高山義三、賀川豊彦などの指導のもと一九二二（大正一一）年、日本農民総同盟、日本農民組合があいついで設立される。この一九二二年は、同時に「全国水平社」「日本共産党」も創立された。これらの「運動史」は戦後あいついで、編纂、刊行された。そのひとつに『農民組合運動史』日刊農業新聞社（名古屋）一九六〇年刊、発行者、平野力三。この「運動史」は本文八一六ページ、図表（政府統計資料倉）と年表一六二ページにおよぶもので、戦前の農民運動をほぼ網羅している。「農民史」刊行会員は一八〇

名を超える全国の農民運動家の協力を得たもので、会長は杉山元治郎であった。「農民史」表紙扉

「謹んで、本書を

日本農民組合の生みの親なる

故賀川豊彦氏に捧ぐ

また窮亡と弾圧のなかに

闘い斃れた

幾千の同志の霊に捧げる」

## B、「お米やトマト」は発信する（注六）

坂井與直は、一九九五年段階で「もうひとつの農業―新しいむら―」について考察していた。坂井與直は、農民連合・東京の理論政策委員会のとりまとめ役をしており、さらに、豊島区を中心とする「ゴミ問題」を婦人を中心とする市民とともに取り組んでいた。その報告は、随時農民連合・東京の機関誌『農といのち』に、また、『プロレタリア通信』に発表された。

その表題は、「循環型社会を目指して」であった。

『坂井與直著作集』に収められた、『プロレタリア通信』三〇号、「ごみ問題と農業」の〈二〉はじめに、の一章節を紹介する。

「今、農民連合・東京では山形県長井市のレインボープランに学ぶということで、さまざまの端初的な取り組みを行っています。ごみ問題一般ということになると、多くの専門家が優れた活動家があり、市民運動のこの間の蓄積からも私達は学んでいかななくてはなりません。農業との関連でなら若干の問題提起できるかと思えます。」として、長野県白田町、長井市の訪問を踏まえて、「地域自給・地域循環型社会」を考察している。私流には、こうして、全国的に「もうひとつの農業・新しいむら」は広がってきていると言いうると。

坂井與直の問題意識、『『今、東京で農が輝く』というテーマをかかげた私達の問題意識は、白田町の実践や山形県長井市のレインボープランと共通しているのですが、日本の首都である東京での活動は、白田町や長井市の対極にある地での活動だけに多くの困難があります。とまれ東京に代表される大都市のかかえる諸問題と白田町や長井市の地域農業の問題はメダルの裏表の関係にあるのであり、都市と農村、市民と農民が交流しつつ、双方を貫く社会シ

ステムこそ問題にし、変革の対象にしていかななくてはならないということは原則的な問題と  
思います。」

この、坂井與直の問題意識は、私たちが引き継ぐべきものである。マルクスの時代になかった「マルクス主義」は、新たに蘇るのである。

数千年来の受動的な生産階級から積極的な能動的「支配階級」とならなければならない。

吾が、兄弟たる農民は農協ごよみ、生協ごよみ、スーパーごよみから先ずもって解放されなければならない。農薬・肥料・飼料から時間たる「ごよみ」まで支配されて満足か。「背に腹は変えられぬ」、まさにそのとおりではあるが、人間誇りを失ってなお生き永えるのは子弟の養育に好ましくなからう。

「農のある街づくり」(注七)を終生自己のテーマとして、八王子市旧由木村で酪農を中心とする農民、鈴木昇は、「ペランダ栽培」「庭先農園」をすすめた。

一九六四年、東竜太郎、東京都知事は、突然、多摩地区に三〇万人都市構想を発表し、一九六六年には周辺自治体(現五市)に事業認定をした。多摩、八王子、稲城、町田・四市にまたがる現「多摩ニュータウン」「現多摩市」が出来た。この事業認定と土地収用に抵抗し抜

いた鈴木昇は、その当初から、オニヤンマ、サンショウウオ、里山をまもること、市民との共生を希って「農のある街づくり」を提唱し続けたのである。農民連合・東京の代表を引き受け、結成大会から第三回大会まで、八王子市旧木村・寺芸会館の利用することを許した。

鈴木昇は必ずしも、われわれと「主義主張」を同一にしていたわけではない。しかし、農業・農民に関心を持ち続けること、「農のある街づくり」に賛同する限りにおいては、同じ土俵にあった。

小林忠太郎の紹介と言うこともあって、旧木村（京王線・堀の内近く）の農民とそこに集う市民との交流を重ねた。とりわけ炭焼きは、窯作りに四苦八苦、薪作りやら火入れば、大森ケンタ（注一三）のように楽しく、と言うわけにゆかなかつた。

ところで、地域（世界）の自給とは、地球大を意味して使っている。この弧状列島と言うことに限るなら「複合農業」（注八）と言うことであり、「地産地消」ということであり、「生産と消費」の団結ということである。このような運動は、株式会社としては、「大地を守る会」「らでっしゅぼうや」「自然王国なつとう」など、全国的運動として「水田トラスト」「大豆畑トラスト」など遺伝子組み換え作物をつくらない！ 食べない！ 運動など、多様

である。とりわけ、三里塚ワンパック、三里塚葉物の会は先駆であつた。

問題は、農民は、社長でもあり、小使いでもあるということ。社長と言っても資本の運動法則のごとく、超過利潤、拡大再生産を必要としない「社長」である。資本の代弁者・人格としての「社長」ではない。せいぜい、子弟の養育と来年もまた、自然の恵みを得られるように「再生産費用」を必要とする才覚の社長で良いわけである。

播種と収穫を計画し記帳する、百のものを生し、百の仕事をする、同じに、社や寺や水路や里山などの「むら」の共同の祭こともやる。「祭ごと（政治）も娯楽も」むら々なのである。「ダンナ」まかせの、行政や農協まかせの村はすでに解体して久しいとするなら、自らつくり変えるのである。このエネルギーを発信する。

発信の手段は、ミカン、リンゴ、ダイコン、おコメであつたり、手紙・通信であつたり、電子であつたりするのである。味噌、醤油、つけものと言つた、その家伝来の保存食、加工品であつたりする。農民だからこそできる通信手段としての農産物での団結・連帯だ。

農民であればこそできる発信の方法は、百以上あると言わねばならない。

精気ある人間のまわりには、おのずと他人は集まるといふこと。そのエネルギーを少しで

も分けてもらおうとするものである。

「お上」に頼る人間のところには、誰れも頼りつかないと知るべきである。

もうひとつの農業―新しいむらづくり―これこそ未来である。労働者・都市住民との連帯！  
広がり深まる連帯と団結こそ、他人の食糧を奪わず、地球的規模での共生であると確信する。  
最後、東大教授にして、政府の幾つもの審議委員を努め、数多くの経済学書と日本農業論の著書多数の学者、大内力先生の言葉で終わりとする。

「私は、狭い意味で農業や農民の利害関係を代弁する気はありません。日本と日本人のこ  
とだけでなく地球的規模でものをみる場合、われわれは何を重視し、いかに行動しなければ  
ならないかを考えてみたいというのが本書の課題です。ここにはいまままで常識とされてきた  
ものの考え方や政策路線などとは、一八〇度反対の主張がいろいろ展開されているかもしれ  
ません。しかし読者のみなさんも、これまで常識としてきた考え方をひとまず傍において、  
私と一緒にことを根本に遡って見なおす努力をして下さることを期待します。いまはあらゆる  
既存の価値体系が問いなをされなければならない時代です。『農業の基本的価値』（一九九  
五年）のはしがきである。

大内力教授は、自他共に認めるマルクス経済学者である。労農派か、宇野経済学派かはと  
もあれ、晩年にして「農業の基本的価値」に行きついたことを、私は、ことのほかよろこび  
に思っている。

日本農業の復権は、労働者・市民とともに着実に始まっている。もうひとつの農業・新し  
いむらも沖繩ではオオシツタイ（源河）をはじめ全国的に点として展開されている。経済学  
者、農業経済学者、農業ジャーナリスト（注八）もこの実体を作文にして二〇年になる。そ  
の一人に大内力も位置する。

#### 第四章 自国帝国主義打倒

##### ―WTO批判―

#### A ガットからWTOへ

第二次帝国主義戦争の末期、一九四三年から四年にかけてすでに「連合国（北米、ソ連邦、

イギリス)を中心に関戦後処理をめぐってつなひきが行われていた。一九四四年には早くもその合意をみており、四五年春には数項目となって公表される。

それは、国境線の確定、分割国家の承認を含む国際連合であり、ポンドとドルを基軸とする国際的な「通貨・為替レート」の承認、国際通貨基金(IMF)と世界銀行、そして、なによりも、一九四七年に発効する「関税および貿易に関する一般協定IIガット」である。

ガットは、一九二九年から始まる長期の大恐慌以来、世界経済はブロック化が進行した。このブロック化は世界経済をして縮小と停滞をもたらした。このブロック化は、政治的には社会排外主義と植民地主義をもたらし「国民総動員」「総力戦」としての第二次帝国主義戦争となったのである。ここに、ガットは、関税を含む貿易障壁を廃止し、自由貿易を推進することによって世界の資本主義的發展を図ろうとしたのである。多国間(帝国主義間)貿易協定・GATTである。

国際連合・戦争勝利五ヶ国を常任理事国として、IMFと世界銀行は、ポンドとドルを基軸として、GATTは北米中心主義に。一方ソビエト連邦は東欧諸国の占領と「社会主義化」によって「コメコン体制」をつくり、これに対抗しようとしてきた。しかし、「帝国主義

の不均等発展」と、いわゆる「社会主義圏」は、ともにその内部から崩壊した。ここにドルの相対的地位の低下と「変動相場制」(一九七三年)への移行があり、一九八五年九月のニューヨーク市プラザホテルでの北米、英、独、仏、日、五ヶ国の蔵相、中央銀行総裁会議がある。

プラザ合意とは、ドル高による北米経済の停滞がある。その象徴として、円安(二二〇)による日本自動車の北米輸出・自動車の町デトロイトでの日本車の焼き打ち事件が多発した。つまり、「プラザ合意」とは円安を何とかしろということ、ドル高是正のため各国は通貨切り下げをしろということ。とりわけ円安を是正せよ!というものである。

この結果、一番被害をこうむったのは農業・農民である。(大野和興著『日本の農業を考える』岩波新書)

北米は一九七〇年代後半からすでに世界(西欧)の食糧庫となっていた。そのことは今も変わったわけではない。

しかし、一九七〇年代に入ると、ドイツ、日本の帝国主義的復活と世界市場の拡大(水平のみならず垂直へ)は、北米帝国主義の主要輸出産業である農産物、農業と結びつく食糧メ

ジャー、化学会社の利益率は低下する。ここに、「関税及び貿易に関する一般協定」・ガットでは決定的に不十分となった。こうして、プラザ合意に引き続くウルグアイでの多角的貿易交渉が始まるのである。ガットでは括りきれなかった、(一)農林水、(二)金融・保険、(三)旅行、(四)通信、(五)特許権や著作権といった知的所有権(『WTOとガット』津久井茂充著)と言った新しい分野が交渉課題となった。いわゆる、このウルグアイ・ラウンド(一九八六年)こそ、直接、WTO(世界貿易機関)(注九)に引き継がれるものである。

これまでは、工業製品にまつわる(原材料を含む)貿易を想定していた。だが、この多角的貿易とは、農林水に始まって、各国通貨(円、フラン、リラ、マルク、ドル、ポンド等)も売り買・貿易の対象とすることを意味している。とりわけ、知的所有・財産権の防衛と同時に売り買・貿易の対象とすることによって、世界を支配しようとするものである。古典的には、商品・技術移転・移植、したがって資本輸出こそが市場拡大であり帝国主義的覇権であった。勿論、これは原則である。加えて、生命財産も金銭で売り買いしようとするものこそ、この「多角的貿易」の意味するところである。その典型こそ生命科学の所有権、特許である。「遺伝子組み換え」の観賞植物、動物はすでに店頭を賑わしている。

一九九五年一月GATTはWTO(世界貿易機関)(脚注六)となった。条約ではなく、機関である。

一九八〇年始頭から「新自由主義」を唱えた、サッチャー、レーガン、中曽根らは、炭鉱労働組合、航空労組、国銀労働組合をそれぞれ暴力的に弾圧、解体、縮小させた。とりわけ、北米は、その裏庭とさえ言われる中南米を中心に「新自由主義」的政策を強行した。九〇年代(脚注七)に入ると貿易の自由化を一気にすすめた。中南米一〇数ヶ国は、社会資本たる資源、上下水道、通信などの民営化を北米主導の国際通貨基金に迫られた。外国資本(北米)に基幹産業のほとんどを奪われた。とりわけ、農業国でありながら農産物の輸入拡大によって農村と農民は疲弊した(注一〇)。

〇六年一月二二日大統領に就任した、ボリビアのエボ・モラレス氏は、「コカの栽培促進」を公約としていた。

中南米七ヶ国(脚注八)は、「非北米・対北米」連合を形成し「有機農業・複合農業・伝統的農業」を柱に「自力更正」の道を歩み始めている。「新自由主義」の名の下に民間企業化され、外国資本に水(水道)も電器・電話も管理され儲けをすいとられるのはいやだと労働



者、農民が立ち上がったのである。こうした国々は、非米という限りでは人的交流も盛んに行われ、東チモールとも友好関係をもとうとしている。その中枢をなしているのがベネズエラのウーゴ・チャベス大統領である。

チャベス大統領は、キューバのカストロ大統領を師とも兄とも公言している。

「WTOは農民を殺す」（大野和興著）

「韓国の農民、李 京海さんが「WTOは農民を殺す！」と叫んでナイフで胸を刺し自死するという出来事がありました。」

WTOは、北米農業の都合（注九）の良いように事を運ぼうとしてきた。二〇〇五年香港に結集したのは、反グローバリゼーション諸グループ、市民団体であったことは疑いありません。しかし、韓国とフィリピンは圧倒的に農民と農業支援グループです。日本の場合は、「脱WTO草の根キャンペーン」を始め「遺伝子組み換え食品をつくらない、食べない！」

市民グループであり、「BSE」に関心をよせる多くの消費者団体でした。

北米は、自国農業保護策を幾層にもつくり、輸出補助金注（かくれ補助金とか、貿易歪曲度と言われる）を出している。そればかりではない、北米食糧メジャーと化学会社（モンサント社などを先頭）等の種子独占・特許をテコに、いわゆる「発展途上国」の農地の買い上げや契約栽培として、「地力略奪型」農業を押しつけ農産物の価格を引き上げ、こうして地場農業を潰すのである。ここに、フィリピン農業者の怒りもある。（日本の場合輸出補助金は一円も出していない。そのかわり「高関税」で調整している）

物のやりとりですまなくなったGATTは、国籍をもつ資本の国境をまたぐ直接投資を可能にしたことである。これが、多国籍企業・グローバリゼーションと言われる所以である。

「多角的貿易・世界貿易機関・WTO」とは、まさに、「金融・保険」「サービス」と言う信用制度そのものまで国境をとっぱらったと言う事にある。国際独占体Ⅱ多国籍企業・グローバリゼーションと言えども国籍をもつことを忘れてはならない。円は円であり、ドルは何処までいってもドルである。つまり、帝国主義の烙印はしっかりと押してあるのだ。

「新自由主義」の名の下に、「空気から水」までも資本の利益追求にさらされた。

日本独占資本主義、その帝国主義野望を打ち砕くために、労働者と農民は団結しなければ

ならない。

## B 農林水貿易を中心に

自国帝国主義の敗北、打倒とは、歴史的には戦争を媒介としていた。

一八四八年、一八七一年、一九〇五年、一九一七年、一九四五年。ところが一九一七年以降の特徴の一つは民族解放闘争が焦眉の課題として国際共産主義運動史上に登場した。ここに「ローザ・レーニン・ロイ」などによる民族論、民族解放と階級闘争論が展開されてきた。スターリンによって民族解放の理論的發展は圧殺された。悪名高き「三つの規定」によってである。

一九一七年以降、東ヨーロッパ、アジア全域、中東、アフリカで資本主義国からの離脱、植民地主義と占領からの解放闘争は堰を切ったように一つの大きな流れとなった。こうした国際政治は、帝国主義本国・日本において、社会排外主義を生み出したのであった。こうして、工場労働者、市民も、農村農民も「国家社会主義」(ナチズム)に、「大東亜」なるイデオロギーに組織された。とりわけ、わが日本大帝国は、慢性的な食糧危機に一九三〇年代以

降あった。「アジア・太平洋戦争」と言われる中国侵略は「殖産興業」はかけ声であって本音は食糧増産にあった。大日本帝国軍隊は、「兵站」をもたず、食糧は現地調達、徴発を原則とした。それ故、「戦死者の五割」は餓死者と言われている。鉄砲の撃ち合いで負けたのではなく、胃袋で敗けたのである。この危険は今日のわが日本においても変わらない。カロリーベースの食糧の六〇％は輸入である。その多くは北米からである(注十一)。

北米(アメリカ帝国主義)の貿易歪曲度について

『現代農業』二〇〇四年二月号二〇〇五年一月号二月号に、九州大学教授、鈴木宣弘が連載、朝日新聞十一月二〇日朝刊でWTO農業交渉の経過を釜山・APEC報告の形で報告、使用された資料は共に農水省発表のものである。

鈴木教授は、北米の隠れた補助金について詳しく述べている。朝日新聞によれば釜山でのAPECで輸出補助金の撤廃が合意されたと。ところが、その後の報道によればEUを含む各国の利害がからみ、必ずしも一二月のWTOで実施を巡っては紆余曲折するのではと報じている。

鈴木教授の分析を中心に「貿易の歪曲度・隠れた補助金」について『現代農業』一月号を抜き書きする。

日本は一円も補助金を出していない。しかし、関税は五〇〇%である。

ところで、世界は、自国の農業保護のためA関税、B北米の輸出信用、C北米は食糧援助名目補助、Dオーストラリア、ニュージーランド等は輸出を国家貿易として補助金を出している。

関税について

各国の食糧事情や農産物との関係でそれぞれこれまで三〇〇%まで概ね認められてきた。

カナダのバター三〇〇%、脱脂乳二〇〇%、EUのバター二〇〇%、北米のバター一〇〇%、脱脂粉乳一〇〇%、タイの脱脂粉乳二二〇%「諸外国の関税水準をみると、カナダには三〇〇%近い関税品目は他にもある。わが国の米のような五〇〇%は無理としても二〇〇%〜三〇〇%になる可能性はある」

EUと日本が比較的近い関係で推移してきたのは、輸出補助金を巡っても北アメリカ、オーストラリアとニュージーランドのB・C・Dの「灰色輸出補助金」の公然化撤廃である。

釜山APACで包括的に合意をみた補助金撤廃の方針は「隠れた・歪曲した農業生産物輸出補助金」に対してどれだけ迫れるか。香港WTOで解決をみるほど簡単ではないのではないか。

カナダ、オーストラリア、ニュージーランドは農業保護の少ない国といわれている。しかし「輸出国家貿易」といわれる「貿易歪曲行為」である。

北アメリカ（中南米、南米との区別。あくまでも帝国主義を意味するものとして・筆者）の場合、「差別価格制度（FMMO）」牛乳で多用。生産者価格と輸出価格との差を財政（納税者）が負担。「国家貿易」とは、「国内価格あるいは一部の輸出先の価格を高く設定すること」によって消費者への隠れた課税を輸出補助金の原資としている。

「消費者負担型輸出補助金」として、輸出補助金相当額（ESE）という指標で統一的に計量する手法。

わが国のAMS（削減対象の国内支持総額）は、総額で見ても北アメリカより、すでに小さいのでとくに不利な対応を迫られるわけではない。北アメリカの貿易歪曲度、北アメリカの国内政策、たとえば、北アメリカの米の価格形成システム!!

ローンレート（融資単価）一万二、〇〇〇円／俵、固定支払三、〇〇〇円／目標価格一万八、〇〇〇円（現在北アメリカの実際の目標価格は、モミ一〇〇ポンド当たり一〇、五ドル、玄米一俵当たり日本円で約二四〇円）北アメリカの生産者は、政府（CCCⅡ商品信用公社）に米一俵を質入して一万二、〇〇〇円を借りる。そして、これを国際価格水準の五、〇〇〇円で売った場合、この五、〇〇〇円だけを返済すれば良いことになっている。（マーケットング・ローンと呼ばれている）さらに、固定支払三、〇〇〇円と〔※ローンレート＋固定支払い〕との差額三、〇〇〇円も支給される。

一万二、〇〇〇円十三、〇〇〇円十三、〇〇〇円＝一万八、〇〇〇円

※ローンレート制度を使っていない場合は、五、〇〇〇円で売ったら、ローンレートとの差額七、〇〇〇円が支給される。つまり、いずれにも国際価格水準五、〇〇〇円と目標価格一万八、〇〇〇円との差額一万三、〇〇〇円が政策的に補填されるしくみとなっている。

※ローンレート制度 ※政策的補填制度これが北アメリカの自国農業保護、あるいは、世界の食糧市場支配の一つの例にすぎない。

A P E C 釜山合意は一応以上のような「補助金」撤廃が含まれている。関税上限では、まだ対立があると報じられている。

#### 輸出補助金

一九九九年

EU 五五八八

米国 八〇

#### 輸出信用

一九九八年

EU 一二五四

北米国 三九二九

豪州 一五五三

カナダ 一一〇八

単位一〇〇米ドル

一月二〇日朝日新聞

輸出入についての国権の発動

〈各国の産業事情のこと、その利害のこと〉

A 関税

B 輸出信用

C 食糧援助〈国家プロジェクト〉

D 国家貿易

〈C、Dの補助金〉

ところで、われわれは、四〇年前「先制的に」「攻撃的に」「階級闘争を仕掛ける」と。「攻撃型階級闘争」「攻撃型武装闘争」を真剣に考え、これを実行した。「革命を起こす、革命をやる」と強烈な自己主張を持っていた。われわれは、自分の身のまわり、自分の眼に見える

範囲の人間以外を仲間や味方とは実際上思っていないかったフシがある。そのような意味では、「理想主義共産主義・ブランキや貧困の哲学者・無政府共産主義者・ブルードン」以下ではなかったか、と反省するのみである。われわれは、ある意味で日本独占資本主義の高度経済成長期のオトシ子であった。唯一誇れるとすれば、一九六〇年安保闘争で「すべては疑いある」(脚注一)という命題を獲得したことであり、一九七〇年闘争において国際主義として「チェ・ゲバラやヴェトナム民族解放闘争」に連帯できたこと、次いで「全共闘」として、自らの自治会権力を放棄してまで「自己否定」の論理を受け入れたことである。

われわれは、六〇年、七〇年を通して、何処までも主観主義者であった。しかし、同時に、他人の痛み、他人の歴史、他人の文化を肉体を通じて知り得る事となった。被差別部落を知り、身心障碍児者の痛みを知り、なによりも在日朝鮮・韓国、中国や台湾の人々の歴史を知ることとなった。加えて、大日本国内国植民地たるアイヌモシリとアイヌ、琉球・沖縄を知り得たことは、主観主義の反省なくしてあり得なかったのではないか。原子力発電を問う事、三里塚・芝山の農民に学ぶことも他人の痛みにも学ぶことであった。とともに、資本主義的生産様式の発展・生産手段の発達を疑うこともまた、知ったのである。被差別、被抑圧に

学ぶこと。「差別する論理・立場」の放棄とは、人々の感情や感性に学ぶことから始めなければならぬ。

『共産党宣言』的には、われわれは、この日本の帝国主義を打倒すること、わが支配階級を打倒すること、これこそが国際主義である。労働者をはじめ農民、市民を共通の利害で結ぶことなしには、自らの理想とする共同体国家はつくれない。かつて、ロシアの農民（一九一七年二月）は、坊主に自らの要求を書かせエミール共同体を全く新しくつくりかえたように、わが日本の農民も明確に、それぞれの地域に合った要求を自ら大地に書かなければならない。農業協同組合、県経済連に自らの運命をゆだねてはならない。そもそも、農民は小生産経営者なのであって、自らの地代、労働を記帳し、中期の播種、生産を計画し計算と記帳をなさなければ、商事会社、化学会社、農機具メーカーの餌食になるばかりである。農機具が何故に建設機械と異なって耐用年数も部品交換も割高なのか、農民は農民で全く新しい「生産共同体」を形成しなければならない。そして、消費者団体と言わず、工場労働者、労働組合と連帯する道を模索しなければならないであろう。かつてのロシア農民のように日本の場合にはどんな地域にあっても識字率ゼロに近い地方はないはずである。政党や農協に代行

させるのはやめるべきである。

さて、以上を踏まえて、『農林水産業ひとロメモ』平成一七年一二月（二〇〇五年一二月）、農水省大臣官房企画評価課。発行の統計表、統計図（脚注九）をもとに、ここ約三〇年間の日本農業・農民の動態をみてみよう。

『ひとロメモ』の目次は、六章からなっている。Ⅰ農林水産業関係主要指標、Ⅱ食料、Ⅲ農業、Ⅳ農林、Ⅴ森林・林業、Ⅵ水産業。

統計表、図表は一括しておく。『ひとロメモ』に収められている統計表、図表は合わせて三〇〇になるかと思われる。ここでは、約九の表・図を示しておく。

「あとがき」にかえて

私は、この作文をするに当たって、生まれ育った寒村に残る兄、甥の顔を、常陸太田市を中心に二町二村のむら人を、新庄市の農民を、沖縄のオオシツタイに入植した人々、近年「沖縄農業ツアー」で出会った都市・那覇市内農民を思いうかべながら書いた。農民連合

(注一二)(一九九五年) 結成前後全国の農村、といつてもごく限られてはいるが、で歓談した百姓の一人一人の表情を思い出して書いた。

和田山町朝日に入植間もない大森昌也(注一三)宅を訪ね、さんざん嫌みを言つて帰つてきたことも忘れられない。「インテリに百姓がわかるか」「トラックの運転手か、土方がずーと気が楽だ」などなど、ところが、年々、人間臭さといおうか、自然体である。トゲトゲさと言おうか、肩肘張つた感じが解けている。最大の理解者は、家族であると言ふこと。これこそ至宝であろう。

「もうひとつの農業―新しいむら―」と題して、一九六一年「基本農政・基本法」批判とからめて、日本農業の復権、または再生を書く予定であつた。しかし一月末日を原稿締切りと言ふことで間に合わせることができない。「日本農業の復権、または再生」については、私個人の見解・意見ではない。農業経済学者、「エントロピー学会」に籍を置く多くの大学教授、著名な農民作家(注一四)、なによりも志ある農民の声であり実践である。

私に最初に「もうひとつの農業」を示したのは藤本敏夫である。

一九八〇年代初頭に「これからは提案型運動(社会変革)でなければならぬ」と。遊歩

道のクイを打ち込みながら「森林浴」などの言語を聞き、水田もやっていると。まだ鴨川に家を建てる前であつたが、自然王国の夢を聞いたのがはじまりである。

「農業は、大工業に駆逐されないし、滅びない」ということを実践によつて主張する百姓。その典型に三里塚・芝山農民にみてとることが出来る。大森昌也もその一人であり、地域である。ただ必読文献二・三あげておく。

岩波新書『忘れられた思想家―安藤昌益―』E・ハバート・ノーマン著、家の光協会『農業の基本的価値』大内力著、家の光協会『日本農業の課題と展望』山本修編、海風社『沖縄の農業―近世から現代への変遷―』飯沼二郎、岩波ジュニア『日本農業を考える』大野和興 都市農業についての参考書、学陽書房『農』はいつでもワンダーランド』ユギ・ファーマーズ・クラブ編、学陽書房『都市の再生と農の力―大きな街の小さな農園から―』明峯哲夫

二〇〇六年一月三十一日

我が国の農地面積は469万ha。農家1戸当たりでは、米国の1/99、EUの1/10。

○ 農地面積の各国の比較

	日本	米国	EU(15)	EU(15)			国土面積に占める割合 (%)
				ドイツ	フランス	イギリス	
農地面積 (万ha)	469	37,971	12,679	1,698	2,780	1,611	
農家1戸当たりの農地面積 (ha)	1.8	178.4	18.7	41.2	45.3	57.4	
	(1)	(99)	(10)	(23)	(25)	(32)	
国土面積に占める割合 (%)	12.6*	39.4	39.2	47.6	50.6	66.0	

資料：農林水産省「耕地及び作付面積統計」2005年農林業センサス(概数値)】

USDA

“UNITED STATES – 2002 Census of Agriculture”

“Agriculture in the European Union Statistical and Economic Information 2004”

注：1) 日本は2005年、米国は2002年、EU(15)は2000年、EU加盟各国は2003年の数値である。

2) ( )内は日本に対する倍率である。

3) 日本の農地面積には、採草・放牧地等を含まない。

4) 日本の農家は「販売農家」である。

※ 北方領土を除いた国土面積に対する割合

我が国の農地価格は米国の約38倍。

○ 農地価格の各国比較 (2002年)

	日本	米国	フランス	イギリス	ドイツ
10aあたり農地価格 (千円)	1,456	38	46	130	102
[ 日本を100とした場合の比率 ]	(100.0)	( 2.6)	( 3.2)	( 8.9)	( 7.0)

資料：全国農業会議所「田畑売買価格等に関する調査結果」

USDA“2002 Census of agriculture”

EU“Agriculture in the European Union – statistical and economic information 2004”

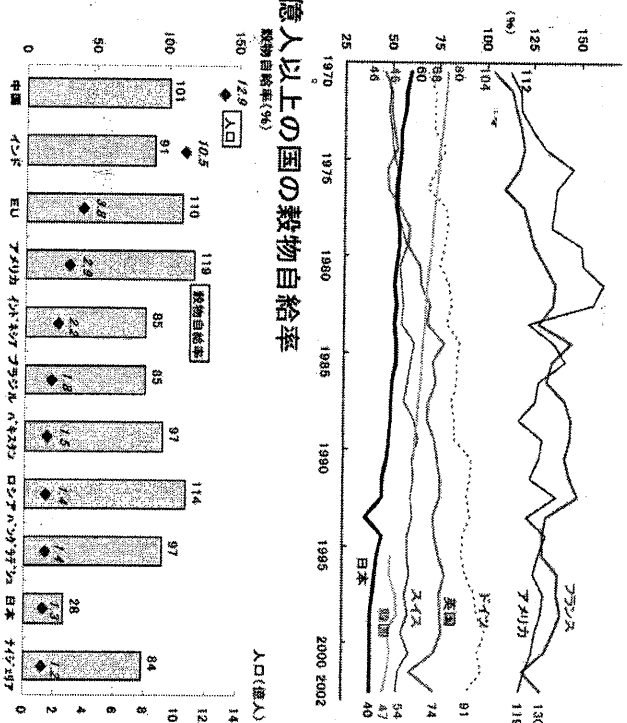
注：(1) 日本の農地価格は、都市計画法の繰引きをしていない市町村の農用地区域内の中田及び中畑価格(全国平均)を田畑別の耕地面積で加重平均した値である。

(2) 各国の「農地価格」は、米国は「Land and buildings」、ドイツは「Agricultural land」(2001年)、



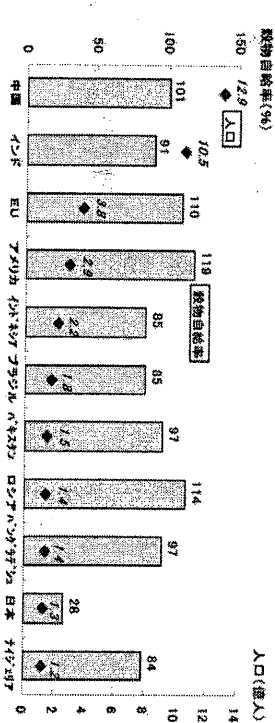
自給率は年々減少し、現在カロリーベースで40%。穀物自給率は28%で世界173カ国・地域のうち124位。人口1億人以上の国で最低。

○ 諸外国の食料自給率(カロリーベース)の推移



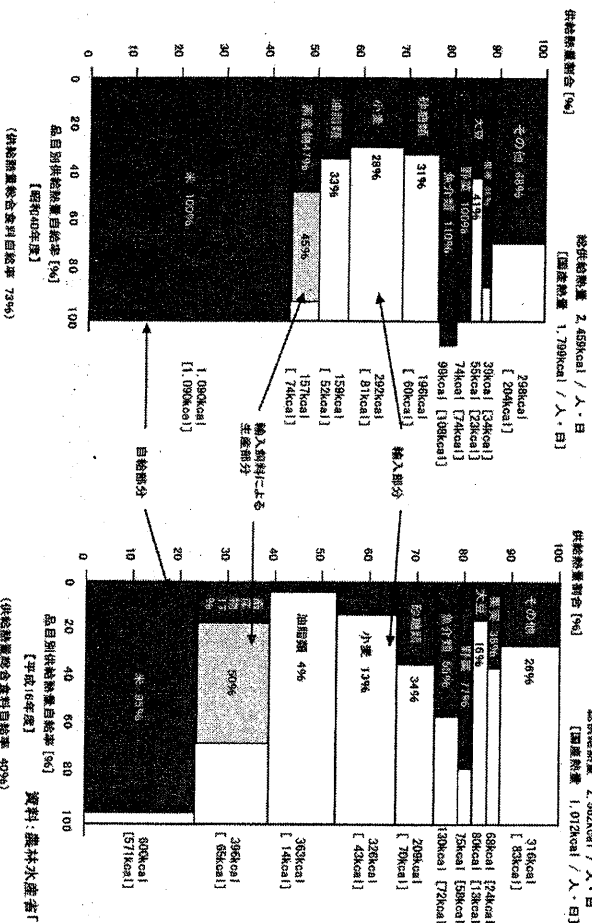
資料：農林水産省「我が国の食料自給率」より

○ 人口1億人以上の国の穀物自給率



自給可能な米の消費が減少する一方、大部分を輸入に頼る飼料や油糧原料を必要とする畜産物や油脂類の消費が増大した結果、食料自給率は昭和40年度の73%から平成16年度の40%へと大きく低下。

○ 供給熱量の構成の変化と品目別供給熱量自給率



農家戸数、農業就業人口は一貫して減少(昭和35年に比べて戸数は半分、就業人口は1/4弱)。就業人口の半数以上が65歳以上であり、高齢化が進展。

○ 農家戸数と農業就業人口の推移

	昭35年	40	45	50	55	60	平2年	7	12	13	14	15	16	17
農家戸数(万戸)	606	566	540	495	466	438	383	344	312	307	303	298	293	284
販売農家(%)	...	...	...	...	...	...	77.5	77.0	74.9	74.6	74.3	74.0	73.7	68.8
主業農家(%)	...	...	...	...	...	...	21.4	19.7	16.0	15.7	15.3	15.0	14.8	15.1
農業就業人口(万人)	1,454	1,151	1,035	791	697	636	555	490	389	382	375	368	362	334
55歳以上人口(万人)	...	...	...	166	171	185	202	227	206	207	208	207	206	194

資料：農林水産省「農林業センサス」、「農業構造動態調査」

注1：平成12年～17年の農業就業人口は、販売農家の数値である。

2：平成17年の数値は概数値である。

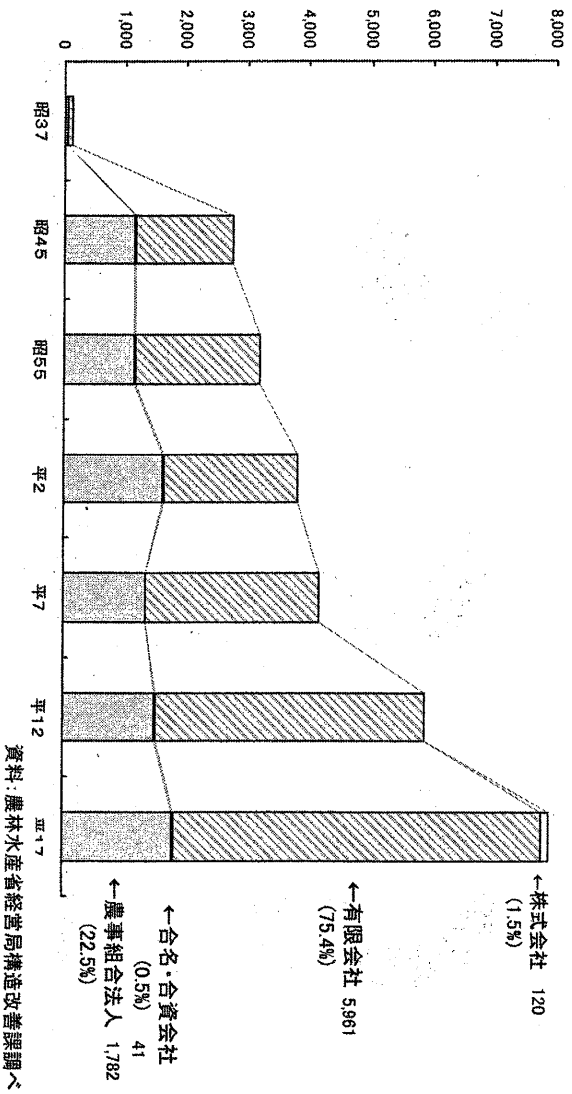
3：販売農家割合と主業農家割合は、総農家に占める割合である。

※ 販売農家：経営耕地面積が30a以上または農産物販売金額が年間50万円以上の農家。

※ 主業農家：農業所得が主(農家所得の50%以上が農業所得)で、1年間に60日以上農業に従事している65歳未満の者がいる農家。

農業生産法人数は増加しており、平成17年1月1日現在7,904法人。平成13年3月からは株式会社形態も認められ、120社が参入。

○ 農業生産法人の推移



資料：農林水産省経営局構造改善課

○ 食料自給率の推移

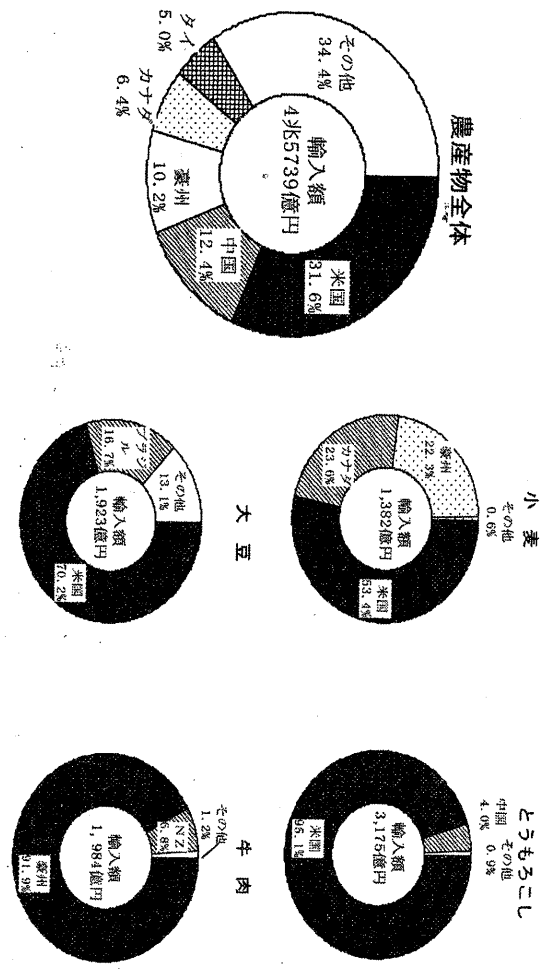
	(単位: %)															
	昭和40年度	50	60	平成7年度		8	9	10	11	12	13	14	15	16	(概算)	
米	95	110	107	104	102	99	95	95	95	95	96	95	95	95	95	95
うち主食用																
小麦	28	4	14	7	7	9	9	9	9	11	11	13	14	14	14	14
大麦・はだか麦	73	10	15	8	9	7	5	7	8	8	9	9	9	9	9	9
いも類	100	99	96	87	85	87	85	83	83	84	84	83	83	83	83	83
かんしょ	100	100	100	100	100	99	100	99	99	98	96	94	94	94	94	94
ばれいしょ	100	99	95	83	81	83	80	78	78	80	81	80	80	80	80	80
品目																
豆類	25	9	8	5	5	5	5	6	7	7	7	7	6	6	6	6
大豆	11	4	5	2	3	3	3	4	5	5	5	5	4	3	3	3
野菜	100	99	95	85	86	86	84	83	82	82	83	82	80	80	80	80
果実	90	84	77	49	47	53	49	49	44	45	44	44	39	39	39	39
別																
みかん	109	102	106	102	100	112	98	108	94	96	96	104	99	99	99	99
りんご	102	100	97	62	60	66	66	64	59	58	63	62	53	53	53	53
肉類(猪肉を除く)	90	77	81	57	55	56	55	54	52	53	53	54	55	55	55	55
牛肉	95	81	72	39	39	36	35	36	34	36	39	39	44	44	44	44
豚肉	100	86	86	62	59	62	60	59	57	56	53	53	51	51	51	51
鶏肉	97	97	92	69	67	68	67	65	64	64	65	67	69	69	69	69
鶏卵	100	97	98	96	96	96	96	96	95	96	96	96	95	95	95	95
牛乳・乳製品	86	81	85	72	72	71	71	70	68	68	69	69	67	67	67	67
魚介類	100	99	93	57	58	59	57	56	53	48	47	50	49	49	49	49
うち食用	110	100	86	59	58	60	57	55	53	53	53	57	55	55	55	55
海産類	88	86	74	68	67	66	63	61	63	62	66	66	65	65	65	65
砂糖類	31	15	33	31	28	29	32	31	29	32	34	35	34	34	34	34
油脂類	31	23	32	15	14	14	15	14	14	13	13	13	13	13	13	13
きのこ類	115	110	102	78	80	76	76	76	74	75	77	77	78	78	78	78
飼料用を含む穀物全体の自給率	62	40	31	30	29	28	27	27	28	28	28	27	27	27	27	27
主食用穀物自給率	80	69	69	65	63	62	59	59	60	60	61	60	60	60	60	60
供給熱量ベースの総合食料自給率	73	54	53	43	42	41	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40
生産額ベースの総合食料自給率	86	83	82	74	71	71	70	72	71	70	69	70	70	70	70	70
飼料自給率	55	34	27	26	25	25	25	24	26	25	25	25	23	23	23	23

(注1) 米については、国内生産と国産米在庫の取崩しで国内需要に対応している実態を踏まえ、平成10年度から国内生産量に国産米在庫取崩し量を加えた数量を用いて、次式により品別自給率、穀物自給率及び主食用穀物自給率を算出している。  
 自給率=国産供給量(国内生産量+国産米在庫取崩し量)/国内消費仕向量×100(数量ベース)  
 なお、国産米在庫取崩し量は、10年度が500千トン、11年度が223千トン、12年度が91千トン、13年度が381千トン、14年度が141千トン、15年度が147千トン、16年度が174千トンである。  
 また、飼料用の政府売却がある場合は、国産供給量及び国内消費仕向量から飼料用政府売却数量を除いて算出している。  
 (注2) 品目別自給率、穀物自給率及び主食用穀物自給率の算出は次式による。  
 自給率=国内生産量/国内消費仕向量×100(数量ベース)

全国大豆畑トラスト集会資料集最終ページより

米国に約1/3を依存しているなど、特定国への依存度が高い我が国の農産物輸入。輸入金額の多い農産物ほど特定国への依存が顕著であり、小麦やとうもろこし、大豆、牛肉などは、上位2か国で約8〜9割を占める。

○ 我が国の主要農産物の国別輸入割合(2004年)



資料:財務省「貿易統計」

農林水産業ひとコマ P-27より

国産大豆の販売数量、入札価格、作付面積の変化

年産	販売数量 (千t)	数量の対 前年変化率 (%)	落札価格 (円/60kg)	価格の対 前年変化率 (%)	価格の変化 率/数量の 変化率	大豆作付 面積 (千ha)	うち田作 大豆作付 面積 (千ha)	大豆 産量 (千t)	販売数量 割合 (%)
12年産	138,855 (100)		5,653 (100)			122.5	97.2	235.0	59.1
13年産	179,987 (130)	129.6	4,501 (80)	79.6	-0.7	144.0	119.0	270.6	66.5
14年産	185,861 (134)	103.3	4,585 (81)	101.9	0.6	149.9	125.9	270.2	68.8
15年産	148,822 (107)	80.1	9,536 (169)	208.0	-5.4	151.9	129.0	232.2	64.1
16年産	97,637 (70)	65.6	15,836 (280)	166.1	-1.9	136.8	114.8	163.2	59.8
17年産						133.9	110.4		

(注) 資料は、日本特産農産物協会資料及び農林水産省統計部「作物統計」各年次。販売数量及び落札価格の積の( )内の数字は、平成12年を100とする指数。販売数量は、交付金制度に係る販売数量。落札価格は年産別平均値。販売数量割合は大豆生産量に占める販売数量の割合である。

日本農業の復権 脚注および注(出典)

頁一二四	注一 「共産主義者の理論的命題は、決してあれこれの世界改良家によって發明され、発見された思想や原理にもとづくものでない。それは単に現存する階級斗争の、すなわちわれわれの眼前で起こっている歴史的運動の實際的縮關係を一般的に表現したものにすぎない」『共産党宣言』岩波文庫、向坂、大内訳
頁一二七	注二 一八四八年、ベルリン、パリ、ミラノで労働者市民の決起。しかし、パリを除いて、ハンガリーをはじめドイツ、イタリアの統一国家の形成に収斂させられた。ポーランドは蜂起をみずに、ロシアとビスマルクに占領されたままとなる。
頁一三七	脚注一 「すべては疑いうる」とは、「唯一絶対の前衛党神話・日本共産党」を疑うことである。マルクスとレーニンの解釈、解説は、「公認のマルクス主義者・第三インターとコミンテルン・コミンフォルム」につながる日本共産党の独占するところであった。日本共産党の権威は、戦前の渡辺政之助を始め特別警察による弾圧と代用監獄での拷問死、さらに、非転向共産主義者らの敗戦による無罪、無実解放によって、より一層高められていた。日本における階級闘争論と革命の綱領・戦略、実践的な大衆闘争方針に至るまで日本共産党指導部に異議を唱えることは即、「トロツキスト・分裂主義者」(今日的には反革命か)として断罪された時代である。この神話を崩壊せしめた、たたかいてこそ共産主義者同盟をはじめとする学生と「声なき声」に代表される市民であった。これこそ「六〇安保闘争」の偉大な成果と言わねばならない。

頁一四九	脚注二 農地と言つても「土地と土」は全く異なる。「つちはつくられる」もの。この「土問題」は、三里塚芝山連合空港「反対同盟関連文書、書籍を見よ。島寛征『壊死する風景』、福田克彦『草取草紙』、石井武『石井武の生涯』、小川源『木の根物語』」他多数。
頁一五二	脚注三 「もうひとつの農業」は、大野和興著『日本の農業を考える』の第五章の章項目である。
頁一五二	注三 宇沢弘文『「成田」とは何か―戦後日本の悲劇―』岩波新書
頁一五三	注四 山口武秀著『権力と戦う住民―高浜入千拓反対闘争―』拓植書房刊・『旗は大地とともに―常東農民闘争報告―』情況出版刊・『山口武秀著作集―大衆運動の原典―』三一書房刊。特に、『著作集』所集、「常東の甘藷価格闘争報告(一)(二)(三)」と「常東當農資金闘争が住民闘争にひきつぐもの」と「常東における新しい農民運動」は必読である。
頁一五三	注五 農業協同組合批判は体験談として『共産主義運動年誌』六号(二〇〇五年)、北原寿子「社会の再生プログラム」に詳しい。頁一二〇～一二八

頁一五四	脚注四 一九五〇年代から日本の農民は、除草剤、殺虫剤、防除剤などによる死者多数。農機具による死者多数。特に農機具は、建設機材と異なつて運転席支柱がなく、傾斜地作業中横転した場合、耕運機、トラクターの下敷などで事故にあう。 第三に、農薬・農機具による事故死に加えて、政府による政策転換、すなわち家電、繊維輸出のため、果樹、柑橘類輸入は柑橘農家を苦しめ、家電、自動車輸出は、乳製品の輸入をもたらした家族経営小規模酪農家・養豚農家を壊滅させた。一九八〇年代に豚肉輸入(デトロイトでの日本自動車焼きうち)は九州をはじめとする養豚農家の自殺者多数生み出した。この日本政府による鉦工業優先と農業政策は、農民をして塗炭の苦しみにおとしめた。「農協」批判、については『共産主義運動年誌』六号・二〇〇五年発行、北原寿子論文にゆずる。
頁一五五	脚注五 「無主の地」とは明治政府の捏造語である。「無主の地」とは、あるじのいない大地と云うこと。このようにして、先住民、原住民の生存権、生活権を銃火器で略奪したこと。これを「アメリカ大陸の発見」(マルクス)とは言わない。これは、単なる野蛮人の蛮行である。全く、同じことを吾が日本の明治政府は「アイヌモシリ」を侵略・略奪した。我々もまた、その罪を償わなければならない。「自由・民主主義」・「法律」とは権力・政治概念なのである。このような権力概念をもたずに社会たらしめてきた、優れた文化をもち、歴史をもつ北米大陸にあった先住民・原住民、そして、アイヌは近代人に尊敬されることあつても卑しめられるいわれはない。これこそ、「共産主義」を実現せしめてきた文化であつたからである。クラークと安藤昌益の哲学の差と言うべきである。あるいは、マルクスもまた、安藤昌益と対比されるか。

頁一五七	注六 金子美登 日本有機農業研究会当初からのメンバーにて「産直運動」の走りのような農民。埼玉県小川町
頁一五九	注七 都市農業と言うことでは、日本有機農業研究会前会長の沢登氏（国立駅近く）と同じく有機農研の大平博四（世界谷区）を忘れてはならない。
頁一六〇、一六三	注八 複合農業論、飯沼二郎著書『沖縄の農業』海風社、槌田劭共著『農の再生・人の再生・産直運動をめぐって』人文書院
頁一六六、一六八	注九 『WTOとガット』〈コンメンタール・ガット一九九四〉津久井茂充著 日本関税協会出版、日九年年刊 津久井茂充、大蔵省関税局勤務、関税局関税局調査室長。関連著書、同じく、日本関税協会刊『ガットの全貌〈コンメンタール・ガット〉』一九九三年など。
頁一六七	脚注六 ガットは国際条約、WTOは国際機関、WTOは、貿易上の紛争を裁定・制裁を科す権力をもった国際機関である。しかし、同時に合議と合意を必要としている。
頁一六七	脚注七 北米帝は、北米主導の「米州自由貿易地域（FTA）構想をもつ。現在北米主導で排他的な「北米自由貿易協定（一九九三）」（NAFTA）

頁一六七	注一〇 『土と健康』二〇〇五年一〇月号発行、日本有機農業研究会・機関誌「キューバだけでない中米の有機農業革命。グテマラとニカラガアのカンペシーノ運動」、吉田太郎・長野県農政部農政課企画ユニット・主任企画員 「有機農業革命が進められているのはキューバだけではない。キューバほど劇的ではないにしても、中米各国でも、いま静かに有機農業革命が進行している。日本ではあまり話題にされない中米の有機農業運動を紹介したい。とかく、食料農業農村基本計画をはじめ、あいも変わらずコストダウンやグローバル化への対応ばかりが主張されるが、こうした欧米以外の、とりわけ発展途上国の草の根の動きを押さえることで、日本の有機農業の位置づけを客観視できるし、今後の運動の進め方にとつても、何かの参考になると思うからだ」。
頁一六七	脚注八 南米南部共同市場（メルコルス）。ブラジル、アルゼンチン、チリ、ウルグアイ四ヶ国、キューバ、ベネズエラ、六ヶ国、ボリビアが加われば七ヶ国に。 中南米七ヶ国、キューバ、ベネズエラ、チリ、ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ、ボリビア、七ヶ国中今年度の選挙は、ブラジルとベネズエラがある。 今年中の大統領選挙は、ペルー、コロンビア、エクアドル、メキシコがある。この中でもペルーのオジャンタ・ウマラ氏は「自立派」
頁一七一	注十一 『現代農業』二〇〇三年十一月号、「成長ホルモン剤への不安」頁一四二

## 脚注九

『ひとロメモ』解説・図・表の説明

平成一七年(二〇〇五年)一二月、大臣官房企画評価発行『農林水産業ひとロメモ』の図表を選んで文末に示した。特にこの統計で驚いたのは、一九六一年当時北米と日本の戸当たり耕作面積は八〇分の一と言われていた。しかし、六一年の「農業基本法」一九九九年「食料・農業・農村基本法」によって規模拡大路線をとってきた吾が政府の思惑とは違つて、一〇〇分の一にもなったと言ふことである。

この『ひとロメモ』の図表に対する評価・判断はそれぞれにゆだねるとして、農水省発行の『食料・農業・農村白書』、『我が国の食料自給率—食料自給レポート—』についてコメントしておきたい。

最初に、専門用語について「自給率とは」(一)特定の品目について、その自給度合を示す品目別自給率(重量ベース)(二)基礎的な食料である穀物自給度合を示す穀物自給率(重量ベース)(三)基礎的な栄養素であるエネルギー(カロリー)、又は経済的価値である金額という共通の「ものさし」で示す総合自給率。たとえば、穀物自給率二八%、エネルギー(カロリー)ベースで四〇%といった具合にである。また、WTOにおける「農業分野」における交渉は延々一〇年たつても進展をみないのは何故か、ごく簡単に述べれば(一)各国の関税問題、(二)各国内補助金問題、(三)輸出補助金問題に大別できる。知的所有権、サービス業、金融と自由貿易はすすんだが、しかし、こと「農業分野」はそううまく行かない。それぞれの国家の成り立ちと「衣・食・住」に対する社会の考え方の違いにある。「物の見方・考え方」と言つてもよい。(次頁へ続く)

EU・ヨーロッパは、大工業の発展とは、同程度の経済的社会的マイナス成長をもたらすと言う、近代経済学、マルクス経済学を含めた合意がみられる。その政治勢力として一九六〇年代の学生運動の主要な担い手であったイデオログと活動家が象徴的に「みどりの党」となつて一定の社会的勢力となつている。ここに、「価格・所得保障」とも異なる、「都市住民・労働者のいやしの場」としての価値を山間地に求めている。単に環境問題や農民の生活保障ではない。それらを含意したものである。社会的価値を認めていると言ふことである。したがつて、「山もり・むらもり」としての価値を農民に見出し出している。農民に対して「保護や保障」といった福祉政策としてではない。社会的歴史的価値を山間地に認めていると言ふこと。

それにひきかえ吾が日本帝国は、「衣・食・住」に対するポリシーをもつていない。戦前は、否、今も「生かさず殺さず」四〇〇年も前の観念であり、足りなければ奪えば良いと。そして今日では、金で買えばよいと。何ともさもし根生である。つまり、「国家百年の計」をもたない。これは「官も民も」である。資本家も労働者も、その上に乗つたつて政治家も、政党も「国家百年の計」をもつていない。

吾が国の近代(明治)は、思想・哲学から経済学に至るまで、医術・医学を含む自然哲学に至るまで、西欧かぶれで今もそのやまいは続いている。

ヨーロッパは、すでにそこからの脱却を試みているというのである。北米は、そもそも農業こそ建国そのものであったのだ。

農水省発行の諸資料の巻頭言・まくら言葉は、次のようなものである。

「食料は、人間の生命の維持に欠くことのできないものだけでなく、健康で充実した生活の基礎として重要なものです。食料の安定供給を確保することは、社会の安定及び国民の安心と健康の維持を計る上で不可欠です。(次頁へ続く)

しかしながら、我が国の食料自給率は年々低下し、主要先進国の中で最低の水準となっています。世界の食料需給が中長期的には逼迫する可能性もあると見込まれる中で、国民の多くが、将来の我が国の食料事情に不安を抱えている状況にあります。」(H一四年・食料自給レポート)

美辞札句すぎはしないか。あまりにも客観主義的ではないか。

問題は、責任省庁として、何故、このような現状をもたらしたか。一言半句、どの報告資料を読んでもない。一九六一年、一九九九年「農基法」が方針だと言っているとすれば、小手先の処方箋である。「食料の安定供給―社会の安定及び国民の安心と健康」は、北米農業と競争することか。六一年、九九年「農基法」の根幹はいづれも規模拡大である。何のために！北米農業などと競争するためである。つまり、吾が日本政府と国民の多数は「健康も社会の安定」も世界市場・自由貿易にゆだねようと言うのである。「いのちを市場原理」にゆだねること。こうして食糧の六〇％は輸入することとなり、その三分の二は北米のみとなった。

我々は、「健康と社会の安定」を世界市場にゆだねてはならない。食糧を自動車、テレビ、家電製品と同じに扱ってはならない。したがって、農業は産業概念ではなく、社会の基礎・基盤なのであって、それ以外ではない。

富田善朗(筆名、山申明)氏には、これら政府発行の資料収集と読み込みについて、多くの助言と示唆を与えていただいた。

注一一

『百姓天国』、編・発行・財団法人、富民協会。毎日新聞社内。「農民連合」結成は、この『百姓天国』に多くを依拠してきた。

注一三

大森昌也著『自給自足の山里から―家族みんなで縄文百姓―』北斗出版二〇〇五年二月刊。(山村を復活させて日本の再生を―日本でも自給は可能―日本では自給はできないといわれるが、自給農場の金子美登さんは、「一家族二〇アールあれば自給できる。」人口一億二、〇〇〇万人、農耕地五四〇万ヘクタール、国民一人当たり四、五アールになり、五人家族なら二二、五アールである。総世帯数三、八〇〇万戸、農家戸数四五〇万戸、農家一戸当たり、自分も含めて八〜九戸の食糧をまかなえれば、自給できる。」という。)頁六三

「明治革命によつて、他の命をいただいて生きている人間という謙虚さは人間中心の尊大な考えと行動に代えられた。『穢多解放令』『水平社宣言』にしてもやはり人間中心の近代思想にとらわれている。虎松らに見られるブラクこそ、この明治革命の近代を糾す内実をもっている。お父さんは今日ではブラク民の縄文百姓として生きてゆきたい。まだよく分からないが一緒に考えていこう」と、鶏をさばきながら娘たちと話す。(頁一三六。

大森昌也著書『都市よ、さらば』麦秋社、『六人の子どもと山村に生きる』麦秋社などあり、テレビ・ドキュメント、五回全国放送、現在も継続取材中。

注一四

漁業と果樹栽培農業について安達生恒著『むらの戦後史―南伊予みかんの里農と人の物語』山下惣一著『それでも農は命綱』家の光協会・第二章「農なき国の食なき民」への道程頁六五参照  
星寛治『農からの発想』社会思想社・現代教養文庫 第一章「たそがれの都市」以下農政批判と「新しい村作り」について農業者紹介



『翔る』読者の皆さんへ  
お詫び

『翔る』定期講読、投稿執筆者の皆さんへ

お詫びとお願いの連絡をさせていただきます。

『翔る』は2004年4月15日、185号をもって廃刊とさせていただきます。誠に申し上げます。

『翔る』は1984年友人間の日常の交換日記風に始めました。その後、読者も増し編集委も集い「他人を傷つけない、思想・信条を問わない」を編集方針とし1986年頃より一定の形式の下に発行し続けてきました。同時、に職場も地域も異なる友人の共通の想いは「読み書きと個性の表現」も文化運動の一つと捉えてミニ・コミ紙を発行し続けてきたのです。普段、暑中と年賀の挨拶ぐらいの生活者である労働者にとつて、とても楽しい20年間でありました。読者、投稿執筆者の皆様方には大変お世話になったと感謝申し上げます。

私たち数人の編集子は、佐伯陽介先生なき後「文章を書く、編集する、印刷する」氣力を喪失してきました。「発行しつづける」「継続は力」などと言ってはみてもその意義の喪失は如何ともしがたく総じてバトス・情熱の喪失を回復することはできませんでした。

そこで、以下のように今後の方針を決定しました。読者、投稿執筆者の皆様方のご理解を重ねてお願い申し上げます。

原稿の依頼と小冊子の出版について

- ① 『翔る』は185号をもって廃刊とする。
- ② 残金約10万円弱を小冊子として出版する。
- ③ ついては、定期講読者に原稿用紙、400字詰で10枚程度の原稿を依頼いたします。
- ④ もつて『翔る』廃刊記念号として小冊子を製作する。
- ⑤ 小冊子を全講読者への発送をもつて一切の残務の終了とする。
- ⑥ 原稿締切は2006年1月末日とする。
- ⑦ 小冊子発行を3月末日とする

※ 今後の方針を以上のように決定いたしましたので、ご理解のほど何卒よろしくお願ひします。

2005年12月吉日

豊島文化社気付  
『翔る』編集委員会  
〒171-0021 豊島区西池袋2の38-6  
第1後藤ビル4F  
TEL・FAX 03-3981-2887

翔る最終号

2006年5月15日発行

〒172-0021 豊島区西池袋2-38-6第1後藤ビル4F

豊島文化社 TEL/FAX 03-3981-2887

発行者：和田博／編集者：渋谷映輔

カンパ 500円